

# 高等学校における通級による指導の 充実に関する研究

—キャリア発達を支援する自立活動を通して—

## 【研究の概要】

2018年4月より、高等学校における通級による指導が制度化された。高等学校を社会に出る前の最後の出口とする生徒がいる中で、高等学校段階におけるキャリア発達を支援する教育は特に重要であり、個に応じた支援の必要性が求められている。そこで本研究では、キャリア発達を支援する視点に基づいた、通級による指導である自立活動を通して、生徒が自己の特性を理解し、困難を改善・克服するための方法を提示し、高等学校における通級による指導の充実に役立てるものとする。

キーワード： 基礎的・汎用的能力，サンプルパッケージ，目指す姿の共有

平成 3 1 年 3 月  
岩手県立総合教育センター  
長期 研 修 生  
所属校 岩手県立杜陵高等学校奥州校  
福 原 康 子

## 目次

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究の目的	1
IV	研究の目標	1
V	研究の見通し	2
VI	研究の構想	2
1	高等学校における通級による指導の充実に関する研究についての基本的な考え方	2
(1)	通級による指導について	2
(2)	自立活動	4
(3)	高等学校における通級による指導の実践事例	6
(4)	高等学校における指導上の課題	6
(5)	キャリア発達を支援する自立活動	14
(6)	高等学校における通級による指導の流れ	19
2	高等学校における通級による指導の充実のための手立て	21
(1)	「サンプルパッケージ」の作成	21
(2)	サンプルパッケージ「ワークシート編」	23
(3)	サンプルパッケージ「準備編」	35
(4)	サンプルパッケージ修正の方向性	41
(5)	実践	43
3	検証計画	43
4	高等学校における通級による指導の充実に関する研究構想図	44
VII	授業実践の結果と考察	45
1	授業実践の目的	45
2	授業実践の概要	45
3	授業実践の実際	45
4	実践の分析と考察	66
5	サンプルパッケージの分析と考察	70
VIII	研究のまとめ	72
1	全体考察	72
2	研究の成果	73
3	今後の課題	73
<おわりに>		74
IX	引用文献及び参考文献	75

## I 研究主題

高等学校における通級による指導の充実に関する研究  
ーキャリア発達を支援する自立活動を通してー

## II 主題設定の理由

高等学校における通級による指導は、2018年度より実施が可能となった。制度化にあたり、文部科学省は、2016年12月、「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」及び「学校教育法施行規則第140号の規定による特別の教育課程について定める件の一部を改正する告示」を公布した。これにより、小学校、中学校、義務教育学校の前期課程において実施されている通級による指導が、高等学校及び中等教育学校の後期課程においても実施できるようになった。今年度は、45都道府県5指定都市123カ所（文部科学省、2018）で行われ、本県では、紫波総合高等学校で実施となり、今後の動向が注目されている。

高等学校における支援を必要とする生徒については、小・中学校における通常の学級に在籍する支援を必要とする生徒の割合が6.5%（文部科学省、2012）であることから、高等学校進学率が98.8%（文部科学省、2018）であることを踏まえて、高等学校においても一定程度在籍していると考えられることができる。一方、これまでの学校生活では支援を必要としなかった生徒が、進路選択に直面して、不安や困難を抱えるケースは少なくない。進路選択や進路指導にきめ細かな支援を必要とする生徒を含めれば、支援を必要とする生徒の割合は増えると推測する。特に就職においては、就職に至るまでの企業選択・応募・受験・採否後の取組等が未知の体験であること、これらの過程や就労時において自己の在り方生き方に向き合う必要があるという点で、よりきめ細かな支援が必要とされる。本県の高등학교卒業者の就職内定率は、希望者の98.8%（岩手労働局、3月発表、2018）と好調である反面、3年以内の離職率が41.4%（いわてで働こう推進協議会、2017）と、全国同様に離職率は高止まりの傾向が見られる。高卒者が離職した理由を見ると、「人間関係がづらい」（国立教育政策研究所、2013）「仕事上のストレス」（いわてで働こう推進協議会、2017）等があり、就職後にもさまざまな困難を抱えている状況が読み取れる。

このような課題への対応として、キャリア発達の視点に基づくきめ細かな個に応じた支援が効果的であると考える。キャリア発達は、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」（中央教育審議会、2011）であり、個々の子ども・若者について「きめ細かに支えていく」ことや、自己の抱える困難さについて理解を深め、困難を「乗り越えるための能力や対処方法を身に付ける」とされている。キャリア発達を促す教育は、キャリア教育として全ての生徒を対象とした学校の教育活動全体を通して通常の教育課程の中で行われている。しかしながら、生徒の中にはそうした学びを踏まえてもなお自立や社会参加に向けてキャリア発達が十分に促されず、さまざまな困難を抱えている生徒がいると考えられる。そうした生徒に対し、必要な段階を踏まえた上で、特別の教育課程を編成し、キャリア発達を支援する教育の視点を取り入れながら、自立や社会参加に向けて個に応じた学びを保障していくことは、近年のインクルーシブ教育システムの推進の報告（中央教育審議会、2012）における、「多様な学びの場」の用意という観点からも意義を見出すことができる。

そこで本研究では、キャリア発達の視点に基づく支援の一つとして、キャリア発達を支援する自立活動の在り方について、提示したい。「多様な学びの場」の一つである通級による指導は、自己の特性を理解し、困難を主体的に乗り越えるための知識や態度を学ぶ場である。キャリア発達の視点から、対象生徒の困難さや課題を整理し、対象生徒自らが、キャリア発達を踏まえた自己の課題を意識して改善する取組を行うことにより、在学中の就職活動はもとより、就職後に会う困難さに対応することができるのではないかと考える。そのための学びとなる、高等学校における通級による指導の在り方について明らかにしたい。

## III 研究の目的

通級による指導の対象生徒が、学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服し、自立と社会参加に向けて必要な力を身に付ける指導・支援の充実を図り、高等学校における通級による指導の充実に役立てる。

## IV 研究の目標

対象生徒が、通級による指導である自立活動を通して、キャリア発達を踏まえた自己の特性を理解し、困難さを主体的に改善・克服するための方法を明らかにする。教員が、キャリア発達を支援する自立活動について、イメージを持てるよう、指導の方法や留意点を、資料としてまとめ、提示する。

## V 研究の見通し

高等学校における通級による指導の実施予定校の視察や諸文献等を参考に、対象生徒の状況を踏まえた自立活動の指導・支援の方法を考案する。実践ベースとして、個別の指導計画に基づいた自立活動の学習の展開を考え、分析と考察を行い、対象生徒の様子等を事例として資料にまとめる。理論ベースとして、キャリア発達を支援する通級による指導の授業の構想並びに教材を「サンプルパッケージ」として作成する。

## VI 研究の構想

### 1 高等学校における通級による指導の充実に関する研究についての基本的な考え方

#### (1) 通級による指導について

1993年に制度化された、小学校・中学校における通級による指導の対象生徒数は、年々増加し、98,311人（文部科学省、2016）を数えた。通級による指導とは、「通常の学級に在籍し、通常の学級での学習に概ね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒に対して、各教科の指導は通常の学級で行いながら、障がいに応じた特別な指導を、個別または少人数で行う指導の形態」（岩手県教育委員会、2018）である。25年経過した今年度、高等学校または中等教育学校後期課程における通級による指導が制度化された。制度化の経緯は、2007年の学校教育法の一部改正により、高等学校等において特別支援教育がスタートしたことに始まる。また、近年のインクルーシブ教育システム構築の推進の中で、多様な学びの場を用意する観点から、高等学校における通級による指導の動向が注目されている。高等学校における通級による指導の対象は、初めての取組となることから、体制・運用等でさまざまな準備が必要となる。【表1】は、「通級による指導」制度設計（文部科学省、2016）である。

【表1】「通級による指導」の制度設計

（文部科学省、「高等学校における通級による指導の制度化及び充実方策について」）

教育課程上の位置付け	通常の教育課程に障害に応じた特別な指導を加えることができるようにする必要。（学習指導要領への位置付け、単位認定・学習評価の在り方、高等学校教育の共通性と多様性のバランスをふまえた単位数の在り方（必修教科・科目との関係、卒業要件単位数との関係、標準となる単位数等）といった論点について、中央教育審議会における学習指導要領改訂の議論の中で検討する必要）
指導の対象	対象となる障害種は、小中学校等における通級による指導の対象（※4）と同一とすることが適当。（※4 言語障害、自閉症、情緒障害、弱視、難聴、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、肢体不自由、病弱及び身体虚弱）
指導内容	指導の内容は、障害のある生徒が自立と社会参加を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するための指導（特別支援学校の自立活動に相当）とする。
実施形態	自校通級（通学の負担がない、担当教員に相談しやすい、他教員との連携が取りやすい）、他校通級（グループ指導が実施しやすい、心理的な抵抗感に配慮しやすい）、それぞれのメリットや学校・地域の実情をふまえ、効果的な実施形態を選択。
判断手続き等	①学校説明会等での説明、②生徒に関する情報収集・行動場面の観察、③生徒・保護者へのガイダンス、④校内委員会等での検討、⑤教育委員会による支援、⑥生徒・保護者との合意形成のプロセス等を参考に、学校・地域の実態もふまえ実施。
担当教員に必要な資格等	高等学校教諭免許状を有することに加えて、特別支援教育に関する知識を有し、障害による学習上又は生活上の困難の改善又は克服を目的とする指導に専門性や経験を有する教員であることが不可欠（特定の教科の免許状を保有する必要はない）。

通級による指導は、「(特別の指導を)教育課程に加え、またはその一部に替える」(文部科学省, 2018)ものであり、「教育課程上の特例となることから、教育課程の編成を行う各学校の校長が、対象となる児童生徒の実態把握等を適切に行った上で判断」(文部科学省, 2018)して、学校教育法施行規則第140条の規定に基づき、編成されるものとされている。加える場合【図1】は、

生徒全員に適用されるものとして配当された教科・科目等に加えて実施することを指す。替える場合【図2】は、全ての生徒が履修する必履修教科・科目等はそのまま受け、選択教科・科目の一部を対象生徒については自立活動に相当する指導に替えて行うことを指し、「授業時間として代替する」(文部科学省, 2018)という意味を持つ。「加える」又は「替える」により、特別な指導を受けた場合の、修得単位数は、年間7単位を超えない範囲で、修了を認めるに必要な単位数のうちに加えることができる(文部科学省, 2016)。

対象生徒は、小学校・中学校と同様であり、学校教育法施行規則第73条の21項第1項に該当

する言語障がい、自閉症、情緒障がい、弱視、難聴、学習障がい、注意欠陥多動性障がい、その他の障がいのある者と定められている。対象となる生徒は各教科等の授業を通常の学級で受けつつ、個々の障がいによる学習上、生活上の困難を改善・克服するための特別の指導を、特別の場で受けることができる。特別な指導は、特別支援学校の学習指導要領を参考にし、「自立活動」の内容を取り入れる等して、個々の障害の状態に応じた具体的な目標や内容を定めて指導を行い、

**●加える場合の例 (授業時間が増加する)**

各学科に共通する 必履修教科・科目 (31単位)	総合な 学習の 時間的 (2単位)	選択教科・ 科目 (41単位)	障がい に応じた 特別の 指導	特別 活動
--------------------------------	----------------------------	-----------------------	--------------------------	----------

授業時数が増加

- ・対象生徒は、他の生徒と同様の教育課程での履修に加えて、自立活動に相当する指導を履修する。
- ・対象生徒の卒業時の習得単位数は、標準単位数を上回る。

【図1】特別の指導を教育課程に加える場合

※新学習指導要領では、総合的な学習の時間は、総合的な探究の時間に変わる。

**●替える場合の例 (授業時間が増加しない)**

各学科に共通する 必履修教科・科目 (31単位)	総合的 な学習 の時間 (2単位)	選択教科・科目 (41単位)	障がい に応じた 特別の 指導	特別 活動
--------------------------------	----------------------------	-------------------	--------------------------	----------

- ・対象生徒は、他の生徒それぞれが履修する選択教科・科目の中の一部に替えて、自立活動に相当する指導を履修する。
- ・対象生徒の卒業時の習得単位数は、基本的に他の生徒との同様に標準単位数となる。

【図2】特別の指導を教育課程の一部に替える場合

(岩手県教育委員会,  
「高等学校における「通級による指導」の手引き」)

「特に必要があるときは、障害の状態に応じて各教科の内容を取り扱いながら行うことができる」（文部科学省、2016）とされており、従前の「障害の状態に応じて各教科の内容を補充するための特別の指導を含むもの」という内容は変更され、教科の補充が第一義ではないことに留意する。一方、特別な場とは、通級による指導を行う場である。なお、通級による指導の対象生徒については、「医学的な診断の有無のみにとらわれることのないよう留意し、総合的な見地から判断すること」（文部科学省、2018）とされている。

実施形態としては3種類あり、生徒が在学する学校において指導を受ける自校通級、他の学校に週何単位時間か定期的に通級し指導を受ける他校通級、通級による指導の担当教員が該当する生徒がいる学校に赴き、または複数の学校を巡回して指導を行う巡回通級である。それぞれの特色や学校・地域の実情を踏まえ、効果的な実施形態を選択することが必要である。

高等学校における通級による指導は、2018年度は、45都道府県5指定都市123カ所（文部科学省、2018）で行われている。本県では、紫波総合高等学校で実施となり、学校設定教科ソーシャルスキルにおける学校設定科目ソーシャルスキル基礎（1年生全員が受講）をベースとして、対象生徒には、2年生でソーシャルスキルA、3年生でソーシャルスキルBが自立活動として各2単位で実施されることとなった。

## (2) 自立活動

通級による指導は、特別な教育課程の編成により行われるものであり、2016年12月に学校教育法施行規則一部改正により「障害による学習上又は生活上の困難を改善し、又は克服することを目的とする指導とし、特に必要があるときは、障害の状態に応じて各教科の内容を取り扱いながらできるものとする」として、自立活動にて行うことが明確化された。

自立活動は、授業時間を特設して行う自立活動の時間を中心として、各教科等においても自立活動の指導と密接な関連を図って行われなければならない。また、高等学校新学習指導要領（2018、以下 新学習指導要領という）においては、障がいのある生徒について、「家庭、地域及び医療や福祉、保健、労働等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で生徒への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し活用することに努める」とともに「個々の生徒の実態を的確に把握し、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用するもの」とされている。さらに、「特に、通級による指導を受ける生徒については、個々の生徒の障害の状態等の実態を的確に把握し、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用する」としており、通級による指導における2つの指導計画の作成並びに活用は、必須事項と捉える。なお、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（2018、以下 新特別支援学校学習指導要領解説という）における「今回の改訂の要点」では、個別の指導計画の作成について、「実態把握から指導目標（ねらい）や具体的な指導内容の設定までの手続きの中に「指導すべき課題」を明確にすること」が新たに示されている。また、指導内容としては、「個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること」や「個々の児童または生徒が、自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げること」が示された。さらに、通級による指導においては、「各教科と通級による指導の関連を図るなど、教師間の連携に努めるものとする」ことが新たに示されている。

自立活動の目標は以下のとおりである。

個々の児童または生徒が自立を目指し、  
 障害による学習上又は生活上の困難を  
 主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、  
 もって心身の調和的発達を基盤を培う。

このことから、自立活動の指導は、「障がいによる学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取組を促す教育活動」であり、一人一人の生徒の実態に対応した活動は、生徒自らの主体性に基づく活動である必要性が分かる。

自立活動の指導は、「実態把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、個別に指導目標（ねらい）を達成するために、学習指導要領等に示されている内容から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて設定されるもの」である。

具体的な指導内容は、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障がいによる学習上または生活上の困難を改善・克服するために必要な要素で構成されており、それらの代表的な要素としての27項目を、6つの区分に整理したものである。6つの区分は、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」であり、6つの区分の下にそれぞれ3～5の項目が示されている。

6区分27項目（現行の特別支援学校学習指導要領解説自立活動編は26項目）は、【表2】のとおりである。

**【表2】自立活動の区分と項目**

（文部科学省、「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編」）

区 分	項 目
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること (4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること（新設） (5) 健康状態の維持・改善に関すること
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること (2) 状況の理解と変化への対応に関すること (3) 障害による学習上または生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること (2) 他者の意図や感情の理解に関すること (3) 自己の理解と行動の調整に関すること (4) 集団への参加の基礎に関すること
4 環境の把握	(1) 保有する感覚の活用に関すること (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること（改訂） (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること（改訂） (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること (4) 身体の移動能力に関すること (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること (2) 言語の受容と表出に関すること (3) 言語の形成と活用に関すること (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

6つの区分は従前と同様であるが、発達障がいを含めた多様な障がいや状態に応じた指導の一層の充実のため、「1 健康の保持」に1項目が新設され、「4 環境の把握」の(2)と(4)の項目が改訂された。各教科が学習指導要領に示された内容のすべてを指導すべき内容として示した基準であるのに対し、自立活動の内容は、区分ごと示された内容の中から、対象生徒に必要な項目を選定し、それらを相互に関連づけて具体的な内容を設定することになる。そのため、指導にあたっては、対象生徒の困難さを改善・克服するためにどの区分のどの項目から具体的な指導をするか、指導の姿がどうなっていけばよいか等「見立て」が重要になってくる。対象生徒は、「見立て」に基づいた通級による自立活動を通して、困難さを主体的に改善・克服できるようになると考える。

### (3) 高等学校における通級による指導の実践事例

文部科学省では、2014年度から2016年度にかけて「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育充実事業」を延べ22校で行った。通級による指導のモデルとなる事例を、高等学校における「通級による指導」実践事例集（文部科学省、2017）として、まとめている。

各校の報告内容は、対象生徒決定、個別の指導計画の作成及び指導の評価、指導体制・校内研修、教育委員会の取組等、多岐にわたる。その中から自立活動の6つの区分の中のどの内容について指導したものが示されているものを中心に、一部を抜粋し、【表3】に示す。

【表3】通級による指導 実践事例

（文部科学省、「高等学校における「通級による指導」実践事例集」より一部抜粋）

学校名	自立活動の区分	具体的指導内容
北海道土幌高等学校	心理的な安定 身体の動き コミュニケーション	ソーシャルスキルトレーニング 上高カフェ 等
青森県立北斗高等学校	心理的な安定 人間関係の形成 コミュニケーション 等	認知機能強化のトレーニング ビジョントレーニング ソーシャルスキルの指導 等
千葉県立佐原高等学校	身体の動き	身体バランス・歩行 協調運動（ボール等）等
神奈川県立釜利谷高等学校	コミュニケーション 等	求人票学習 面接試験対策 礼状指導 等
大阪府立岬高等学校	健康の保持 コミュニケーション 等	白杖体験 点字の学習 視覚補助具の実習

これらの報告からは、高等学校における自立活動の内容の多様さ、幅の広さを感じることができる。それは同時に多様な生徒が在籍していることを意味する。指導の対象についても、入学間もない1年生を対象としたものから、就職間際の3年生を対象としたもの、指導の形態については、複数名や小集団を対象としたものから、マンツーマンと思われるもの等、さまざまな実践が見られた。

### (4) 高等学校における指導上の課題

ア 新学習指導要領に示された高等学校における特別な配慮を必要とする生徒への指導

新学習指導要領においては、「特別な配慮を必要とする生徒への指導」が、初めて項立てされた。その中では次のことが示されている。

- 1 障害のある生徒などについては、特別支援学校等の助言または援助を活用しつつ、個々の生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行う。
- 2 障害のある生徒に対して、特別の教育課程を編成し、障害に応じた特別の指導（以下「通級による指導」）を行う場合には、特別支援学校高等部学習指導要領に示す自立活動の内容を参考とし、指導する。
- 3 障害のある生徒などについては、関係機関との連携を図り、個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個別の指導計画を作成し活用を努めること。特に通級による指導を受ける生徒については、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用する。

新しく示されるのは、通級による指導、長期的な視点での関係機関との連携、個別の教育支援計画並びに個別の指導計画の作成等である。高等学校段階における特別支援教育に関わる事柄が具体的に明示されたことは、意義深いと言える。

#### イ 高等学校における進路

平成30年度の学校基本調査（文部科学省，2018）によれば，高等学校進学率は98.8%であり，高等学校卒業後に大学・短期大学・専門学校へ進学する生徒は約7割と多い一方で，高等学校卒業生の2割にとっては，社会に出る前の最後の出口となっている。本県においては約3割の生徒が就職しており（岩手県政策地域部，2018），若い年齢で就職する人が全国平均よりも割合として多い。そこで，高等学校においては，キャリア教育の視点がより重要なものとなると考え，高等学校におけるキャリア教育の現状と課題について触れることとする。

#### ウ キャリア教育の変遷

「社会的・職業的自立を促し，学校から社会・職業へ円滑に移行すること」（中央教育審議会，2011）を目指すキャリア教育は，約20年にわたりその重要性が示されてきた。社会に出る前の最後の出口となる高等学校では，特にキャリア教育の充実が求められていると言える。

新学習指導要領総則においては，「社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること」と示されており，小学校から高等学校までの各段階でキャリア教育を行うこととされている。要とされている特別活動は，「人間としての在り方生き方についての自覚を深める場」であり，自立に向けた資質・能力を身に付けていくことができるよう，人間としての在り方生き方について自覚を深める場等を活用することとなっている。また，児童生徒が自らの学習活動等の学びのプロセスを記述し，振り返ることができるポートフォリオ的教材である「キャリア・パスポート（仮称）」を作成し，小学校から高等学校までの「学びの記録」として活用することが求められている（中央教育審議会，2016）。

キャリア教育は，「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」（中央教育審議会，2011）とされている。キャリア教育の登場は1999年であるが，その後定義の見直しが行われ，職業に関する知識や技能を身に付けさせるキャリア教育から，キャリア発達を支援するキャリア教育へと変化している。

【表4】キャリア教育の定義の変遷

年	答申・報告書の名称	定義
1999	中央教育審議会 初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）	「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」
2004	キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書	端的には「児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てる教育」 「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」
2011	今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）	「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」

エ キャリア発達と育成する能力

キャリア教育は、2004年報告を踏まえた2011年の定義によると、「キャリア発達を促す教育」とされている。促すとされるキャリア発達は、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」（中央教育審議会，2011）と示されている。

キャリア発達は、各学校段階で求められる発達課題【表5】があり、これは、2011年の答申より10年近く前の2002年に出されたものであるが、『基礎的・汎用的能力』の目標設定のための議論の糸口の一つとして活用」（文部科学省，国立教育政策研究所，2014）するものとして、その後に出された「高等学校キャリア教育の手引き」（文部科学省，2011）等にも載っている。これによれば、小学校段階では自己や他者への関心を育て、身の回りの仕事等への関心を高めること、中学校段階では、自己理解と自己有用感をもち、興味・関心に基づく職業観・勤労観を育てること、そして高等学校段階では、自己理解の深化、職業観・勤労観の確立・将来設計の立案と社会移行の準備、進路の吟味、等である。高等学校段階では、社会での自立を意識した発達課題を位置付けている。

【表5】学校段階別に見た職業的（進路）発達段階，職業的（進路）発達課題  
（国立教育政策研究所，「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」）

小学校段階	中学校段階	高等学校段階
＜職業的（進路）発達段階＞		
進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
＜職業的（進路）発達課題＞		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己及び他者への積極的関心の形成・発展</li> <li>・ 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上</li> <li>・ 夢や希望，憧れる自己イメージの獲得</li> <li>・ 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 肯定的自己理解と自己有用感の獲得</li> <li>・ 興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成</li> <li>・ 進路計画の立案と暫定的選択</li> <li>・ 生き方や進路に関する現実的探索</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己理解の深化と自己受容</li> <li>・ 選択基準としての職業観・勤労観の確立</li> <li>・ 将来設計の立案と社会移行の準備</li> <li>・ 進路の現実吟味と試行的参加</li> </ul>

キャリア発達は各段階で示されている課題がある一方で、個によって異なるとされる。2011年の答申によれば、キャリア発達は、個々の子ども・若者でそれぞれ異なるため、「一人一人のキャリア発達を促すよう、きめ細かく暖かく支えていくこと」（中央教育審議会，2011）が示されている。このことからキャリア発達には、各段階での発達課題を踏まえつつも、個に応じ

た支えが重要であることが分かる。

また、キャリア発達を促す教育であるキャリア教育で育成すべき力は、「基礎的・汎用的能力」とされている（文部科学省，2011）。基礎的・汎用的能力は、「人間関係形成・社会形成能力」，「自己理解・自己管理能力」，「課題対応能力」，「キャリアプランニング能力」の4つの能力（以下，4能力）によって，構成されている【表6】。

【表6】基礎的・汎用的能力

（中央教育審議会，「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」）

基礎的・汎用的能力 4能力	
人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し，相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに，自分の置かれている状況を受け止め，役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し，今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について，社会との相互関係を保ちつつ，今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に，自らの思考や感情を律し，かつ，今後の成長のために学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立ててその課題を処理し，解決することができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し，自らが果たすべきさまざまな立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け，多様な生き方に関する様々な情報を取捨選択・活用しながら，自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

この4能力は，「4領域8能力の枠組み」（国立教育政策研究所，2002）を，その後に提唱された他省の類似性の高い能力論を踏まえて，再構築したものであり，これらの能力は「包括的な能力概念」であるが，「必要な要素をできる限り分かりやすく提示する」という観点でまとめられたものであり，これらの能力は，「相互に関連・依存した関係」にあり，「すべてのものが同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない」のである。

なお，本県においては，この「基礎的・汎用的能力」が発表される1年前に，「いわてキャリア教育の手引き」（岩手県，2010）によって「いわてキャリア教育指針」が示され，「総合生活力」と「人生設計力」の2つの能力（以下，2能力）が示されている【表7】。

【表7】「いわてのキャリア教育」で育成する力

（岩手県教育委員会，「いわてキャリア教育の手引きーキャリア教育の推進に向けてー」）

「いわてのキャリア教育」で育成する力 2能力	
総合生活力	児童生徒が将来の社会人・職業人として自立して生きるために必要な能力
人生設計力	児童生徒が主体的に人生計画を立て，進路を選択し，決定できる能力

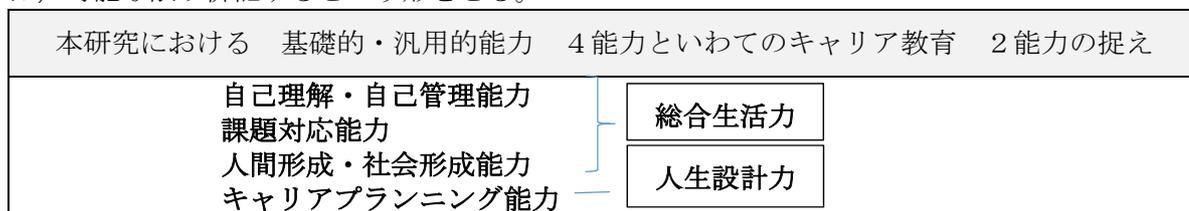
その後，2011年の答申を受け，翌年には，「いわてが目指すキャリア教育 ※リーフレット」（岩手県，2012）にて【表8】のように，中央教育審議会の「基礎的・汎用的能力」である4能力と本県の2能力の具体の要素について，まとめて整理している。

【表8】「基礎的・汎用的能力」と「総合生活力」「人生設計力」の具体の要素  
 (岩手県教育委員会, 「いわてが目指すキャリア教育」リーフレット)

		●基本的な生活習慣の確立 ●健康の増進 ●体力の向上 ●食育の推進 など	体力 健康	総合生活力
基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力	●他者の個性を理解する力 ●他者に働きかける力 ●コミュニケーション・スキル ●チームワーク ●リーダーシップ など	豊かな人間性	
	自己理解・自己管理能力	●自己の役割の理解 ●前向きに考える力 ●自己の動機付け ●忍耐力 ●ストレスマネジメント ●主体的行動 など		
	課題対応能力	●情報活用能力 ●基礎学力 ●計画実行力 ●創造力 ●企画力 ●意志決定力(選択力) ●問題(課題)解決力 ●学習意欲 ●集中力 ●社会常識 など	確かな学力	
	キャリアプランニング能力	●進路決定力 ●先見性 ●進路選択力 ●進路情報活用力 ●人生観 など	設計力 将来力	人生設計力
		●働くことの義務と権利の理解 ●職業の意味の理解 ●職業に関する知識・技能の習得 ●職業適性判断力 ●職業資格取得 ●労働の現実を知る ●労働意欲の涵養 ●ビジネスマナー ●勤労観の育成 ●職業観の育成 など	勤労観 職業観	
		●現代社会の理解 ●国際社会の理解 など	社会を把握する力	

これによれば、文部科学省による基礎的・汎用的能力とされる4能力と本県における2能力はおおむね、重なることが分かる。本県における2能力の捉えは、基礎的・汎用的能力に、「社会を把握する力」としての現代社会の理解や、「健康・体力」としての基本的な生活習慣の確立などを追加したものである。

本研究では、基礎的・汎用的能力の4能力は、高等学校生段階のキャリア発達に必要な内容を捉えやすい語句となっていることから、基礎的・汎用的能力の4能力を用いていく。一方、本県においては、総合生活力と人生設計力が浸透している実態から、基礎的・汎用的能力の4能力といわてのキャリア教育の2能力を、次項のように大枠で捉え、いわての2能力については、可能な限り併記するという形をとる。

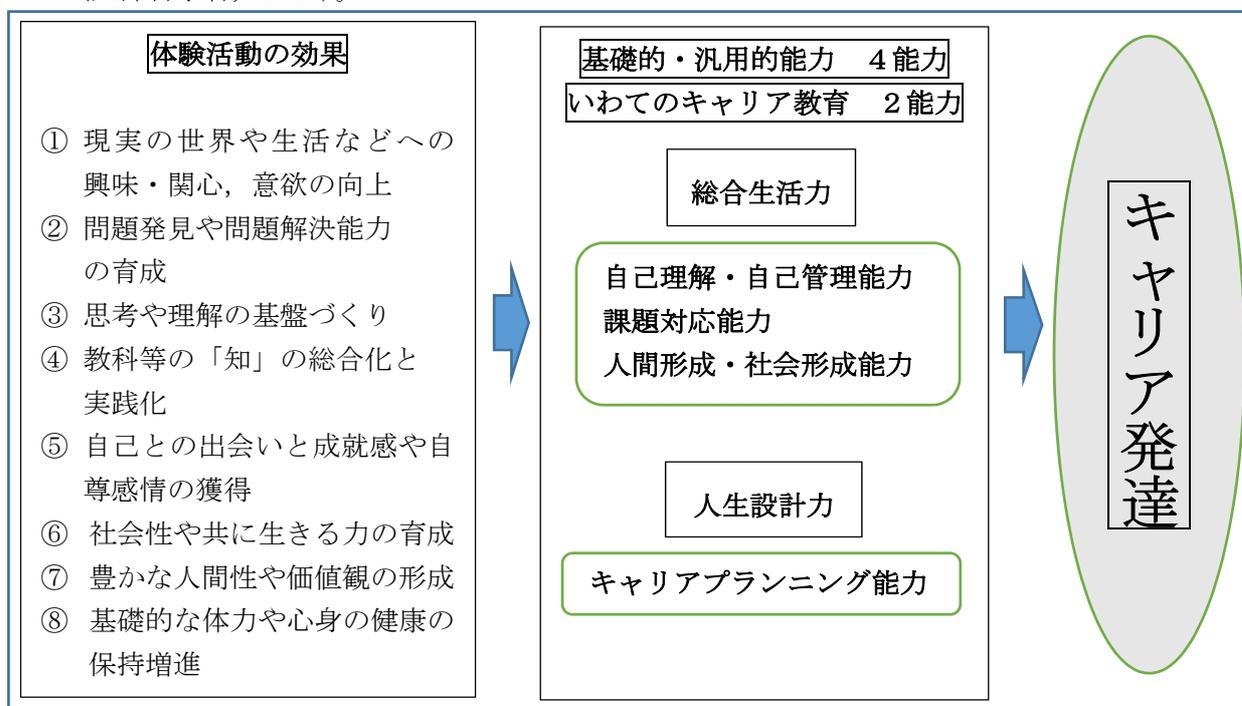


オ キャリア発達と体験活動

基礎的・汎用的能力育成は、その1つずつの能力に焦点化して育成するという方法が見られる中で、この4能力を一連の流れの中で育成していると考えられる高等学校の実践例も見られる。その例として、大阪府立布施北高等学校普通科の学校設定教科「デュアル」の科目としての企業や施設で実習を行う「デュアル実習」(6単位)があり、これは職場体験を年間を通じて週1回を時間割に組み込み、基礎的・汎用的能力である4能力を地域等との連携を図りなが

ら育てている好例と言える。

布施北高等学校で見られるような体験活動は、「自分の身体を通して実地に経験する活動」であり、「子どもたちがいわば身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく活動」(文部科学省, 2005)である。体験活動の種類としては、「対象となる実物に実際に関わっていく直接体験のほか、インターネットやテレビ等を介して感覚的に学びとる間接体験、シミュレーションや模型等を通じて模擬的に学ぶ擬似体験」がある。しかし、「間接体験や擬似体験の機会が圧倒的に多くなった今、子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念」されており、今後の教育において重視されなければならないのは、「ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う直接体験」である。また、体験活動の効果には【図3】の8つがあるとされており(文部科学省, 2005)、体験活動はさまざまな能力育成に役立つことが分かる。キャリア教育の実践には、特に小学校・中学校段階における取組において、体験活動を通して学ぶものが多く見られるが、それらを踏まえて、高等学校段階でも「インターンシップ」「職業人インタビュー」「奉仕・ボランティア活動」等を実施することにより、「仕事や働くことへの関心が向上する」「前向きに自己の将来を設計することができる」等の期待される効果が得られるとされる(文部科学省, 2011)。



【図3】体験活動と基礎的・汎用的能力とキャリア発達 (イメージ図)

#### カ 高等学校における就職にかかわる現状

高等学校の生徒の現状をキャリア教育やキャリア発達の視点で捉えれば、その課題にはさまざまなものが挙げられる。本研究では、高等学校が最後の出口となる就職者の状況について、取り上げる。

高等学校における就職活動は、1947年に施行された職業安定法により、学校が公共職業安定所である通称ハローワークから業務を委託され、学校を通じて書類等をやりとりする。高等学校生の就職のスケジュールは以下のとおりである(文部科学省, 2018)。

6月1日	ハローワークによる求人申込書の受付開始 (※2017年度より6月1日が受付開始) (厚生労働省, 2017)
7月1日	企業による学校への求人申込及び学校訪問開始
9月5日	学校から企業への生徒の応募書類提出開始
9月16日	企業による選考開始及び採用内定開始

(文部科学省, 「平成31年3月新規高等学校卒業者の就職に係わる推薦及び選考開始期日等について」)

現状として、企業選びや応募前職場見学・履歴書の志望動機を書く等の活動を、求人票の学校受付後の7月1日から就職試験の応募書類を提出する9月初旬までに行わなければならないこと、学業優先や公平性確保の観点から一人一社制の慣行があり、複数応募解禁時期は、都道府県により異なるが、本県においては10月より複数応募解禁となることから、9月に応募する際には、求人票の学校受付開始から1カ月足らずで一社に絞らなければならない等、短期間で、重大な決断を迫られているのが、高卒求人の実態である。また、この流れに乗り遅れた場合は、就職活動の次の流れは概ね10月以降となり、求人数を満たした企業は求人を取り下げるため、結果的に選べる企業が減る可能性があること等も危惧される。

#### キ 調査から見える現状と課題

平成30年度の「子ども若者白書」(内閣府, 2018)では、特集として、「就労等に関する若者の意識調査」(有効回答数10,000)が掲載されており、キャリア教育・職業教育の効果についての問いでは、「働くことの大切さが分かった」や「コミュニケーションスキルの重要性が分かった」と回答した人が6割を超えていた。このことから、キャリア教育・職業教育を受講したことのある人は、働くことやコミュニケーションに関する学びに効果を感じている若者が多いことが推察できる。

一方で、働くことに関する不安についての問いでは、「十分な収入が得られるか」「老後の年金はどうなるか」「きちんと仕事ができるか」「仕事と家庭生活の両立はどうか」「勤務先での人間関係はうまくいくのか」に不安を感じている人は7割を超えており、平成23年の調査と比較すれば、不安な割合は全ての項目で減少しているものの、若者の多くが働くことについて不安を感じていることが読み取れる。

また、【表9】に示した離職を経験した若者等に対する調査である、「高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究報告書」(国立教育政策研究所, 2014)における「一次就職先の主たる離職理由」(有効回答数156)では、「職場の人間関係がづらい」が最も多く、次いで、「仕事がきつい・ストレスが大きい」が多かった。

【表9】一次就職先の主たる離職理由

(国立教育政策研究所, 「高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究」)

	全体 (N=156)	高卒就職者 (N=98)	専門学校・ 短期大学卒 就職者 (N=24)	4年制大学卒 就職者 (N=34)
会社の倒産、事業所の閉鎖	3	3	0	0
キャリアアップするため	17	6	5	6
会社の経営者や経営理念・社風に合わない	4	1	1	2
会社の将来性・安定性に期待が持てない、 昇進やキャリアに将来性がない	13	6	2	5
仕事と家庭を両立できない	2	2	0	0
仕事がついつい・ストレスが大きい、 ノルマや成果に対するプレッシャーがついつい	22	12	5	5
仕事面白くない	11	9	1	1
給与に不満	14	10	2	2
労働時間が長い、休日出勤が多い	5	5	0	0
採用条件と職場の実態が異なっていたから	5	2	0	3
能力・成果を正當に評価されなかったから	2	1	0	1
職場の人間関係がづらい	19	16	1	2
肉体的・精神的に健康を損ねた	13	9	1	3
勤務地が遠い・通勤が不便	9	7	2	0
結婚、出産・育児のため	9	4	3	2
無回答	8	5	1	2

一方、本県の離職に関わる「岩手県の若年者雇用動向調査結果」(いわてで働こう推進協議会, 2018) では(有効回答数897), 高等学校卒業者の初めて働いた企業を辞めた理由としては、「仕事上のストレス」が最も高く、次いで「人間関係がよくなかった」と「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかった」が同率で2番目となった。3つの調査から、早期離職した高等学校卒業者は、さまざまな困難を抱えていたことが推察される。

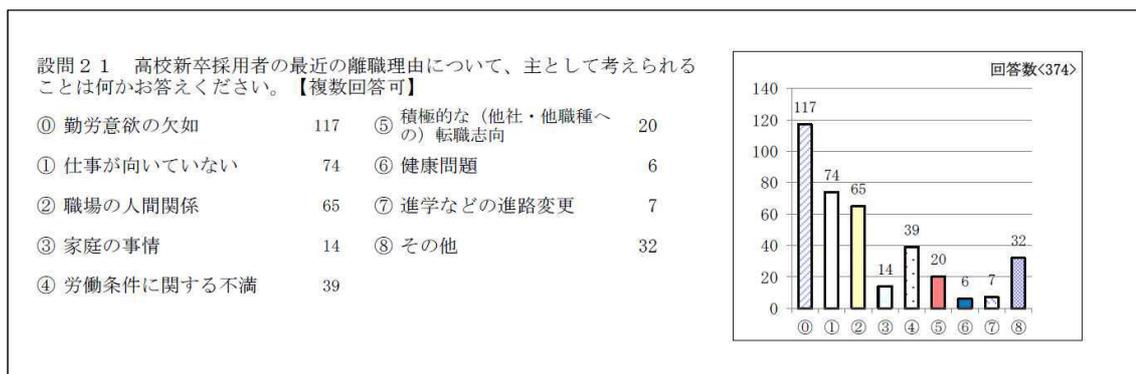
高知県教育委員会(2013)が行った「高等学校生採用に関する企業アンケート」(有効回答数374社)の「高等学校新卒者の印象」(回答数605)では、高等学校新卒採用者の印象について、「コミュニケーション力が乏しい」が圧倒的に多くなっており、【図4】に示すようなさまざまな印象を持たれていることが分かる。



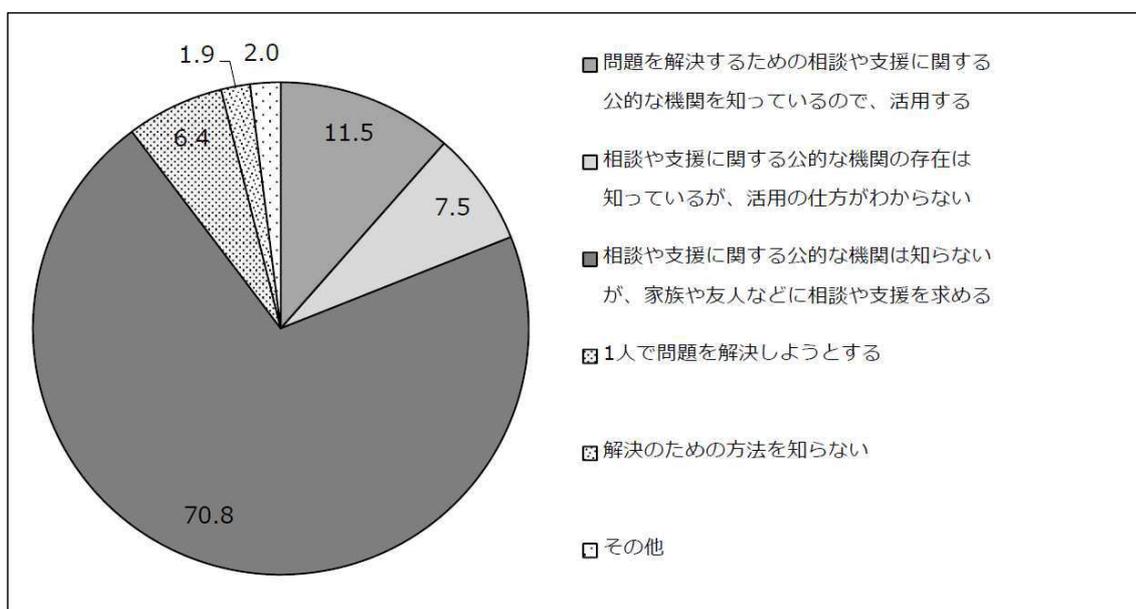
【図4】高等学校新卒者の印象

(高知県教育委員会, 「高等学校生採用に関する企業アンケート」)

また、最近の離職理由として、【図5】にあるように、勤労意欲の欠如が突出して多くなっている。



【図5】高等学校新卒者の最近の離職理由として考えられること  
（高知県教育委員会、「高等学校生採用に関する企業アンケート」）



【図6】困難な問題が起こったとき、あなたはどのようにしますか  
（国立教育政策研究所、「再分析から見えるキャリア教育の可能性」）

さらに、高等学校卒業者の困難さへの対処についての「再分析から見えるキャリア教育の可能性」（国立教育政策研究所，2014，有効回答数1,161）の調査結果からは、「相談できる公的機関を知っている」のは、およそ2割で、家族や友人に相談する7割を大きく下回った【図6】。

これらの高校生の就職に関する状況からは、在学中の就職活動に関する事情や高等卒業後に職場で抱える困難さやその対処法を知らないという状況が窺える。これらの困難さは個々によって異なると考えられるが、高等学校におけるキャリア教育の視点の一つとして踏まえることができる。

#### (5) キャリア発達を支援する自立活動

##### ア キャリア発達を支援する教育

高等学校における就職活動は、短期間で集中的に取り組まなければならない、内容の多くは初めて体験することであり、そのために困惑する生徒が少なくないことを述べた。また、若者の調査では、就職に向けての不安を抱えている人が多く見られた。一方、離職者の調査からは、就労後の困難さとして人間関係の問題やストレスを抱える様子が見られる。これらの傾向をたどれば、当然ながら個々によって異なる課題が見えてくると推測できる。キャリア発達は本来、

各発達段階における発達課題を踏まえつつも、個に応じた支援によって促されるものである。こうしたことを踏まえ、個の課題に応じたキャリア発達の支援の在り方について検討することが、社会への最後の出口となる高等学校におけるキャリア教育・進路指導において重要であると考えられる。

イ キャリア発達を支援する教育における個に応じた指導

キャリア発達を促す教育はキャリア教育であり、通常の教育課程において、全ての生徒に対し、学校の教育活動全体で行われ、その中で個に応じた支援が行われている。また、進路先や必要度に応じては、個の課題に応じた指導・支援が、これまでも高等学校においてさまざまな形で行われてきており、高等学校3学年時等に行われる夏季休業中の課外等は、多くの学校に根付いている取組であり、その中で個別の支援が相当に行われている。しかしながら、そうした支援を踏まえてもなお就職活動等にさまざまな困難さを抱える生徒は少なくはない。

2018年度から始まった通級による指導においては、各学校長が責任者となり行われる教育課程の編成に、特別の教育課程を加える・又は替えることができるようになり、障がいに応じた特別の指導が、教育課程で位置付けられ、可能となった。高等学校新学習指導要領第5款2の特別な配慮を必要とする生徒への指導の項では、特別の教育課程の編成により特別の指導ができると書かれており、その内容は、「障害のある生徒」に対して「障害に応じた指導」を行うと記述されている。この通級による指導をキャリア教育の中で、困難さを抱える生徒の個別指導として位置付けられないかと考えた。そこで確認すべきことが二つ出てくる。一つ目は「障害のある生徒」と困難さを抱えた生徒は同義であるかという点、二つ目は「障害に応じた指導」は個に応じた指導と同義であるかということである。一つ目について、「障害のある生徒」については、通級による指導の対象生徒は、「医学的な診断の有無のみにとらわれることのないよう留意し、総合的な見地から判断すること」（文部科学省，2018）とされていることから、狭義における障害の区分に関わらなくともよいことは、先に述べた。その上で、責任者である校長が判断して、特別の教育課程により特別の指導を必要とする生徒がいるという場合に、必要な生徒に、個に応じた通級による指導としての自立活動が行うことができるようになるものである。このことから、「障害のある生徒」はさまざまな困難さを抱えた生徒と学校が判断をした生徒という視点をもつことができる。また二つ目について、通級による指導は、「自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行うもの」とされていることから、自立活動の目標では「個々の児童または生徒が自立を目指し」と示されていることや、新学習指導要領において、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成が求められていることから、「障害に応じた指導」は「個に応じた指導」と同様と捉えることができる。以上のことから、通級による指導は、さまざまな困難さを抱えた生徒（と学校が判断した生徒）が、個に応じた指導を受けることができる場であり、その場に、キャリア発達を支援する視点を取り入れることが可能と考えた。

若林（2018）は、「将来の生き方、在り方のイメージを描くことに課題のある生徒を対象に、卒業後の職業的・社会的自立を目指して体験的な場を設け、指導することは、高等学校段階の自立活動として重要」と述べている。これにより、将来に向けて課題のある生徒が、高等学校における自立活動において、職業的・社会的自立に向けた体験的な学びをすることの有用性が分かる。

また、近年のインクルーシブ教育システム推進の報告（中央教育審議会，2012）における、同じ場で共に学ぶことを大切にする一方で、自立と社会参加を見据えて、一人一人の教育的ニーズに対応した柔軟な仕組みとしての「多様な学びの場」の充実が求められていることから、通級による指導を教育課程に位置付け、その中で自立に向けた学びを行っていくことの意義を見出せる。

渡邊（2015）は、自立活動とキャリア教育の共通点が多いとし、【表10】のようにその共通

性を整理している。

【表10】一人ひとりの自立と社会参加を目指す

(渡邊昭宏, 「自立活動の授業deライフキャリア教育」)

自立活動		キャリア教育
自立することや、障害による学習上や日常生活上におけるさまざまなつまづきや困難があるが	課題	変化が著しい現代社会の中を生き抜いていく弱さがあるが
主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度および習慣を養うことによって	手立て	自立と社会参加に向けて必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して
人間として、心身の調和のとれた発達をしていけるようになる	目標	キャリア発達(社会の中で自分らしい役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現)していけるようになる

この整理された内容から、自立活動とキャリア教育の課題、手立て、目標には重なりがあることが分かる。自立活動において、キャリア発達を支援する教育を行うことは、この類似性からも意義付けることができる。

以上のことを踏まえ、支援の必要な生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育を行うことができる場である自立活動を、キャリア発達を支援する場として活用する。

ウ 対象生徒

キャリア教育は、「様々な学校教育活動全体の活動を通じて体系的に行われる」(文部科学省, 2011)のものであり、通常教育課程の中で行われるものである。各学校では、普通科、専門学科、総合学科の各学科の特質や生徒や地域の実態に応じて、内容を焦点化、重点化して、全体計画【図7】を作成して、キャリア教育を行っている。これは新学習指導要領における「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」を目指すカリキュラム・マネジメントの考え方をそれより以前に示したものであり、新学習指導要領の内容を受けて、新たに、学校のグランドデザインに基づいた大きなカリキュラム・マネジメントを踏まえて、キャリア発達を支援する教育におけるカリキュラム・マネジメントがなされる必要がある。

### 03 全体計画の作成

**キャリア教育全体計画** (様式-1)

キャリア教育で育成する能力 総合生活力 人生設計力 生徒の実態	学校教育目標 保護者の要望 地域社会からの要望 産業界からの要望	キャリア教育指導目標 ①自己発達の実現と自己受容を… ②人生設計力としての学習観・職業観を… ③進路の現実や確立と社会的参加を… ④将来設計の立案と社会的参加の準備を…
--	---	--

**キャリア教育の視点に基づく各学年の指導目標**

学年	指導目標	主な活動内容
1	①(関・新し)環境に適応するとともに進歩への意欲を… ②学習活動を通して自己の確立の深化を… ③様々な困難に挑戦し、進路意識の確立を図る…	
2	①関・他者の価値観や生活の多様性を理解し… ②人生設計力としての学習観・職業観を… ③進路意識を高める学習活動を… ④進路意識を…	
3	①関・自己の強み・弱みを理解し、人生設計を… ②進路と社会の関係を理解して理解を深める… ③卒業後の社会的参加の準備を…	

**キャリア教育の視点に基づく特別活動等における指導目標**

《ホームルーム活動》 特別活動は、キャリア教育の場として多くの学習者自ら決定している。特別活動の場を有効に活用し、学習者自身として進歩・成長を図る。キャリア教育の場として「人生設計力」の育成・強化を図る。キャリア教育の場として「進路意識」の育成を図る。	総合的な学習の時間 ①学習活動の場として、キャリア教育の視点を取り入れ、進歩・成長を図る。キャリア教育の場として「進路意識」の育成を図る。	道徳 道徳教育の場として、キャリア教育の視点を取り入れ、進歩・成長を図る。キャリア教育の場として「進路意識」の育成を図る。
《生徒会活動》 生徒会活動は、キャリア教育の場として多くの学習者自ら決定している。特別活動の場を有効に活用し、学習者自身として進歩・成長を図る。キャリア教育の場として「人生設計力」の育成・強化を図る。キャリア教育の場として「進路意識」の育成を図る。	その他 進路教育やキャリア教育を通して、キャリア教育の視点を取り入れ、進歩・成長を図る。キャリア教育の場として「進路意識」の育成を図る。	

**キャリア教育の視点に基づく授業分掌上の指導目標**

分野	指導目標	主な活動内容
教科		
生徒指導		
進路指導		
保健衛生		
図書		
教育相談		
総務		
その他		

毎年度当初に設定する各分掌上の指導目標を決定する際は、キャリア教育の視点を加味した目標を設定する必要があります。

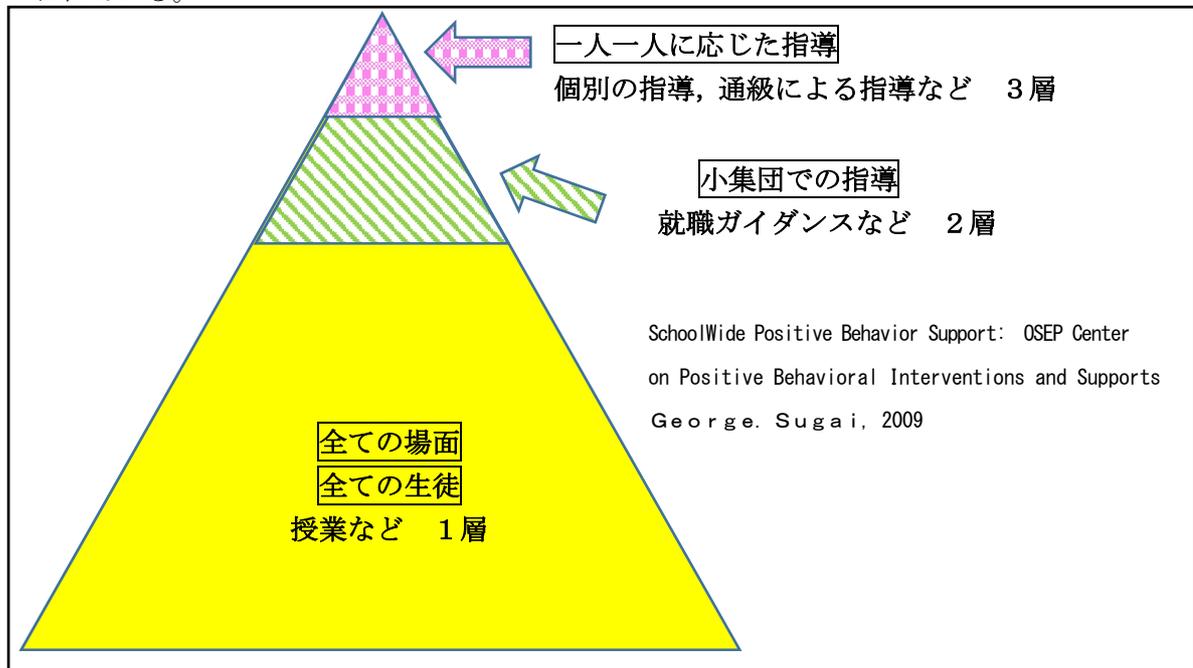
**キャリア教育の視点に基づく各教科の指導目標**

教科	指導目標	主な活動内容
国語	①関・読書・書く・聞く・話すこと等の言語活動を…	
地理歴史	①関・現代社会の諸問題と歴史的・地理的…	
公民	①関・人間としての存在の意義や…	
数学	①関・事象を数学的に考察し…	
理科	①関・自然の事物・現象を…	
保健体育	①関・運動の意義を…	
芸術	①関・芸術を鑑賞する心を…	
外国語	①関・外国語を通じて…	
家庭	①関・家庭・家族及び福祉、消費生活、衣食住…	
情報	①関・情報に関する科学的な思考…	
専門科目	①関・産業の発展や…	

※記入欄が不足の場合は、適宜追加・修正の上、作成してください。

【図7】キャリア全体計画 様式例 (岩手県教育委員会, 「いわてキャリア教育の手引き」)

キャリア教育の対象生徒は、高等学校に在籍する全ての生徒である。現状における高等学校におけるキャリア教育の場を、【図8】のように整理して考える。まず1層として、高等学校における学校全体や学年全体の授業を通じた全ての生徒を対象とした指導がある。次に2層として就職ガイダンスなどの進路希望先別の小集団で行われている指導があり、これについては、放課後や夏期休業中等の教育課程外で行われているものもある。そして、3層として、特に就職間際等の時期において、個別に面談や、面接指導が行われており、これらは教育課程外で行われている。



【図8】キャリア発達を支援する「多様な学びの場」(イメージ図)

徳島県立総合教育センター(2017)によれば、「SWPBSでは、第1層支援から第3層支援へと階層的で連続的な支援」を設け、「第1層支援を充実させることによって、個別性の高い第2層支援や第3層支援を真に必要とする児童生徒への支援を絞り込むことが可能となる」とされており、これをキャリア教育に置き換えれば、通常教育課程におけるキャリア教育の充実が第一義であることが分かる。SWPBSとは、School-wide Positive Behavior Supportのことであり、「学校全体で取り組むポジティブな行動支援」とされる。

1層の通常教育課程でキャリア教育を充実させることにより、2層・3層への支援を手厚くすることができる。とりわけ3層への支援の際は、より個別の指導・支援が増えると思われるため、教員はそれらに個別に対応していくことになる。3層への教育課程外での支援において継続的に計画的な支援を必要とする場合において、特別な教育課程を編成することにより、3層の中における、特別な教育課程に位置付けられた特別な指導、つまりは困難さを抱えた生徒への個別の指導ができると考える。なお、特例としての教育課程で学んだ内容は、通常教育課程における学びに生かされる必要性があり、生徒の「学びの連続性」(国立特別支援教育総合研究所, 2018)が保障されることが必要である。

#### エ 指導上の視点と内容

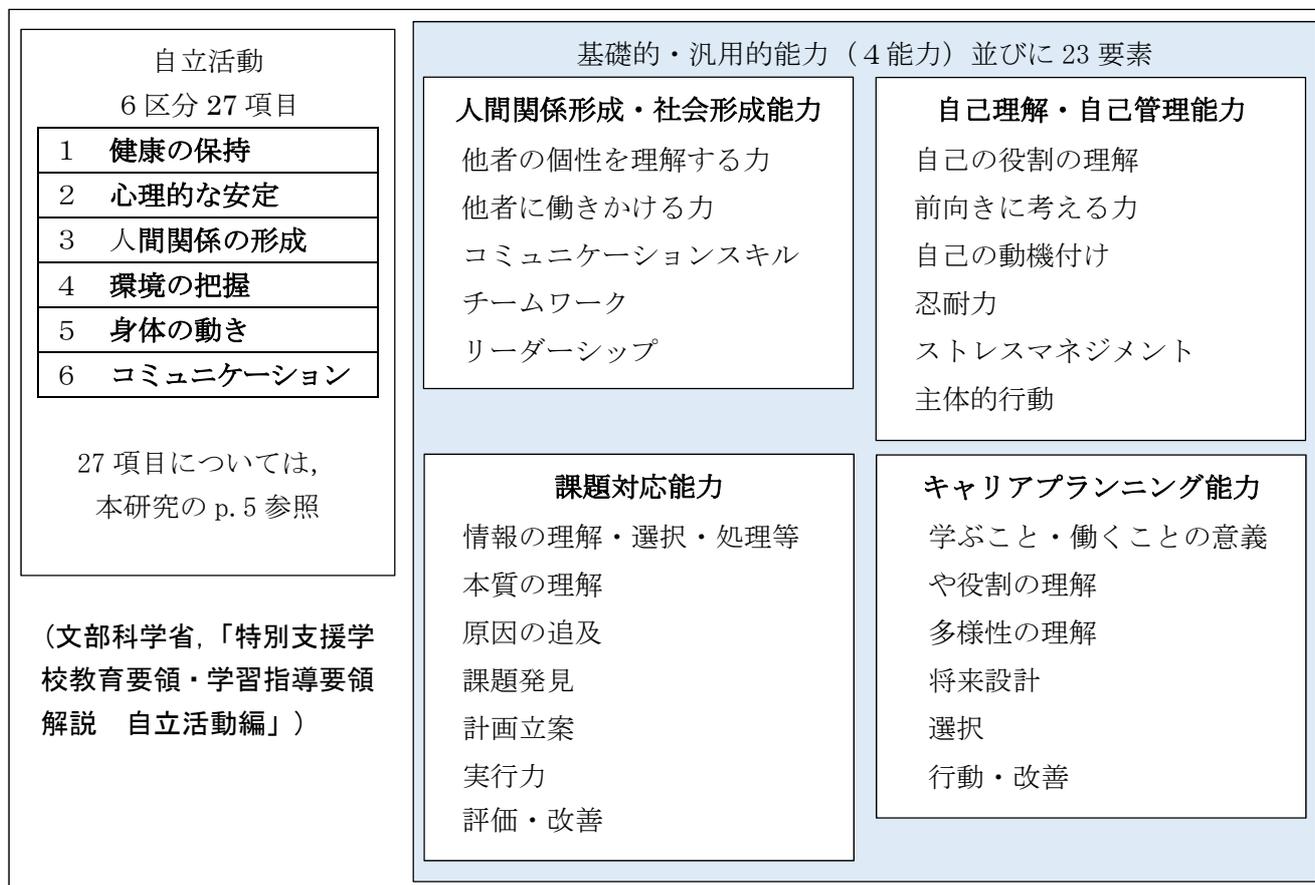
自立活動は、個々の課題を把握した上で、自立を目指して設定される指導目標を達成するために、27項目の中から具体的な指導内容を選定し、それらを相互に関連付けて行う指導である。

高等学校における自立活動の指導内容の選定にあたっては、社会に出る直前の生徒がいることから、実際に就職等をした際に、生徒が持つておくよい知識・技能・態度・習慣等は何かを考え、その上で、生徒の実態や課題から見て、生徒がそれほど負担を感じずに取り組める内

容から行っていくことが望ましいと考える。生徒が負担を感じずに取り組むことが必要と考える理由は、困難さに向き合うという自立活動の学びは、時として苦しく疲れることもあると考えられるので、自立活動において必要とされる生徒自身の主体性が削がれることのないようにとの考えからである。生徒の実態に応じて、1年後等の長期間における目標や学期等の短期間における目標設定等を必要に応じて変更しながら、生徒が主体的に学び続けることのできる活動を計画していくことが必要である。そして、この計画については、生徒の主体性を大事にする観点から、教員のみで決めるのではなく、生徒との対話を重ねたり、生徒や保護者と共に相談したりする等、理解を得ていく過程が重要である。

一方、基礎的・汎用的能力は、通常の教育課程で行われるキャリア教育において、全ての生徒が個々の実態に応じて身に付けていく能力であり、4能力と23要素によって構成【図9】されている。自立活動の指導内容は、27項目から選定して行うが、その際に、基礎的・汎用的能力の視点を取り入れることで、「指導すべき課題」や指導内容を検討することができる考えた。例えば、「落ち込みやすい」という指導すべき課題を持つ生徒がいたとして、その生徒に、自立活動の健康の保持における「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」を項目選定し、「自分の認知について知る」という学びを行っていく場合、その具体的な指導内容を考える際に、基礎的・汎用的能力の自己理解・自己管理能力におけるストレスマネジメント、人間関係形成・社会形成能力におけるコミュニケーション・スキルやチームワークについての内容について、検討していくことができる。

また二義的ではあるが、基礎的・汎用的能力の視点を取り入れることは、通常の教育課程におけるキャリア教育において学びが不十分であった生徒の基礎的・汎用的能力の不足を補ったり、補強したりするという観点からも有効な取組になると考える。



【図9】自立活動と基礎的・汎用的能力（文部科学省、「高等学校キャリア教育の手引き」）

(6) 高等学校における通級による指導の流れ

高等学校における通級による指導を実施するためには、特別の教育課程の編成を行う必要があり、その編成においては、「学校全体の教育課程との連続性の下に編成していく必要」（岩手県立総合教育センター，2018）がある。さらに、自立活動に相当する指導内容については、「対象生徒の学習上又は生活上の困難さを克服する指導であることをふまえて、教育課程への位置付けと合わせて指導内容の基本計画を作成しておく必要があると考えられること」があることから、年間計画並びにシラバスの作成が必要と考える。

指導対象となる生徒については、「当該児童生徒について特別の教育課程を編成するかどうか」（文部科学省，2018）の判断が必要となるため、「学習状況の観察や個別面談等を踏まえ、総合的に『通級による指導』としての必要性を判断していくとともに、本人・保護者との合意形成を図っていく必要がある」（岩手県立総合教育センター，2018）。そうしたことを踏まえた上で、通級による指導を1学年から開始する場合には、入学者選抜を経た生徒に、選抜後の限られた時間で多くの生徒の情報収集（中学校からの引き継ぎ）や説明等を行う必要があるため、考慮して進めるべき点が多くあると考える。以下は、「高等学校における「通級による指導」実施のための手引」（岩手県教育委員会，2018）を参考にしながら記載する。

ア 対象生徒の判断

実施校においては、通級による指導の目的やその内容について、高等学校説明会等の機会を通じて、生徒や保護者へ丁寧な説明を行うことが求められている。また、学校側は、中学校からの情報や入学時の情報、入学後の情報を踏まえ、「困難さを総合的に把握」（岩手県，2018）した上で、校内委員会における判断を行い、その後、対象生徒や保護者との合意形成を行っていく必要がある。必要に応じて、チェックシート【表 11】（岩手県立総合教育センター，「校内資源を活用した校内支援実践事例集」）や、諸検査等を組み合わせる等して、客観的に生徒の状況を把握していく方法を取り入れながら、観察等から得られる状況と合わせて検討する。

【表 11】 気になる児童生徒のチェックシート

（岩手県立総合教育センター，「校内資源を活用した校内支援実践事例集」）

気になる児童生徒のチェックシート(第1次チェックシート)	
A【教科指導における気付き】	
チェック欄	項目
	国語・算数（数学）の基礎的な能力（聞く・話す・読む・書く・計算する・推論する）のいずれかに著しい困難（遅れ）がある
	本人の興味のある教科には熱心に参加するが、そうでない教科では退屈そうにみえる
	大人の興味ある特定分野の知識は大人顔負けのものがある
	自分の考えや気持ちを、発表や作文で表現することが苦手である
	こだわると本人が納得するまで時間をかけて作業等をすることがある
	教師本人の指示を聞いていないようにみえる
	学習のルールやその場面だけの約束ごとを理解できない
	一つのことに関心があると、他の事が目に入らないようにみえる
	場面や状況に関係ない発言をする
	質問の意図とずれている発表（発言）がある
	不注意な間違いをする
	必要な物をよくなくす
B【行動上における気付き】	
チェック欄	項目
	学級の児童生徒全体への一斉の指示だけでは行動に移せないことがある
	離席がある。椅子をガタガタさせる等落ち着きがないようにみえる
	順番を待つのが難しい
	授業中に友達の邪魔をすることがある
	他の児童生徒の発言や教師の話を遮るような発言がある
	体育や図画工作・美術等に関する技能が苦手である
	ルールのある競技やゲームは苦手のようにみえる
	集団活動やグループでの学習を逸脱することがある
	本人のこだわりのために、他の児童生徒の言動を許せないことがある
	休活動や当番活動は教師や友達に促されてから行うことが多い
	自分の持ち物等の整理整頓が難しく、机の周辺が散らかっている
	準備や後片付けに時間がかかり手際が悪い
	時間内での行動や時間配分が適切にできない
	掃除の仕方、衣服の選択や着脱などの基本的な日常生活の技能を習得していない

また特別の教育課程であることから、必要に応じて、「履修願」のような文書で、保護者との通級による指導の内容の確認を行っていくことが求められている。

#### イ 通級による指導の流れ

現行の特別支援学校学習指導要領解説の自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）における、実態把握から指導内容の設定までの流れの一例は、次のとおりである。

- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 障害の状態，発達や経験の程度，興味，関心，生活や学習環境などについて情報収集</li><li>② 収集した情報を障害による学習上または生活上の困難の視点から整理</li><li>③ 幾つかの指導目標の中で優先する目標を設定</li><li>④ 指導目標を達成するために必要な項目の選定</li><li>⑤ 選定された項目を関連付け具体的な指導内容を設定</li></ol> | <div style="border: 1px solid green; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;">現行</div> |
|--|--|

実施にあたっては、教育課程上の位置付けと重ね合わせ、本人・保護者との合意形成を踏まえた上で、困難をより焦点化した指導内容について個別の指導計画にまとめていく。指導対象としての判断に至った実態把握の内容について、自立活動の区分及び項目に照らし合わせて整理する。

なお、新特別支援学校学習指導要領解説においては、次のとおり手続きの各過程を整理する際の実態把握等の流れがさらに細かく、新しく提示されている。

- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 障害の状態，発達や経験の程度，興味・関心，学習や生活の中で見られる長所やよさや課題等について情報収集</li><li>②-1 収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階</li><li>②-2 収集した情報（①）を学習上または生活上の困難，これまでの学習状況の視点から整理する段階</li><li>②-3 収集した情報（①）を〇〇年後の姿の観点から整理する段階</li><li>③ ①をもとに，②-1，②-2，②-3で整理した情報から課題を抽出する段階</li><li>④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し，中心的な課題を抽出する段階</li><li>⑤ ④に基づき設定した指導目標を記す段階</li><li>⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する段階</li><li>⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント</li><li>⑧ 具体的な指導内容を設定する段階</li></ol> | <div style="border: 1px solid green; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;">新</div> |
|---|---|

本研究では、実態把握や目標、項目の選定等の「見立て」の段階が少なく、分かりやすいため、現行における個別の指導計画の作成の流れに基づき「見立て」を行う。

また、新学習指導要領においては、「特に、通級による指導を受ける生徒については、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用する」とされ、個別の教育支援計画を作成並びに個別の教育支援計画を踏まえた個別の指導計画の作成と活用が求められている。

#### ウ 評価

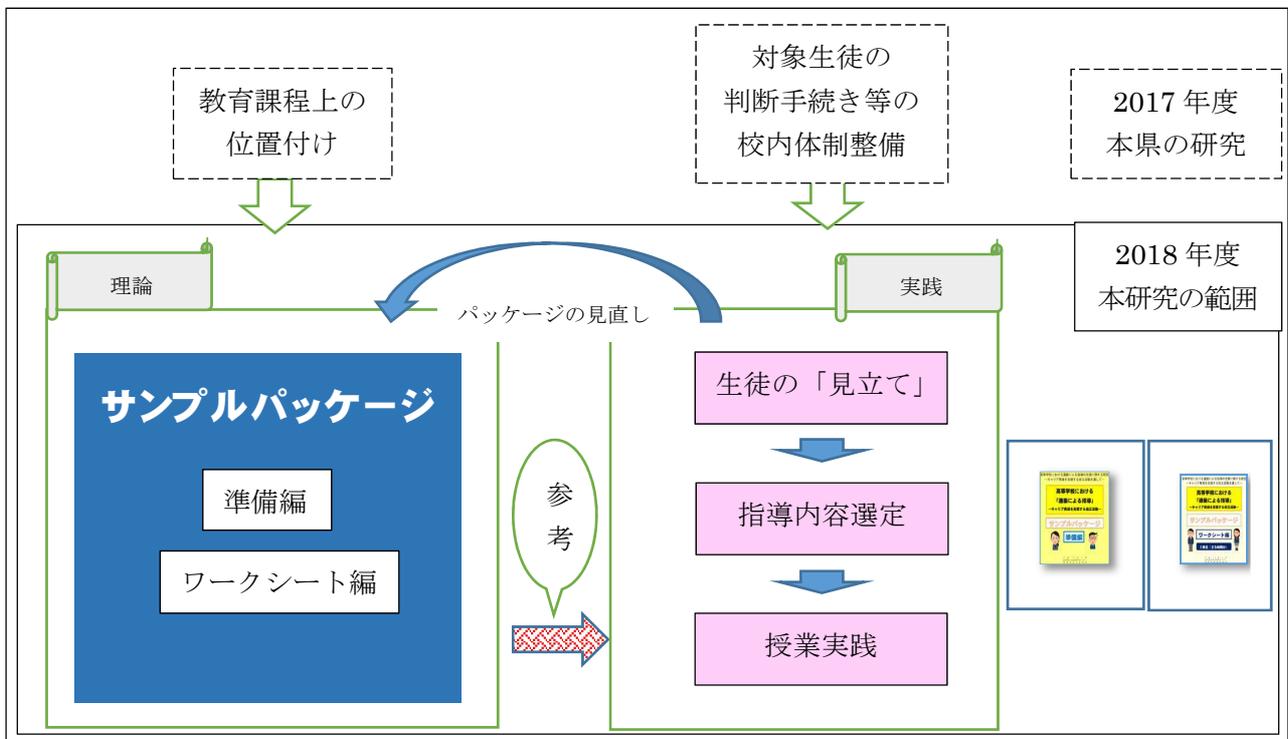
新学習指導要領では、学校の定める指導計画に従って各教科・科目を履修し、その成果が教科及び科目の目標からみて満足できると認められる場合には、単位の修得を認定しなければならないとされている。高等学校における通級による指導の評価については、個別の指導計画に設定された個別の目標が、通級による指導を通じて、目標が達成できていると学校長が判断した場合に、単位認定がなされる。既述（p. 3）のとおり、通級による指導に係わる修得単位数は、年間7単位を超えない範囲で全課程の修了を認めるに必要な単位数に加えるとされている。単位数については、指導要録の記載において、指導要録の様式1（学籍に関する記録）裏面の「各教科・科目等の修得単位数の記録」の総合的な学習の時間の次に自立活動を設けて、修得単位数の計を記載するとされている。また、その内容については、指導要録の様式2（指導に関する記録）の「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に、通級による指導を受けた学校名、通級による指導の授業時数及び指導機関、指導の内容や結果などを記載すること（文部科学省、2016）となっている。

なお、新学習指導要領総則では、「年度途中から通級による指導を開始するなど、特定の年度

における授業時数が、1単位として計算する標準の単位時間に満たない場合は、次年度以降に通級による指導の時間を設定し、2以上の年次にわたる授業時数を合算して単位の修得の認定を行うことができる」と規定されており、複数年にわたる学習時間の合算による単位認定が示されている。

## 2 高等学校における通級による指導の充実のための手立て

高等学校における通級による指導は、教育課程上の位置付けをはじめ、対象生徒の判断手続き、実施形態等、さまざまな準備を必要とする（岩手県教育委員会、2018）。昨年度の本県における研究は、それらの準備を中心としたハード面に関する研究であったが、今年度の本研究の範囲は、自立活動の指導内容についてであり、ソフト面の研究となる。自立活動は、個に応じた指導であるため、さまざまな指導内容が考えられるが、本研究では、高等学校が社会に出る前の最後の出口となる生徒がいることや、高校生の就職活動等における困難さの状況を踏まえ、キャリア発達を支援する自立活動についての提案を行う。手立てとして、理論ベースにおけるシラバス並びに指導計画、ワークシートの作成と、実践ベースにおける生徒の「見立て」や、パッケージを参考にした指導内容選定、授業実践を行う【図10】。



【図10】 高等学校における指導の充実のための手立て（本研究の範囲）（イメージ図）

「サンプルパッケージ」…教員がキャリア発達を支援する自立活動について、1年間のイメージを持つための資料。「準備編」と「ワークシート編」で構成される。「準備編」では主に、「見立て」に関する様式や資料が載っており、「ワークシート編」には、1単位時間35時間分の授業の構想とワークシートが載っている。

### (1) 「サンプルパッケージ」の作成

#### ア サンプルパッケージの作成の理由

自立活動は、特別支援学校の学習指導要領に示される特別の領域であるが、障がいのある児童生徒等が特別支援学校だけではなく、小・中学校等においても学んでいることから、特別支援学級、通級による指導において実施されている。また、2018年度から始まった高等学校における通級による指導においても、自立活動が実施されているが、高等学校における自立活動の

取組は、既述（p. 6）のとおり、モデル事例としての「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育充実事業」（2014～2016）の22校の取組があるものの、本格実施の前例がないため、年間を通しての系統だった指導という点ではモデルがなく、試行錯誤による実施がなされているものと考えられる。また、生徒の実態に合わせた自立活動の指導内容は、真つ新たな状態から組み立てていくこととなるが、そうした指導や教材の準備等は、高等学校の教員にとっては経験の少ない取組と思われる。

そこで、高等学校において通級による指導を行う上では、自立活動について具体的なイメージをつかめる資料であるサンプルパッケージが必要と考えた。自立活動が、2015～2016年度に行われた川崎市の自立活動に関する小学校・中学校並びに特別支援学校の管理職等への調査（有効回答数118）では、「自立活動を指導できる教員が少ない」「自立活動を指導するためのノウハウがない」等が6割を超えており、制度化から20年以上を経た小・中学校において、いまだに管理職等による自立活動への困り感があることが分かった。

このようなことから、1年間指導の手掛かりとなるようなサンプルパッケージを作り、キャリア発達を支援する自立活動についてのイメージを持てるものを提案することは、高等学校における通級による指導の充実において、意義があると考えた。

#### イ 「サンプルパッケージ」の作成のコンセプト

サンプルパッケージの全体を貫くコンセプトとして、下記の3点を掲げて作成する。

- キャリア発達を支援する自立活動の指導教員が、1年間の指導の流れのイメージが持てるもの
- 指導内容は、自立活動に、キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力の視点を取り入れたもの
- キャリア発達を支援する学校の教育活動とキャリア発達を支援する自立活動が、学びの連続性の観点で結びついていることを示すもの

（国立教育政策研究所、「特別支援教育における教育課程に関する総合的研究」参照）

#### ウ サンプルパッケージの構成

サンプルパッケージは、2編から構成する。キャリア発達を支援する自立活動「キャリアデザイン」の1単位時間である35時間分のワークシート編と、キャリア発達を支援する自立活動を実施するまでの準備で使用する内容を集めた、準備編である。それぞれの内容は、次の通りとする。

サンプルパッケージ 準備編	サンプルパッケージ ワークシート編
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学びの地図 STEP シート</li> <li>・ 自立に向けてのチェックシート</li> <li>・ 個別の指導計画作成にかかわる参考資料 等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシートの使い方、留意点</li> <li>・ 想定される人物の個別の指導計画</li> <li>・ 35時間分の授業の構想とワークシート 等</li> </ul>

#### エ サンプルパッケージの活用方法

サンプルパッケージの活用方法は、次のようなことを想定した。教員や管理職がさまざまな目的で活用できると考えるが、最も活用できると思われるのは、指導教員による活用である。

- 【 指導教員，クラス担任，教科担任 】**
- キャリア発達を支援する自立活動の1年間の指導内容のイメージを持ちたい時
  - 通級による指導や自立活動について理解したい時
  - 通級による指導の指導内容や指導時間数等を検討したい時
  - 生徒の実態を把握する時
  - 指導教員とクラス担任と教科担任の連携に関する課題解決を図る時
  - 通級による指導について三者で共通理解を図る時
  - 通級による指導について校内職員に話す時
  - 通級による指導について在籍クラスの保護者に話す時

### 【 管理職 】

- キャリア発達を支援する自立活動の1年間の指導内容のイメージを持ちたい時
- 通級による指導や自立活動について理解したい時
- 指導教員とクラス担任と教科担任の連携に関する課題解決を図る時
- 通級による指導について、管理職同士で共通理解を図る時
- 通級による指導について、校内教員に話す時
- 通級による指導について、保護者や地域の方々に話す時
- 地域の校長会等において、特別支援教育や通級による指導に関する事項を共有する時

(国立特別支援教育総合研究所, 「特別支援教育における教育課程に関する総合的研究」参照)

## (2) サンプルパッケージ「ワークシート編」

### ア 授業の名称「キャリアデザイン」

仮想的に、シラバス、指導計画、パッケージを作成するにあたって、通級による指導である自立活動の名称を、「キャリアデザイン」とした。「キャリア」とは、「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出して行く連なりや積み重ね」(中央教育審議会, 2011)であり、そこには多義性が見られる(渡辺ら, 2007)。多義の中には、「『人と環境との相互作用の結果』『時間的流れ』『空間的広がり』『個性の意味が内包』」されている。そうした多義性のあるキャリアについて、「自分だけのキャリア」を主体的にデザイン(作ろうとするものの形態について、機能や生産工程などを考えて構想すること。意匠。設計。図案。)(大辞林)して欲しいとの願いを込めた。

### イ 指導計画

#### (7) 新学習指導要領

指導計画作成に当たっては、現行並びに新しい高等学校学習指導要領において示されている次の点に留意することとする。

各学校においては、次の事項に配慮しながら、学校の創意工夫を生かし、全体として調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする。

ア 各教科・科目の指導内容については、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、そのまとめ方や重点の置き方に適切な工夫を加え、第3款の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導ができるようにすること。

イ 各教科・科目等について相互の関連を図り、系統的・発展的な指導ができるようにすること。

また、現行の学習指導要領に追加された事項として、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導」がある。現行からの継続の内容としては、「各教科・科目との相互の関連を図り、発展的・系統的な指導ができるようにすること」について示されている。これらのことから、各授業において、資質・能力を育む効果的な指導の内容を踏まえ、他教科・科目との関連を図った指導計画作成が求められている。

#### (イ) キャリア年間計画との関連

本研究では、県内高等学校5校のキャリア教育の年間計画【表12, 13, 14】を比較し、特に3学年の年間計画を参考にして、高等学校におけるキャリア教育の年間計画(3学年)のモデル【表15】を作成し、そのモデルとの関連を図り、自立活動の年間計画の例を作成することとした【表16】。モデルを作成した目的は、高等学校キャリア教育には各校においてさまざまな実態があること、その中での共通した活動をモデルとすることで、高等学校の教員

にとってイメージしやすいキャリア教育の流れが作れるのではないかと考えたためである。モデル作成にあたっては、県内5校のキャリア教育の流れを比較し、その中で、就職についての具体が多く示されていたD高等学校をベースに、2校以上で同様の取組があるものについて、取り入れることとした。5校の流れは概ね共通しており、長期休業毎に区切ると、4月～夏季休業前は、「就職に向けた直前の準備期」に関するもの、夏季休業後～冬季休業前は、「就職活動の実践期」に関するもの、冬季休業明け～卒業では、「社会人に向けての準備期」に関するものと分けができると考えた。

【表 12】 本県における県立高等学校キャリア年間計画（1学年）の状況

	A 高等学校 (普通科)	B 高等学校 (普通科)	C 高等学校 (総合学科)	D 高等学校 (商業高等学校)	E 高等学校 (工業高等学校)
夏季休業前 4月	進路講演会	進路講話『高等学校生活の過ごし方』 職業適性検査	産業社会と人間 進路ガイダンス 「職業を知る」ガイダンス	進路の手引き配布・活用（自己理解、職業調べ、キャリアプラン、先輩の進路を調べる）	進路ガイダンス（自分の可能性を知る） 先輩と語る会
冬季休業明け 夏季休業前	職業人インタビュー（みらいパスポート） コース分け説明会	講演会『職業研究』 企業・学校訪問 インターンシップ	就職内定体験報告会	職業人インタビュー 進路の手引き活用（仕事の意義、求人票の見方） キャリアアップ講話 進路ガイダンス 履歴書・志望理由書作成	進路講演会
冬季休業明け 年度末		職業別体験学習	インターンシップ発表会	3年生の進路体験を聞く会 受験報告書閲覧	進路報告会 進路ガイダンス 企業見学



【表 13】 本県における県立高等学校キャリア年間計画（2 学年）の状況

	A 高等学校 (普通科)	B 高等学校 (普通科)	C 高等学校 (総合学科)	D 高等学校 (商業高等学校)	E 高等学校 (工業高等学校)
夏季休業前 4月～	進路マップ 求人票説明	高等学校 2 年の 過ごし方 講演会 体験計画・準備	進路ガイダンス 進路適性検査 インターンシッ プ事前学習 	進路の手引き活 用（職業を知る） 進路講演会 進路ガイダンス 20 年後 30 年後の 私 インターンシッ プ事前学習（企業 研究，自己紹介 書，マナー講座） 卒業生の進路体 験を聞く会	進路ガイダンス 先輩と語る会 インターンシッ プ活動①
夏季休業明け～ 冬季休業前	進路マップ 事業所見学会， 就職ガイダンス (職安)	講演会 文化講演会 進路学習会 金融啓発セミナー	インターンシッ プ 就職内定体験報 告会 模擬面接 SPI テスト 進路別ガイダン ス・職業適性検査	インターンシッ プまとめ 履歴書・自己紹介 書の作成 職業レディネス テスト インターンシッ プ発表会 求人票の研究 キャリアアップ 講話 進路ガイダンス クレペリン検査 キャリアアップ 講話	インターンシッ プ活動② インターンシッ プ激励会 インターンシッ プ 進路講演会
冬季休業明け～ 年度末	進路マップ	進路体験談 出前授業 OB・OG 懇談会		3 年生の進路体 験を聞く会 生き甲斐につい て考える 次年度に向けて の抱負 進路講演会 全体面接指導 進路面談（担任） SPI 講座 自己 P R 指導	進路報告会 求人票の見方 SPI 基礎テスト SPI 講習 企業見学



【表 14】 本県における県立高等学校キャリア年間計画（3 学年）の状況

	A 高等学校 (普通科)	B 高等学校 (普通科)	C 高等学校 (総合学科)	D 高等学校 (商業高等学校)	E 高等学校 (工業高等学校)
夏季休業前 4月	マナーアップ講座 就職希望調査 生徒企業訪問 就職ガイダンス	講演会① 進路用写真撮影 面接基礎練習 進路ガイダンス・ 講話	進路ガイダンス クレペリンテスト SPI テスト	進路講演会 就職者面接指導 職業講話 SPI 適性練習	進路ガイダンス SPI 対策ガイダンス SPI 集中講習 先輩と語る会
夏季休業明け 冬季休業前	就職壮行式	講演会② 社会人基礎力 文化講演会 就職面接指導		進路ガイダンス 進路体験作文	進路結団式
冬季休業明け 卒業	就職者対象セミナー 労働基準監督署セミナー	金融経済セミナー		社会人となる心構え	進路報告会 社会人マナーセミナー



【表 15】 キャリア教育年間計画（3 学年）モデル

	キャリア教育年間計画 (3 学年) モデル	区分け
夏季休業前 4月	進路講演会 就職者面接指導 職業講話 SPI 講座	就職に向けた直前の準備期
夏季休業明け 冬季休業前	就職壮行式 進路報告会	就職活動の実践期
冬季休業明け 卒業	社会人マナーセミナー	社会人に向けての準備期

【表 16】キャリア教育年間計画（3学年）モデルと

キャリア発達を支援する自立活動の「キャリアデザイン」年間計画

	キャリア教育年間計画 (3学年) モデル	キャリア発達を支援する自立活動 「キャリアデザイン」年間計画	
夏季休業前 4月	進路講演会 就職者面接指導 職業講話 SPI 講座	4月	オリエンテーション キャリアでカフェ 就職活動にふさわしい身だしなみ ジョブカフェ見学
		5月	コミュニケーションの種類 「認知」の働きとトレーニング ライフプラン 自分と仕事
		6月	給料の使い方 社会人になる心構え チームの力を考えよう 職業人インタビュー
		7月	高校生活 就職に向けてのスケジュールリング 求人票の内容 応募前職場見学の流れ
冬季休業明け 夏季休業明け	就職壮行式 進路報告会	8月	履歴書書きの基本のルール
		9月	就職に向けて～面接に向けて～ 就職に向けて～事前確認～ リラクゼーションの仕方 お礼状の書き方
		10月	お礼状の郵送の仕方 レジリエンス ストレスマネジメント1 ストレスマネジメント2
		11月	アンガーマネジメント 社会人の趣味・余暇活動 仕事の指示を正確に受ける 電話対応の仕方
		12月	就職後のトラブルへの対処法 ふりかえりカフェ デリカフェの準備
卒業 冬季休業明け	社会人マナーセミナー	1月	デリカフェ 1年間の振り返り

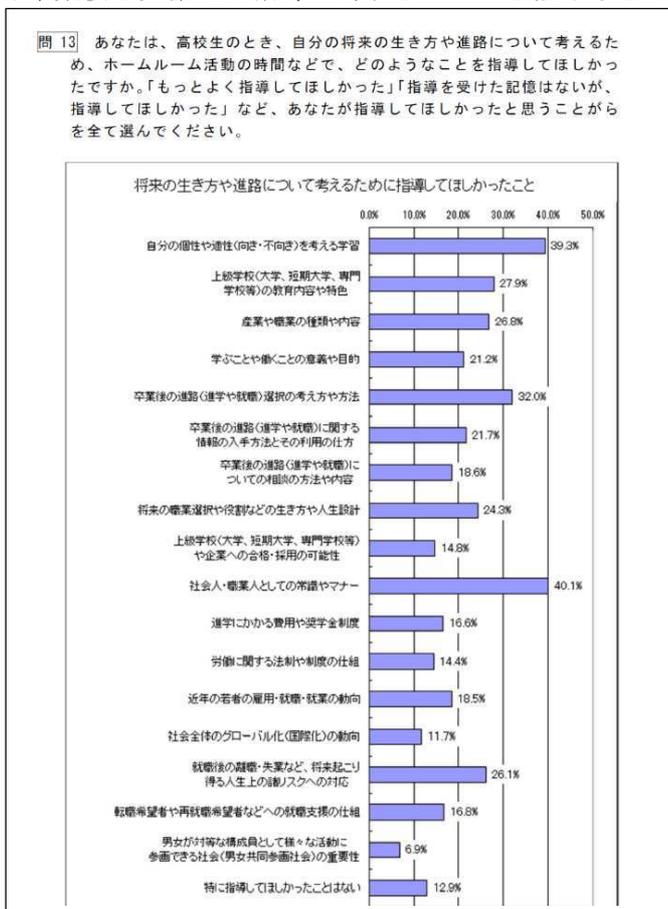
「キャリアデザイン」の35時間の内容は、キャリア教育年間計画（3学年）のモデルと、高等学校における就職のスケジュールを踏まえて作成し、実施時期における学びの連続性が図られるように留意した。具体的には、同様の題材を扱う場合には自立活動での学習が、キャリア教育で学習する内容の予習もしくは復習となるよう考慮している。

自立活動は本来、個に応じた指導であり、年間指導計画は個別のものとなる。しかし、サンプルパッケージのコンセプトは、教員がキャリア発達を支援する自立活動のイメージを持つための資料であるので、指導内容は、あえてキャリア教育年間計画（3学年）のモデル及び、高等学校における就職のスケジュールを踏まえることとした。この点については留意して捉える必要がある。

(ウ) 調査結果から

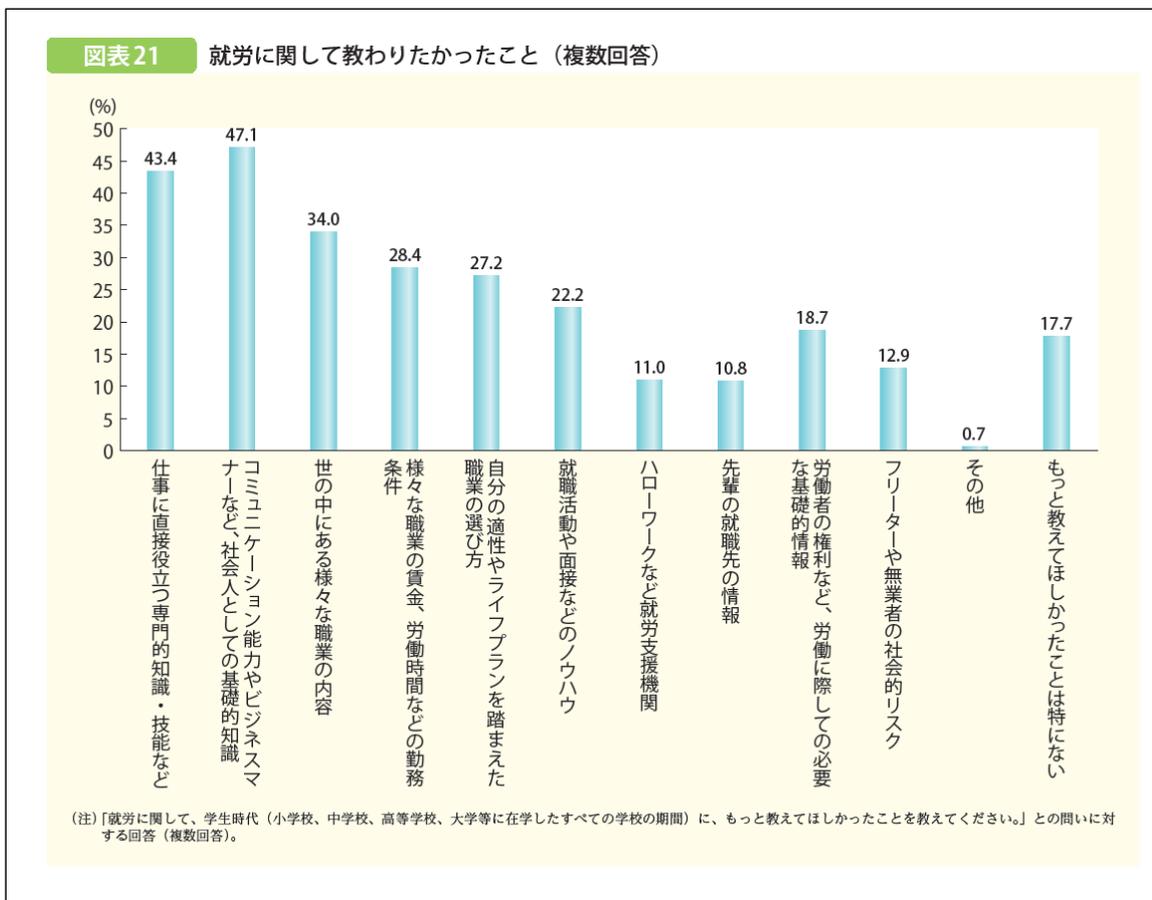
自立活動「キャリアデザイン」の年間計画は、キャリア教育年間計画（3学年）のモデルの内容との関連を図った配列を行ったが、もう一つの視点として、卒業生らの在学時代に指導して欲しかったこと等のニーズを参考にすることとした。

卒業生らのニーズが分かる調査結果の一つ目として、2012年度に国立教育政策研究所の生徒指導・進路指導研究センターが実施した高等学校卒業生に対する「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」（有効回答数 1, 169）における、卒業生が高等学校時代に「指導してほしかった」内容【図 11】がある。卒業生の25%を超える人が、「社会人・職業人として常識やマナー」「自分の個性や適性を考える学習」「卒業後の進路選択の考え方や方法」「産業や職業の種類や内容」「就職後の離職・失業等、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応」について、指導して欲しかったと答えている。このことから、自己の理解を深める内容や卒業後を見据えた指導に対するニーズを読み取ることができる。



【図 11】 将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと  
(国立教育政策研究所, 「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」)

調査の二つ目として、内閣府が実施した 2018 年度の「子供・若者白書」の特集「就労等に関する若者の意識」の調査（有効回答数 10, 000）がある。これによれば、学生時代に「就労に関して教わりたかったこと」【図 12】では、「コミュニケーション能力やビジネスマナーなど、社会人としての基礎的知識」「仕事に直接役立つ専門的知識・技能など」が4割を超えていた。また、25%を超えるものとしても、「世の中にある様々な職業の内容」「様々な職業の賃金、労働時間など勤務条件」「自分の適性やライフプランを踏まえた職業の選び方」等があり、卒業後を見据えた指導にニーズがあることが読み取れる。



【図 12】 就労に関して教わりたかったこと

（内閣府、「子供・若者白書 就労等に関する若者の意識」）

これらの調査を踏まえ、就労後を見据えて、以下の内容【表 17】を 35 時間の中に盛り込むこととした。

【表 17】 調査によるニーズの多かった項目と「キャリアデザイン」の授業内容

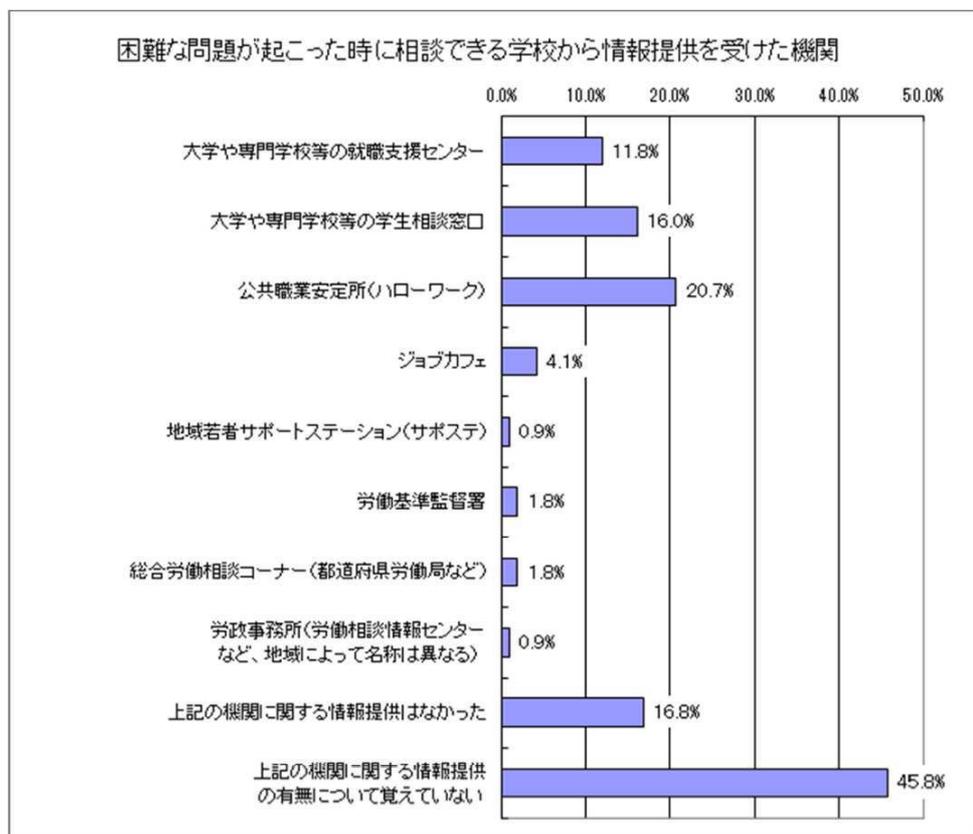
ニーズの多かった項目	適性・個性に関する内容	社会人のマナー等の内容	職業の内容、賃金等	諸リスクへの対応
「キャリアデザイン」の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ライフプラン</li> <li>・自分と仕事</li> <li>・チームの力を考えよう</li> <li>・社会人の趣味と余暇活動 等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身だしなみ</li> <li>・コミュニケーションの種類</li> <li>・社会人になる心構え</li> <li>・仕事の指示を正確に受ける</li> <li>・電話対応の仕方</li> <li>・お礼状書き 等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・給料の使い方</li> <li>・職業人インタビュー 等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジョブカフェ見学</li> <li>・ストレスマネジメント</li> <li>・アンガーマネジメント</li> <li>・就職後のトラブル対処法 等</li> </ul>

(エ) 「体験的な学び」の視点

「体験的な学び」(文部科学省, 2011)としては, ジョブカフェ見学や職業人インタビュー, デリカフェ等の直接体験を含む体験活動等を取り入れた。既述の体験活動の8つの効果(p.11)が, 自立活動並びにキャリア発達の内容を充実させると考えたこと, また, 生徒同士または生徒と指導教員の関係性の構築という点から, 有効であると考えた。

また, ジョブカフェ見学は, 新旧学習指導要領のキャリア教育の項目に示されている「地域や産業界の人々の協力を積極的に得るよう配慮する」という視点からも有意である。さらには, 高校生の就職後の高い離職率等を考慮して, 将来につながる指導になると考えた。理由として, 先の国立教育政策研究所の調査において, 高等学校時代に情報提供された機関について, 「情報提供の有無について覚えていない」という回答が45%を超えている【図13】ことを踏まえ, また, 情報提供を受けた者は, 「困難への対応」として, 「公共機関を活用する」としている者が一定数いることから, ジョブカフェ見学は, 離職後等に役立つ情報であると考えた。なお, ジョブカフェは, 正式名称を「若年者のためのワンストップサービスセンター」といい, 「就職セミナーや職場体験, カウンセリングや職業相談, 職業紹介」(厚生労働省)を行う場であることから, 自立活動の対象生徒にとって, 将来を見据えて知っておくべき機関として, 見学に訪れることを計画した。

問9\* 学校や職場などで学んだり働いたりすることが困難な問題が起こったときに相談できる以下の機関のうち、高校生のときに学校から情報提供を受けたものを全て選んでください。



【図13】 将来の生き方や進路について考えるために指導してほしいこと  
(国立教育政策研究所, 「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」)

これらの内容は、通常の教育課程におけるキャリア教育を受けた卒業生のニーズであり、それらが、直ちに特別の教育課程である通級による指導のニーズと解釈することはできないが、キャリア教育の中で困難さを抱えた生徒に対して、きめ細かな指導をしていく上で  
の視点としては生かせると考えた。

(ウ) 基礎的・汎用的能力の4能力23要素の視点

「キャリアデザイン」の年間計画が、キャリア発達を支援する自立活動の内容として適切なものになるためには、基礎的・汎用的能力の4能力だけでなく、4能力をさらに細分化した23要素のどれについての学びであるかを整理する過程を踏まえる必要があると考え、一覧【図14】を作成した。各授業の学習が、チームワークやリーダーシップ等を含めた23要素のどれに重点を置いた学びであるかを指導教員が意識することにより、指導内容の焦点化が図れると考えた。なお、自立活動の6区分27項目については、個々の実態に応じて、区分並びに項目を選択することとなることから、その区分や項目については、あえて一覧としては示さないこととした。

	自己理解・自己管理能力					課題対応能力					人間関係形成・社会対応能力					キャリアプランニング能力								
	自己理解	前向き	動機付け	忍耐力	ストレス	主体的	情報理解	本質理解	原因追究	課題発見	計画立案	実行力	改善	活用理解	働きかけ	コミュニケーション	チーム	リーダー	学びごと	多様性	将来設計	選択	改善	
1	オピニオンリーダーシップ	○	○			○	○																	
2	キャリアデザイン	○	○			○	○																	
3	就職活動にかかわる知識・スキル	○	○			○	○																	
4	ジョブフェア見学	○	○			○	○																	
5	よちよちはコミュニケーション・スキル	○	○			○	○																	
6	「感動」の働きとトレーニング					○																		
7	マイアプテン	○	○			○	○																	
8	自立と仕事	○	○			○	○																	
9	給料の使い方	○	○			○	○																	
10	社会人になる準備	○	○			○	○																	
11	ゲームのルールを学ぶ	○	○			○	○																	
12	職業人インタビュー	○	○			○	○																	
13	高校生活	○	○			○	○																	
14	就職に向けてのスケジュール	○	○			○	○																	
15	求人票の内容	○	○			○	○																	
16	応募書類の書き方の流れ	○	○			○	○																	
17	履歴書書きの基本のルール	○	○			○	○																	
18	面接に向けて	○	○			○	○																	
19	就職試験に向けて	○	○			○	○																	
20	リクナビ・マイナビの仕方	○	○			○	○																	
21	求職者の書き方					○	○																	
22	求職者の書き方					○	○																	
23	面接の準備	○	○			○	○																	
24	ストレスマネジメント1	○	○			○	○																	
25	ストレスマネジメント2	○	○			○	○																	
26	アンダーウェア	○	○			○	○																	
27	社会人の服装・面接服装	○	○			○	○																	
28	仕事の理由を正確に受ける	○	○			○	○																	
29	電話対応の仕方	○	○			○	○																	
30	就職後のトラブル対応	○	○			○	○																	
31	高専から大学へ	○	○			○	○																	
32	ゼミ生活の準備	○	○			○	○																	
33	ゼミ生活の準備(継続)	○	○			○	○																	
34	ゼミ生活	○	○			○	○																	
35	1学年間のまとめ	○	○			○	○																	

【図14】『キャリアデザイン』年間計画と4能力23要素

(カ) シラバス

「シラバス」【図15】とは、「生徒が履修科目を選択するために、科目の目標や内容、年間計画、授業の形態、使用教材、評価の方法、留意事項などを記載した授業計画」(中央教育審議会、2006)のことであり生徒や保護者への説明用に作成するものである。国立教育政策研究所の全国の公立高等学校普通科265校を対象とした調査(国立教育政策研究所、2010)では、87.8%の高等学校がシラバスを作成しており、私立学校を合わせても、8割を超える高等学校がシラバスを作成している。

自立活動は、他教科・科目と違う特性を持った領域であり、そのような点を踏まえると、生徒・保護者・教員への周知の意味を含め、自立活動のシラバス作成は必須であるともいえる。

シラバスが示されることにより、全ての生徒は自立活動と他教科・科目の違いを知ることとなる。また当該生徒は、目標や内容に見通しが持つことが可能になり、自立活動において要といえる主体的な授業への姿勢を促すきっかけになる。そして、保護者にとっても、自立活動の特徴を入学時等に重ねて知る機会となり、教育活動への理解が深まると考える。加えて、教員にとっては、他教科・科目と自立活動の特性の違いや学びの連続性を再確認

する資料となり、相互の関連を図る際の資料になると考える。

2018年度シラバス 『キャリアデザイン』

領域	自立活動	単位数	1単位	学年等	3学年対象者
使用教科書			なし		
副教材			なし		

**1 学習の到達目標**

自立活動の目標に基づいて、個別に目標を設定します。

**【自立活動の目標】**

個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達を促進する。

**2 『キャリアデザイン』の特色（目標を実現するための重要な点を含む）**

- ① 自立に向けて、どんな課題があるかを検討し、個々の課題の目標に向けた個別の学習内容を、学んでいきます。
- ② ①について、担当者とともに、個別の指導計画を作成します。
- ③ 自立活動は、主体的な姿勢が何より大切です。
- ④ キャリア発達を支援する基礎的・汎用的能力の育成の視点を取り入れた自立活動を行います。就職活動や就職後に困らないように、どのようなことを身に付けるか、どの、又、困った時はどのように対処すればよいのか、等について、学んでいきます。

**3 学習の計画（どのような内容をどの時期に学ぶのか）**

次項を参照

<学習内容についての補足説明>（授業の形態等の詳細な説明を含む）

- 導入では、5分程度のコグトレ等の認知機能強化のトレーニングを行い、「認知」の働きや、自分の得意または不得意な「認知」について、気付いたり、対処していく取り組みを行います。
- 展開は、ワークシートに記入しながら、進めていきます。
- まとめは、振り返りシートの記入を中心に、行います。
- 体験活動は、自己の出会いと成就感や自尊感情の獲得、社会性や共に生きる力、問題発見や問題解決能力を育む等のさまざまな効果があることから、本授業においても、ジョブカフェ見学やデリカカフェ等の機会に、体験活動を行っています。

**4 評価の観点・方法**

- ・ 個別の指導計画の目標から見て、課題が達成されたかどうか、評価の観点になります。このため、評価は、具体的には次のものを対象にします。
- ・ 授業の中で使用したプリント等の提出物の内容
- ・ 発表の仕方や内容
- ・ 学習活動への参加状況（授業中の態度・発言内容、作業への取り組み等）
- ・ 振り返りシートの内容

また、1年間の学習の評価は、評定ではなく、文章で表します。上記の内容を総合的に判断して、決定します。

**5 特に強調しておきたい点（留意すべき点、担当者からのメッセージ等）**

計算ができるようになるには計算の方法を学びます。自立や社会参加がスムーズになるようには、自立と社会参加に向けて、必要なことを学びます。社会に出てから現場で、学ぶという手ですが、準備ができることは準備しておきたいものです。いかがですか？

【図 15】『キャリアデザイン』シラバス

(キ) 想定される具体的な人物

サンプルパッケージの「ワークシート編」は、コンセプトに基づいて、キャリア教育年間計画（3学年）のモデルや就職スケジュールとの関連を図りながら、卒業生らのニーズ等を参考にして作成したものである。

そのため、自立活動でありながら、汎用的な内容となっている。そこで、個別の支援についてのイメージできるような、通級による指導で想定される具体的な人物を2人登場させることとした【図 16】。

真面目で、頭の回転が速い

そうくん

ほがらかで社交的

丁寧な受け答えは得意、雑談は苦手

はなねさん

興味のあることには没頭、そうでないことには集中が続かない

ルールに厳しく、多様な人との関わりが難しいため、トラブルが起こることが多い

そうくん

やるべきことに優先順位をつけて取り組むことが難しいため、生活に支障がきたすことが多い

【図 16】想定される具体的な人物

具体的な人物を登場させることで、キャリア発達を支援する自立活動における個別の支援のイメージが持ちやすくなり、また、イラストが入ることにより見やすくなる考えた。

一方、授業の構想には、ユニバーサルデザインの具体例を示すことで、想定される具体的な人物の特性や課題とは異なる人物が対象生徒となった場合において、個別の支援を行う際の手掛かりを示せると考えた。一般的に、ユニバーサルデザインの視点は、一斉指導における全体への支援を示すが、ここで示すユニバーサルデザインは、個別の支援の参考にとけるという視点での具体例であることに留意する。そのため、実際の個別支援においては、この具体例を参考にしながら、その生徒に合った個別支援の方法に変更したり、調整したりしていく必要がある。

(ク) 授業の進め方

キャリア発達を支援する自立活動における「キャリアデザイン」授業の進め方については、生徒の実態を踏まえて検討されるものであるが、「ワークシート編」では、1時間の授業の進め方について、後述する実践を踏まえ、【表 18】のように提案する。

【表 18】「キャリアデザイン」の授業の進め方

授業の流れ	おおよその時間	内容
導入	10分	認知機能強化のトレーニング（コグトレ等）
展開	25分	「ワークシート編」の内容
まとめ	15分	振り返りシート

導入の認知機能強化のトレーニングについては次項で述べる。

展開については、個別の指導計画等に基づいて、「ワークシート編」の内容を、必要に応じて作り替えながら実施することを想定して作成している。なお、実施の際には、【表 16】で示した「キャリアデザイン」の年間計画は一例であるので、実施時期をずらしたり、取り組む内容を選択したりすることもできる。また、生徒の実態に応じては、ワークシートに軽重をつけて取り組むことが求められる。例えば、「アンガーマネジメント」の学習の際に、そうくんは、ルールに厳しく、ルールを守れないタイプの人との「人間関係のトラブル」を起こしがちという特徴があるので、自分の認知の特性に気付き、異なる認知を学ぶ学習を重点的に行うことが考えられる。一方、はなねさんは、「優先順位をつけられない」ために生活に支障が生じているが、その際に適切に対応したり、コミュニケーションを取ることができないという特徴があるので、アンガーマネジメントのみならず、さまざまな気持ちの理解に重点を置いた学習により、コミュニケーションの基礎を作っていく学習が必要とも考えられる。このように、ワークシートは、生徒に応じた作り替えをしながら改変して使用していく【図 17】。

**アンガー マネジメント**

年 月 日 ( )

年 組 氏名

- アンガーとは「怒り」の意味。  
 例 「怒り」は悪いことではない。感情に悪い悪いはない。  
 例 でもこんな「怒り」は注意が必要。→しゅっちゅう怒ってしまふ。怒りがずっと続いてしまふ  
 →強くなってしまふ →怒りを消すってしまふ
- 最近感じた「怒り」は、どんなものがあったか、書いてみよう。
- 「怒り」は、次のような流れで起きる感覚だよ。  
 出来事 → 考え → 感情  
 (注) 出来事 → 考え → 感情
- 次のような出来事があった時、「怒り」が起きる場合と起きない場合がある。流れを書いてみよう。  

出来事	考えたこと	感情	怒り
友達がぶつかった	わざとぶつかった	許せない	怒りが起きる
			怒りが起きない
自分のところに紙が落ちてきた	先生のいやがらせかも	先生のくせに許せない	怒りが起きる
			怒りが起きない
- 「怒り」を減らす時には、心の中で、セルフトークをするのは、効果的な方法。  
 例 侮辱をさぼる人がいる → (思いがち) ひんんで私だけ、みんなずるい  
 → (セルフトーク) 侮辱をしっかりとやる私ってすばらしい  
 例 大変な仕事を任せられた → (思いがち) みんな、ずるい 私だけ仕事をしなきゃいけない  
 → (セルフトーク) みんな、ずるい 私だけ仕事をしなきゃいけない
- 怒りを減らしたり、セルフトークをすることで、怒らなくてもよいことは、怒らないでいい方がよい。そして、書いてほしいことを伝えたい方がいい。(アクションのページを参考にしよう) だから、「怒り」が書いてきた時には、お静かに「ストップ」と自分に声をかけてみよう。
- でもそれでも「怒り」がふられて来ても構わない。そんな時は、「怒り」の立つのルールを覚えておこう。  
 人を傷つけない 自分を傷つけない モノにあたらない

編成者・長崎県立 山口県立 山口県立 山口県立 山口県立 山口県立

【図 17】ワークシート「アンガー マネジメント」

学習のまとめは、振り返りシート（【図 18】）の記入となるが、振り返りシートの内容は、1 時間の流れを想起させる程度の、記入に負担がかからないものがよいと考える。自立活動の授業内容は、生徒の課題や困難さに向き合う内容であり、授業自体に負担がかかっていると考えられるため、振り返りによりさらなる負担をかけないことが必要と考える。

**振り返りシート**

年 組 氏名

- 一週間の振り返りを書いてみよう。  

- 今日の主な学習の内容と感想を書いてみよう。  

タイトル	感想
- 今日の学習を生かして、普段の生活や学習で、役立てたいことを書いてみよう。  

- 次回の日付とタイトルを覚えておこう。  

月 日 ( )	

【図 18】振り返りシート

(ケ) 認知機能強化のトレーニング

35 時間の授業の導入では、認知機能強化のトレーニング(以下、コグトレ)を実施することを提案する。宮口 (2016) は、困っている子供の特徴を、認知機能の弱さ、感情統制の弱さ、融通の利かなさ、不適切な自己評価、対人スキルの乏しさ、身体的不器用さの 6 つに分類している。また、これらを支援する方法として、コグトレの有用性を示している【表 19】。

【表 19】困っている子どもとトレーニング

(宮口幸治 『1日5分!教室で使えるコグトレ 困っている子どもを支援する認知トレーニング122』)

困っている子どもの特徴		高めたい力	トレーニング
1	認知機能の弱さ	聞く力, 見る力	注意力をつけるトレーニング
2	感情統制の弱さ	感情を統制する力	感情をうまくコントロールできる トレーニング
3	融通の利かなさ	柔軟な思考	問題をうまく解決できる トレーニング
4	不適切な自己評価	適切に自己評価できる力 適切に情報収集する力	人との接し方を学べるトレーニング
5	対人スキルの乏しさ	相手の心情を読み取る力	人との接し方を学べるトレーニング
6	身体的不器用さ	ボディイメージをもつ 姿勢の保持 等	身体をうまく使うトレーニング

認知機能とは、「記憶、言語理解、注意、知覚、推論、判断といったいくつかの要素が含まれた知的機能」で、「五感を通して外部環境から情報を得て整理し、それを基に計画を立てて実行し、さまざまな結果をつくり出していく過程で必要な能力であり、人がよりよく生きるための機能」(宮口, 2015)である。また、新特別支援学校学習指導要領解説によると、自立活動の環境の把握の項目の中には、「認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること」があり、その説明によれば、認知とは、「感覚を通して得られる情報を基にして行われる情報処理の過程であり、記憶する、思考する、判断する、決定する、推理する、イメージを形成するなどの心理的な活動」である。また、「こうした活動を適切に進めていくことによって幼児児童生徒は発達の段階に即した行動をすることが可能となる」とされている。一方で、障害のある生徒の場合、「視覚・聴覚・触覚・嗅覚・固有覚・前提覚等を通してとらえた情報を適切に理解する困難であったり、特定の音や光に過敏に反応したりする場合がある」とし、「認知の特性」があるとしている。

通級による指導の対象となる生徒の中には、こうした認知の特性のある生徒がいると考えられることから、認知の特性を理解する、改善・克服する等の学びを行っていくことは有用と考えた。

コグトレやビジョントレーニング等は、認知機能を強化するトレーニングとされており、認知についての弱いところを強化したり、得意を伸ばしたりするために使用できる教材である。さまざまな教材がある中で、学習プリントとして印刷してすぐに活用できるという書籍が、同一筆者から数冊出ているコグトレについて、本研究では取り上げることとする。理由として、印刷してすぐに使用できる教材があることは、高等学校で自立活動を担当する指導教員にとってイメージしやすく、生徒の実態に合ったものを選定することができるためである。

### (3) サンプルパッケージ「準備編」

「準備編」は、「見立て」に関する資料を載せている。本研究では、「見立て」の「見る」は、生徒の実態を見ることであり、いわゆるアセスメントと捉えた。また、「見立て」の「立てる」は、個別の指導計画等を立てることと捉えることとした。「見立て」は、自立活動で非常に重要なプロセスとなるが、高等学校における「見立て」は、経験の少ない高等学校の教員が多いと思われることから、手掛かりとなる資料があるとよいのではないかと考えた。

#### ア 「見立て」

##### (ア) 「見立て」に関する視点

通級による指導の対象となる生徒の判断については、特別の教育課程の編成が伴うため、さまざまな考慮すべきことがあることは先に述べた。さらに、本研究は、「キャリア発達を支援する」自立活動であるので、既述 (p. 17) の学校のキャリア教育等のいわゆる通常の教育課程の1層ならび2層の支援を十分に行って、さらに、3層である個別の指導・支援にお

いてもなお困難さを抱えるであろう生徒についての判断が必要になるため、いわば、困難さについて、二重の判断が必要になるとも考えられる。しかし、困難さの把握の方法に絶対的なものはないことから、「これまですでに実施してきている生徒にかかわる情報を基本としながら、必要に応じ、新たな情報を加えていくプロセスを整理していくことが有効である」（岩手県教育委員会，2018）ように、プロセスの整理や、その中で「見る」に当たるアセスメントを付加する必要があるのか等について検討を行い、学校としてのプロセスや判断基準の整理をしていくことが必要と考える。そこで、本研究では、校内委員会で、日常的に支援を必要とする生徒の情報共有や支援の在り方を行う中で、必要に応じてチェックシートを用い、困難さについて具体的に把握した上で、困難さの総合的な把握を校内委員会で判断し、対象生徒を決定していくというプロセスで行うこととする。

サンプルパッケージに登場するそうくんを例に具体的なプロセスを挙げる。

【そうくんが通級による指導の対象生徒となるまでの流れ】	トラブル↓担任の対応↓トラブル再び↓校内委員会等↓チェックシート↓通級
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1学年の頃、人との関わりにトラブルが見られた。</li> <li>・ 担任との放課後に断続的に行ったソーシャルスキルの学習による本人の気付きや、周囲の生徒がそうくんの特性を次第に理解していったことにより、徐々にトラブルは減っていた。</li> <li>・ 一部の少人数の人との関わりの中では安定して過ごすことができていた。</li> <li>・ しかし、2年生の修学旅行で、同室となったクラスメイトとの間に大きなトラブルがあり、就職に向けて、ソーシャルスキルを身に付けることが課題として、再び浮き上がってきた。</li> <li>・ 2学年の夏に有志で実施しているインターンシップには本人の意思で参加しなかった。就職に必要と思われるソーシャルスキルやキャリアに関する学習の機会が、本人の状況から見て不足と考えられた。</li> <li>・ 冬季休業前の三者面談において、これらの本人の困難さについて、本人・保護者・担任の共通理解が図られたので、担任は校内委員会で、本人の現況を伝え、これまで実施してきた諸検査等の状況を踏まえて、本人の現状や自立に向けての課題について報告した。</li> <li>・ 校内委員会では、通級による指導「キャリアデザイン」の3学年での受講を想定して、さらに情報共有していくことを確認した上で、チェックシートを実施することにした。</li> <li>・ チェックシートを実施した結果、コミュニケーションや言葉遣いによる気付きが9項目中7つ該当、対人関係における気付きは8項目中6つ該当した。</li> <li>・ チェックシートの結果を、校内委員会で報告し、全体の指導の場面における学びの様子や1学年時の担任によるソーシャルスキルの個別の指導について振り返りながら、総合的に検討した結果、個別に具体的な支援を継続的に行う必要があるとの方向性となり、通級による指導「キャリアデザイン」の受講を、本人と保護者に提案するという事になった。</li> <li>・ 本人、保護者と数回の面談を重ねたところ、受講を希望したので、ソーシャルスキル等を含めた、キャリア発達を支援する自立活動を実施していくこととなった。</li> </ul>	

このように、生徒の状況について、これまでの経過や現状、チェックシートの結果、諸検査の結果等を踏まえ、通常教育課程で行ってきた支援の状況等から見て、生徒の支援が十分にできないと判断した場合に、特別教育課程による特別な指導が必要な生徒であるかを判断し、対象生徒を決定していくということになる。この対象生徒決定までの過程を、本研究では「アセスメント1」と位置付ける。

(イ) 「見る」

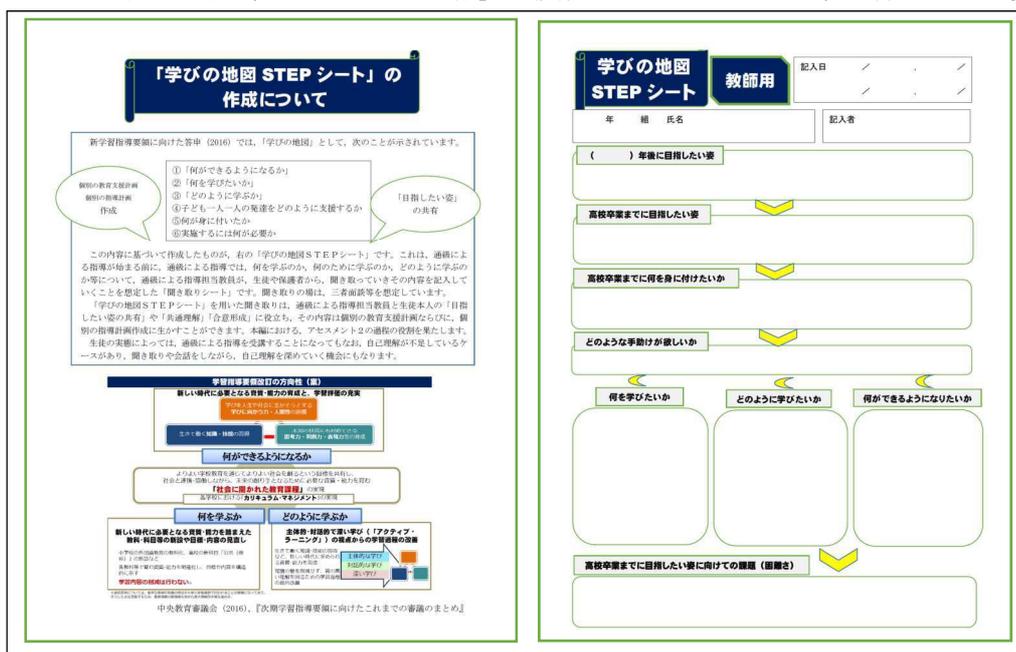
① 「学びの地図 STEP シート」

自立活動の指導内容については、個別の指導計画を作成し、計画する。作成の際は、これまで得てきた情報を整理し、それを参考にしていくが、自立活動の目標に即して考えると、本人・保護者の思いや願いを聞き取りながら作成していくことが必要である。そこで、通級による指導がスタートする前に、三者面談等において、生徒自身が目指す姿に向けて、

現在、どのような課題があり、何を身に付けたいか等を考えさせる学びの地図 STEP シート【図 19】について、三者で作成することを、提案する。学びの地図 STEP シートは、学習指導要領に向けた答申（2010）で示された以下の内容を参考に作成した。

- 1 「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
- 2 「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
- 3 「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）
- 4 子供一人一人の発達をどのように支援するか（子供の発達を踏まえた指導）
- 5 何が身についたか（学習評価の充実）
- 6 実施するために何が必要か（学習指導要領等の理念を実現するための必要な方策）

学びの地図 STEP シートは、指導教員による「聞き取りシート」を想定している。三者面談等で、目指したい姿や自分の課題、身に付けたいこと等について、三者でさまざまな対話を重ねながら、項目毎の内容を指導教員が聞き取ることで、目指す姿の共有に役立てることができ、個別の指導計画作成に活かせると考えた。なお、後述の授業実践 3 回目において、本シートを用いた自己理解の学習を行っている。本シートを用いた学習は、生徒の新たな気づきを引き出すことができたことと捉えられることから、授業における活用にも効果があると考えた。一方で、授業における取組には個人差があり、所要時間もかかることから、授業においては、「課題」「身に付けたい力」「目指したい姿」の 3 ステップのミニ版として活用することを、「ワークシート編」の複数のワークシートにて、提案している。



【図 19】 学びの地図 STEP シート

② 「自立に向けてのチェックシート」

自立や社会参加に向けては、より具体的な視点で、現状について把握して、必要と思われる力について伸ばしていく必要がある。そこで、自立に向けてのチェックシートを用いた現状や課題の具体的把握について提案する。自立に向けてのチェックシート【図 20】は、本人による記入を想定しており、通級による指導が始まる前に一度実施することで、本人の自己理解が進み、一方、指導教員にとってはアセスメントの側面を持つ。また、年間を通じて数回実施することにより、本人が自分の成長を感じたり、指導教員が生徒について詳しくアセスメントしたりする際の資料として機能するようにしたい。

### 自立に向けてのチェックシート 生徒用

「自立に向けてのチェックシート」は、本人が記入することを想定したチェックシートであり、年間を通じて毎回（例：4月・7月・12月）のチェックを行うことを想定して作成しています。  
「自立に向けてのチェックシート」は、自分の現状を把握したり、自分の成長を感じたりすることができるツールです。活用するタイミングは様々ですが、年度当初等の進捗による指導がスタートする前に行うことで、いわゆるアセスメントとして活用することができます。本欄にはアセスメントの過程になります。また、個別の指導計画作成の際には、目標や指導内容を立てる際の参考にすることができます。

○日常生活 できる、いかにやっている・・・3 構々できる、構々行っている・・・2 できない、行っていない・・・1

項目	1 回目	2 回目	3 回目
1 決まった時間に一人で起きる			
2 パラソルのよい喪事をとる			
3 スーパー、病院等を一人で利用する			
4 場に応じた身だしなみをする			
5 体育授業の時に、必要な動きをする			
6 小道具を計画的に借りたり、返却したりする			
7 公共交通機関（電車・バス等）を一人で利用する			
8 机よ、ロッカー等の整理整頓をする			
合計			

○自己理解

項目	1 回目	2 回目	3 回目
1 自分の長所が分かる			
2 自分の苦手なことが分かる			
3 目標を持つことができる			
4 できないことがあれば、援助を求めることができる			
合計			

○コミュニケーション

項目	1 回目	2 回目	3 回目
1 自分からあいさつする			
2 分からない時に質問したり、確認したりする			
3 作業終了等の報告や連絡をする			
4 目上の人と丁寧な言葉遣いで会話する			
合計			

### ○作業

項目	1 回目	2 回目	3 回目
1 1 日の時間、軽作業等で働く体力がある			
2 始業・終業などの決まった時間を守ることができる			
3 1 日の途中で休憩できる			
4 必要な道具や作業道具が分かり、ルールが守れる			
5 簡単に作業ができる (三つ折、新聞紙束、糸通し等)			
6 作業を中断したりせず、集中して取り組める			
7 人がしていない仕事を探して取り組む			
8 人と共同作業ができる			
合計			

### ○勉強の進捗

項目	1 回目	2 回目	3 回目
1 卒業後、就職したいと思っている			
2 仕事について、よりよくするための方法を考えたり、練習する			
3 自分が楽しくなくてもやり進められる			
4 義務も多量にこなして作業ができる			
合計			

### ○総合計

	1 回目	2 回目	3 回目
日常生活			
自己理解			
コミュニケーション			
作業			
勉強進捗			
総合計			

書いてみて  
気付いたこと

	1 回目	2 回目	3 回目

原生労働者、2006「特任支援のためのチェックリスト」ならびに  
京都教育大学、2011「発達障害児に関する専門性向上ガイドブック高等学校 vol.2-発達障害立ちなと高等  
学校」(発行：国から自分発見チェックリスト)より、参照。

【図 20】 自立に向けてのチェックシート

③ プロフィールシート

プロフィールシートは、これまでの生徒の情報や、学びの地図 STEP シート並びに自立に向けてのチェックシート等から得られた情報を、一括して載せる様式【図 21】である。プロフィールシートの作成者は、指導教員や担任等が考えられるが、自立活動の学びは、特設する自立活動のみならず、学校の教育活動全体を通じて行うため、教員間の連携を図る上で、生徒に関する情報を一括してまとめておくことは重要となる。

基本資料

【個別の指導計画 様式例】

個別の指導計画 №1 プロフィールシート

作成年月日	作成 記入者	担任	学年
名(姓)が(な)	姓	生年月日	性別

本人の状況

・学業

・生活

・コミュニケーション

・その他

連絡希望

本人の願い	保護者の願い	学校としての願い

長期目標

短期目標

第 一 期

第 二 期

※1 「通級による指導」(自立活動)に活用する指導計画(個別の指導計画)を作成する際、指導計画に定める目標・課題を明確にする。指導計画(個別の指導計画)を作成する際、指導計画に定める目標・課題を明確にする。

※2 「通級による指導」(自立活動)に活用する指導計画(個別の指導計画)を作成する際、指導計画に定める目標・課題を明確にする。指導計画(個別の指導計画)を作成する際、指導計画に定める目標・課題を明確にする。

【図 21】 プロフィールシート例

(岩手県教育委員会「高等学校における「通級による指導」の手引」)

(ウ) 「立てる」

① 個別の指導計画

これらの情報を踏まえて、個別の指導計画【図 22】を立てていく。「見る」が適切に行えていれば、個別の指導計画を「立てる」際の資料として役立ち、「個の課題」を明確にした個別の指導計画を作成することができる。なお、困難さを改善するために、教科の指導が必要になる場合には書き加えていくこととするが、既述 (p. 3) のとおり、各教科の

内容は取り扱いながらできるものとされ、教科の補充ではないことに留意する。

個別の指導計画		実施内容名「 」			
氏名					
実 態 把 握	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き コミュニケーション
選 定 目 的	<p>① 実態把握(に基づき、いくつかの指導目標の中から、優先順位を明確にして目標を設定する。</p> <p>② 区分け項目の中から、指導目標も選択するために必要な項目を選定する。(区分け項目の優先順位は、指導後に必要な区分け項目のみとする。)</p>				
具 体 的 な 指 導 内 容	<p>③ 選定した項目を契機とした具体的な指導内容を設定する。</p>				
進 捗	目標(本人の目指す姿)	手立て	評 価		
	<p>④ 最終的な指導内容を定めて、本人の目指す姿を達成目標として設定する。</p>	<p>⑤ 目標(本人の目指す姿)を達成するための指導方法を話し合ったり(学習方法等を記入する。</p>	<p>⑥ 指導の経過をふまえた目標達成の状況を定めてその達成から、転換により評価する。 ⑦ 評価による指導(自立活動)に相当する指導の評価とする。</p>		

【図 22】個別の指導計画例

(岩手県教育委員会「高等学校における「通級による指導」の手引」)

② 個別の指導計画作成に関わる参考資料

個別の指導計画の作成の際には、実態を把握した上で、目標を決め、指導内容を選定しなければならない。その作成の際の参考となるものとして、「高等学校生徒の自立活動における指導段階の例」【図 23】を作成した。

## 1 健康の保持

(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること

実態例 頻繁に欠食があり、摂っている食事についても極端な偏食で、食生活のバランスが悪い生徒

STEP 1 自分の食事の状況について、数日間、記録をとる等、把握する

STEP 2 高校生が1日にとるべきエネルギーや栄養素について、調べる

STEP 3 自分の食事と高校生の理想的な食事を比較して、自分の食事の状況を改善する

STEP 4 自分の食事の状況を改善するための方法を調べ、実行できそうなものを選んで試す

STEP 5 食事について心がけることが分かり、生活の状況に応じて、おおむね適切な食事をすることができる

この区分で取り上げる他の実態例

- ・昼夜逆転した生活をしている生徒
- ・特定な食物や衣服に強いこだわりを示す生徒
- ・整理・整頓の習慣が身に付いていない生徒
- ・清潔や衛生を保つことの必要性を理解していない生徒

他項目との関連例

- ・自分の体調や変調をわからずに無理をしてしまう生徒
- ・温度に適した衣服の調節を身に付ける必要のある生徒 等

(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること

実態例 食事制限のある病気にかかっているが、隠れて好きなものを食べる等、病気についての理解が低い

STEP 1 病気について学び、自分の病気について把握する

STEP 2 服薬や食事制限、通院等、自分の病気に関わる状況を詳しく知る

STEP 3 病気を改善したり、小児状態を続けるための方法を、考えたり、調べる

STEP 4 病気の状態を小児状態で維持したり、改善していく方法の中で、できそうなことを試す

STEP 5 病気の状態を小児状態で維持したり、改善しながら、社会人として働くことができる

この区分で取り上げる他の実態例

- ・精神性の疾患があり、食欲減退などの身体症状や意欲の減退などの症状が見られる生徒
- ・進行性疾患があり、病気を正しく理解する必要がある生徒
- ・病気があり、生活のリズムの安定を図ることが必要な生徒

他項目との関連例

- ・病気について定期的な服薬の必要性について理解した方がよい生徒
- ・自分の病状を他の人に適切に伝え援助を求めることが必要な生徒 等

(3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること

実態例 進行性の病気にかかっており、状況が変化していくが、病態の認識が不足している

STEP 1 病気や進行状況について学び、現在の病状と今後の病状について把握する

STEP 2 服薬や通院等、自分の病気に関わる状況を詳しく知る

STEP 3 病気の進行状況の中で、生活の場面ではどのような対処方法が必要かを知る

STEP 4 対処方法の中で、優先順位が高いと思われるものを選んで試す

STEP 5 病状の進行を踏まえながら、適切に対処していく方法を学び、病状と付き合いつながり、充実した生活を送ることが出来る

この区分で取り上げる他の実態例

- ・病気により、全身の皮膚に強いかゆみが見られ、勉強に集中できない等、日常生活に支障がある生徒
- ・病気や事故等による身体の状態を理解する必要がある生徒

他項目との関連例

- ・病気の経過や進行の予防などを学習することが必要な生徒
- ・病気の進行に伴い、場や状況に応じたコミュニケーションを学ぶことが必要な生徒等



STEP 1～STEP 4は、段階の例として、創作したものです。

実態例ならびに、この区分で取り上げる他の実態例は、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説・自立活動編を参考に記載しています。

【図 23】高等学校生徒の自立活動における指導段階の例「1 健康の保持」

新特別支援学校学習指導要領解説では、「自立活動の内容は、大綱的に示してあるこ

39

とから、項目に示されている文言だけでは、具体的な指導内容をイメージしにくい場合がある」ため、「自立活動の指導を担当する教師には、学習指導要領に示された内容を参考として、個々の幼児児童生徒の実態を踏まえ、具体的な指導内容の設定を工夫すること」の必要性が示されている。このことから、自立活動の項目や指導内容の選定には難しさが伴うことが窺える。そこで、各区分における高等学校段階で見られそうな実態の一例について、【図 23】の「STEP」にて段階の例を挙げることにより、実態把握後の指導目標を立てる際に、考え方の一つとして役立てることができると考えた。また、「この区分で取り上げる他の実態例」として、高校生段階で見られそうな実態例を示すこととした。「実態例」並びに「この区分で取り上げる他の実態例」を見ることにより、個別の指導計画における、実態把握をした上での項目選定に役立てることができると目指す。

(4) サンプルパッケージ修正の方向性

国立特別支援教育総合研究所の若林上総主任研究員の助言を基に、サンプルパッケージに修正を加えた【表 20】。

【表 20】 サンプルパッケージ修正の方向性

国立特別支援教育総合研究所 若林上総主任研究員からの ご助言	ご助言を踏まえて、研究に反映した点		
	研究	サンプルパッケージ	具体的な内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・通級による指導は「特別の教育課程」であり、「通常の教育課程」で行われるキャリア教育と区別する必要がある。</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・「通常の教育課程」で行われるキャリア教育は、全ての在校生徒が対象である。</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・その「通常の教育課程」の学びの過程に困難さが生じた生徒に、通級による指導が行われるという流れがある。</li> </ul>	○		<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究の本文中で、通級による指導は、「特別の教育課程」の編成により実施される旨を重ねて記述することとした。</li> </ul>
	○		<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究の本文中並びに「ワークシート編」に、そうくん・はなねさんが通級による指導を受けるまでの流れを示し、どのような困難さがあったか、どのような指導を行ってきたか等について表した。</li> </ul>
	○	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「準備編」に、アセスメントで用いるチェックシートを掲載し、校内で取組やすく客観性のあるアセスメントの一例を示した。</li> </ul>
		○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ワークシート編」に、そうくん・はなねさんの通級による指導を受けるまでの流れを示した。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の活動全体で実施されるキャリア教育の中でどのような困り感が生じ、支援を要するのかを明らかにする段階が必要である。</li> </ul>		○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ワークシート編」に、そうくん・はなねさんの個別の指導計画並びに個別の教育支援計画を作成し、キャリア教育の中での困り感や支援の必要性を示すこととした。</li> <li>・「ワークシート編」の授業の構想の中で、そうくん・はなねさんの「思い」を吹き出しで示すが、その中で、就職活動等のキャリアの学びで感じている困り感について表すこととした。</li> </ul>

<p>・授業の構想のユニバーサルデザインの視点は、本人たちの理解につながる手立てとしてはよいが、個別の指導の場面では、ユニバーサルデザインと言っても、対象生徒に向けて行われるものとなる。通常の学級で行われる「学びのユニバーサルデザイン」と通級による指導は、指導を個別化するか否かという点で異なる概念であり、その点を強調してよい。</p>		○	<p>・「ワークシート編」の授業の構想の中でユニバーサルデザインの具体例を載せているが、授業の構想の見方の中で、通常の学級におけるユニバーサルデザインと通級による指導における個別指導に役立つユニバーサルデザインの視点を区別する必要性について、留意点として載せることとした。</p>
<p>・サンプルパッケージ全体を受講した生徒にはどのような変容が期待できるかということを明確にできるとよい。そうくんやはなねさんの課題の改善・克服するプロセスをパッケージの中で描けるとよい。</p>		○	<p>・「ワークシート編」の授業の構想の中で、そうくん・はなねさんの「思い」を吹き出しで示すが、その中で、さまざまな学びを生かそうとする本人たちの姿勢を表すこととした。</p>
<p>・35時間分の単位修得は、個別の指導計画に設定された目標の達成をもって評価される。評価の根拠となる指導目標の記述、指導目標の根拠となる実態の整理についても、どこかで触れられるとよい。</p>		○	<p>・「ワークシート編」に、そうくん・はなねさんの個別の指導計画並びに個別の教育支援計画を作成し、実態と目標等を示すこととした。</p>
<p>・実態に即した配慮が授業ごとに行われ、通級での学びが保障されても、通級による指導以外の場面で生徒が主体的に困難さを改善・克服していくように指導することまで構想されなければ、指導の成果は広がらない。</p>		○	<p>・「ワークシート編」の授業の構想の中で、そうくん・はなねさんの「思い」を吹き出しで示すが、その中で、さまざまな学びを生かそうとする本人たちの主体的な姿勢を受け止め、次の指導の在り方を示す内容を、指導上のポイントとして示した。</p>
<p>・学ぶ本人の歩みに合わせた問いの立て方、答えを導くまでの十分な時間の確保と対話、これらも指導のポイントとしてどこかで整理できるとよい。</p>		○	<p>・「ワークシート編」に、自立活動における指導の留意点を載せることとした。</p>

(5) 実践

サンプルパッケージの「ワークシート編」の中から、対象生徒の「見立て」に合った授業の構想並びにワークシートを選び、それを参考に、授業の構想や教材を作成し、授業実践を行う。授業実践は、個別の課題について伸ばしたい自立活動の内容に、基礎的・汎用的能力である4能力の視点を取り入れて実施する。

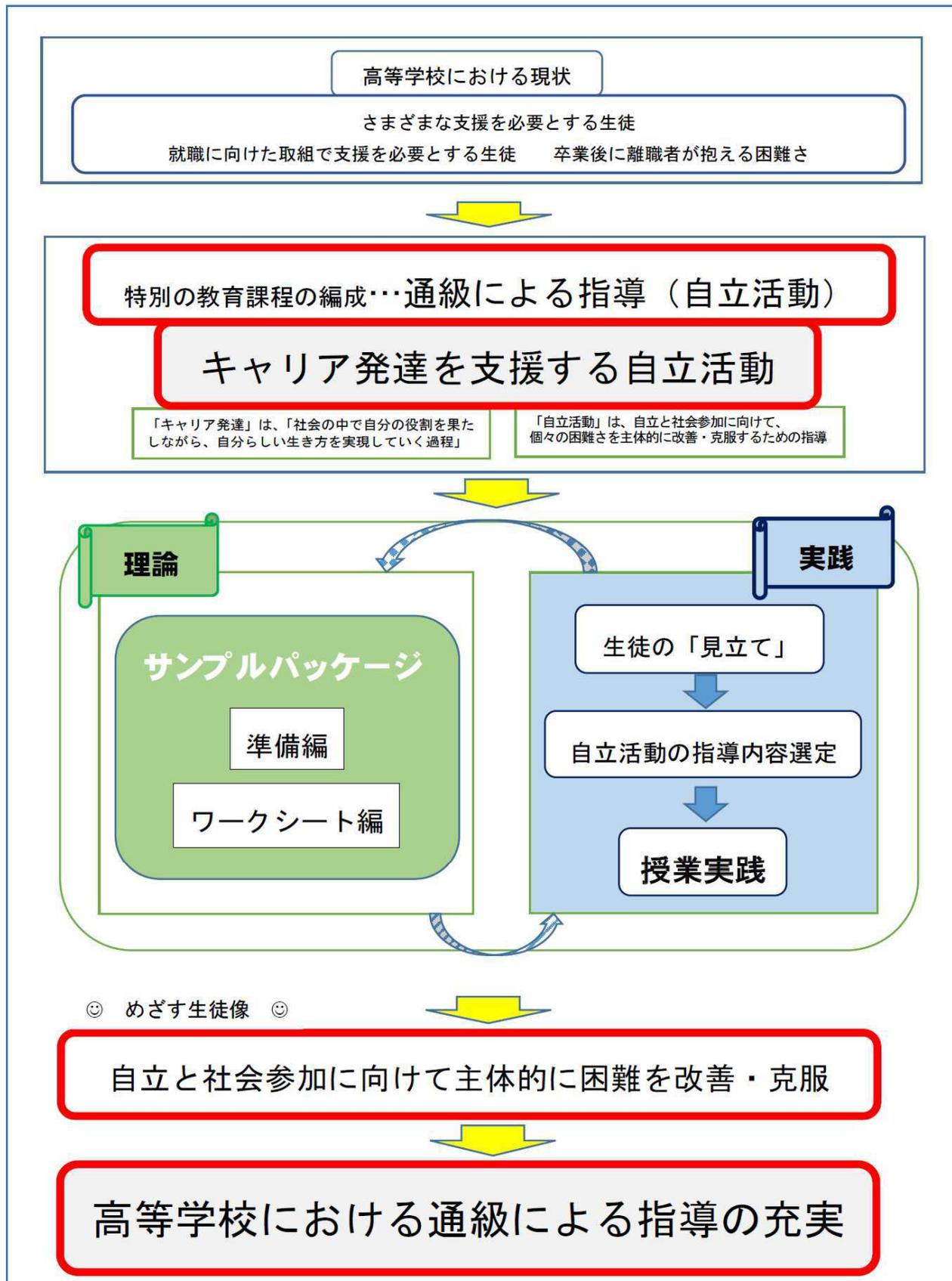
3 検証計画

高等学校における通級による指導の充実について、理論ベースの取組と実践ベースの取組それぞれについて、検証を行う。検証の方法は、次に示すとおりとする【表 21】。

【表 21】 検証計画

ベース 内容	対象	検証 方法	内容	検証の時期/ 回数
理論ベース ・サンプルパッケージ「準備編」 「ワークシート編」	紫波総合高等学校の教員 2人	サンプルパッケージを見て頂いての面接法等	1 「準備編」は、「見立て」に関わって参考となる内容だったか 2 「ワークシート編」は、キャリア発達を支援する自立活動についてイメージできるものであったか	9月～11月頃 2回程度
実践ベース ・指導内容選定 ・キャリア発達を支援する自立活動	実践の対象生徒 3人	質問紙法	1 認知機能強化のトレーニング（コグニティブトレーニング、以下コグトレ）を体験して、自分の得意なことや苦手なことについて、新たな気づきがあったか 2 コグトレは、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを改善することに役立つと思うか 3 自己の課題について考える学習で、新たな気づきがあったか 4 3回の授業で学んだこと・体験したことは、自立と社会参加に向けて役立つと感じたか 等	11月、3回目の授業後／1回
	授業を参観した対象生徒のクラス担任 1人	質問紙法 または 面接法	1 授業の内容は、自立と社会参加に向けての生徒自らが自分の課題に気付き内容となっていたか 2 生徒たちは主体的に自らの課題に向き合っていたか 3 自立と社会参加に向けて、自分の課題に向き合う授業について、どのように感じたか 等	9月、11月の授業後／2回程度

4 高等学校における通級による指導の充実に関する研究構想図



【図 26】 研究構想図

## Ⅶ 授業実践の結果と考察

### 1 授業実践の目的

キャリア発達を支援する自立活動の授業実践を行い、目標並びに内容・手立て等が、対象生徒の様子や変容等から見て、適切なものであるかを検討する。検討した内容や方法について、サンプルパッケージの「準備編」や「ワークシート編」の作成の参考とする。実践並びにサンプルパッケージ作成を通じて、高等学校における通級による指導の充実に役立てる。

### 2 授業実践の概要

生徒3人（生徒 a, b, c）を対象に行う。実践校には、通級による指導の場はないため、他の場面において、仮想的に実施する。

- (1) 対象生徒  
就職活動を前にした3学年の生徒3人（女子）  
（通級による指導対象の生徒ではないため、仮想的に実施）
- (2) 実践日程  
7月、9月、11月の3回、実践を実施。
- (3) 実践に向けての流れ  
実践の流れについて【表22】に示す

生徒の個人情報の保護のため、校名を伏せ、一部の設定を変更している。

【表22】実践の流れ

	実践の流れ	役割	詳細
①	生徒の「見立て」	指導教員	実践校のクラス担任からの聞き取り等を基に、対象生徒の状況を把握するために、プロフィールシートや個別の指導計画を作成する。
②	共通理解	指導教員 クラス担任	指導内容等について打ち合わせる。
③	授業計画立案	指導教員	自立活動における授業計画を立てる。 ※暫定的に作成してあるサンプルパッケージの「準備編」「ワークシート編」の内容を参考に する。
④	授業実践	指導教員	授業計画をもとに、対象生徒の様子を意識しながら指導を行う。
⑤	振り返り	指導教員 クラス担任	授業実践期間中の対象生徒の変容について、各指導場面での振り返りを行う。

- (4) 実践の記録
  - ア 通級による指導の流れを時系列で示し、指導上で気付いた点を記述する。
  - イ 対象生徒の学習の様子や振り返りの記録等をまとめる。

### 3 授業実践の実際

- (1) 生徒 a, b, c について

#### ア 生徒の「見立て」、自立活動の指導内容の選定

実践校のクラス担任からの聞き取り等を基に、「見立て」を行った。諸検査等を用いてのアセスメントは行っていない。また、仮想の場であるので、本人や保護者と事前面談等も行っていないため、今回の実践は、指導教員の「見立て」によるものとする。生徒 a・b・c についての概略は次のとおりである。

- [生徒 a]
- ・穏やかな性格で、礼儀正しく、基本的な生活習慣が身に付いている。
  - ・目前の困難を避け、理想の姿を求める傾向があるが、そうした自分の状況について客観視できていない。
  - ・接客業の就職を希望している。

- [生徒 b]
- ・ほがらかで明るく、人との関わりを楽しむことができる。
  - ・物やスケジュールの管理、家事等の生活スキルが身に付いておらず、そのことに気付いているが、困り感は少なく、そのため改善の意欲もあまり見られない。
  - ・動物に関わる就職を希望している。

- [生徒 c]
- ・物静かであるが、人との関わりを自然体で楽しんでいる。
  - ・家事や生活スキルが高いが、そうした自分の強みに気付いておらず、学業成績が重要と考えており、自立の視点から自分の状況を捉えられていない。
  - ・工場への就職を希望している。

生徒 a・b・c の個別の課題を見た時に、自立に向けての自分の課題やできていることについて、理解が不足し、それらが及ぼす学習上生活上の困難について理解を深めることができていないと感じた。そこで、自立活動では「健康の保持」の(4)障害の特性の理解と生活環境に関することを重点的に行うこととした。またその中に、基礎的・汎用的能力である「自己理解・自己管理能力」の中の自己の肯定的な理解の視点を入れた活動を行うこととした。これらのことを踏まえて、生徒 a・b・c の個別の指導計画を作成した。生徒 c は、特に自立に向けての課題が多く、自己理解を深めることは本人にとって重要であると感じた。生徒 c の個別の指導計画を【図 27】に示す。

個別の指導計画

編2 「通達による指導」指導計画  
キャリア発達を支援する自立活動  
3学年 生徒c

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
実 現 目 標 ・自分の困難さについて、自分の自立の理由から捉えられていない。	・自分に自信がなく、出ていることについて、適切な自己評価をしていない。				・言葉の理解や表現等が少なく、事情等も忘れているため、場に応じた適切なコミュニケーションができない。
1) 自分の出来ていること、出来ていないことについて、具体的に把握する。 2) 自立等の「目指したい姿」の視点から、出来ていないことを見直し、何を身に付ける必要があるかを考える。 ② ..... ③ .....					
健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
課 程 目 標 (4)障害の特性の理解と生活環境の課題に関すること(教員)	(3)自己の理解と行動の課題に関すること				(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること
1) 夏季休業前の振り返りを行い、自分の学校での生活の様子を、表により評価する。 2) 得意な家事に関する状況を、表により評価する。 3) 学びのSTEPシートに記入することを通じて、自立に向けて身に付けたこと等を考える。					
1) 夏季休業前の振り返りを行い、自分の学校での生活の様子を、表により評価する。 2) 得意な家事に関する状況を、表により評価する。 3) 学びのSTEPシートに記入することを通じて、自立に向けて身に付けたこと等を考える。					
目 標 (本人の目指す姿)		手 立 て		評 価	
卒業後は、食品製造の仕事に関心、長く働きたい(家から通りたい)。 知識・常識を身に付けたい		出来ていることや出来ていないことについて振り返り、自分自身の考えを持ってまとめているか。 「学びのSTEPシート」の記入を通じて、「目指したい姿」から何を身に付けないかを考えさせる。 「認知機能強化のトレーニング(コグトレ)」の体験をすることにより、「認知」の動きを促し、「認知」に関する自分の特徴を認識するきっかけを作る。		自分の出来ていること、出来ていないことについて振り返り、自分自身の考えを持ってまとめているか。 「学びのSTEPシート」の記入(担当者による聞き取り、記入しなおし)を通じて、「目指したい姿」から、身に付けた「事情」を考えることができたか。 「認知機能強化のトレーニング」に集中して取り組んだか。	

【図 27】 生徒 c の個別の指導計画

生徒cの自立に向けた課題は、「健康の保持」「心理的な安定」「コミュニケーション」の区分の内容が優先度が高いと選定したが、実践は3回のみであるため、中でも特に本人にとって必要かつ優先順位が高いと思われる、「健康の保持」の「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」について、指導していくこととした。理由として、生徒cは、就職活動や、就労を前にしており、自己の特性を理解をしていくことは、就職活動のみならず、その後の自立や社会参加に向けた一歩になると考えたためである。自己理解に関する区分としては、人間関係の形成の中の(3)自己の理解と行動の調整に関するところがあるが、集団の中での自分の行動の特徴等の理解より以前に、「自ら生活環境に主体的に働きかけ、より過ごしやすい生活環境を整える力を身に付けるために必要」(新特別支援学校学習指導要領解説)な障害の特性の理解と生活環境に関するところを踏まえ、健康の保持における(4)の項目について、選定することとした。

区分	項目
1 健康の保持	(4) 障害(※)の特性の理解と生活環境の調整に関すること

※「障害」についての本研究における捉え

本研究では、「障害」について、困難さを抱えた状況にあると捉える。

困難さとは、学習上、生活上または、自立に向けた困難さであり、それらについて、「総合的な見地から判断」(文部科学省, 2018)することとし、医学的な診断のみを根拠としない。

しかし、自立活動における指導においては、自立活動の項目の選定が必要になるため、特別支援学校学習指導要領解説に示されている自立活動の区分・項目をそのままを引用する。よって「障害」の語句についても、変更せずに使用する。

イ キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力の視点を取り入れた学習活動

自立活動においては、健康の保持の(4)の障害の特性の理解を取り上げることは先に述べた。その中に、基礎的・汎用的能力の中の、「自己理解・自己管理能力」の視点を入れて、指導することとした。視点として入れるのは、基礎的・汎用的能力を構成する27要素からではなく、下記の自己理解・自己管理能力の説明(文部科学省, 2011)の中にある、自己の肯定的理解をもてるような内容を検討することとした。生徒たちが初めての授業・初めての内容であっても戸惑うことなく、「できる」「やれる」という内容を提示していくことにより、自己の肯定的理解につながる取組ができるのではないかと考えた。

自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力。
-------------	---

ウ 自立活動の実践

(7) 自立活動の概要

個別の指導計画をもとに、3回の実践では、生徒 a, b, c ともに、自立活動の「健康の保持」について、行うこととした。指導教員が生徒たちの状況を把握していないため、初回は、「健康の保持」における自己の現況の理解につながるような導入的な内容を、交流を図りながら行うこととした。

生徒たちを側で見られる機会がなく、2カ月おきに行う実践であったので、初回の状況を見て、2回目・3回目については、生徒の状況等を踏まえて、その都度計画した。実践の内容をまとめたものが【表 23】である。

【表 23】自己の特性の理解やコミュニケーションに関する自立活動

自立活動の内容 区分 (項目)	キャリア発達を 促す基礎的・ 汎用的能力	実施 月	実施 回数	題材名	学習活動
1 健康の保持 (障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること)	自己理解・自己 管理能力	7月	初回	夏季休業前の 振り返り	1 夏季休業前の 振り返りをす る 2 認知機能強化の トレーニングを する
		9月	2回目	自分の課題に ついて考えよ う	1 認知機能強化の トレーニングを する 2 自分の課題につ いて考える
		11月	3回目	自分の課題に ついて考えよ う～学びの STEP シートの 記入を通じて ～	1 認知機能強化の トレーニングを する 2 自分の課題につ いて知る～学び の STEP シート の記入を通じて ～

(2) 実践の実際

ア 初回（7月実施）の概要

初回は、生徒たちとの交流を主な目的として行った。自立活動の内容としては、「健康の保持」、基礎的・汎用的能力の中においては、「自己理解」を中心に行うこととした。具体的な内容としては、夏季休業前の振り返りを行い、社会に出るまでに伸ばしたい個々の課題について、対象生徒たちから話を出してもらった。また、その課題を改善する1つの方法として、コグトレがあることを紹介し、体験を行った。2回目以降は、対象生徒らが感じる課題に基づいたコグトレを準備してくることを予告した。

(7) 自立活動指導案

キャリア発達を支援する自立活動指導案（初回）

1 題材名 「夏季休業前の振り返り」

2 題材について

(1) 生徒について（3人に共通）

高等学校生活において、学習や生活の場面で困難さを抱えているが、本人自身に気づきが少ない。また、自分の出来ていることについての評価が十分にできておらず自信を持ちづらい状況にある。  
(健康の保持：特性の理解)

就職や進学等で社会に出る間近の生徒がおり、徐々に気持ちの準備が出来てきている。しかしながら、社会と関わり、生きていくことについて、準備が不足している。(自己理解・自己管理能力)

(2) 題材について

自立活動における、健康の保持の「障害の特性の理解と生活環境に関すること」について、自己の状況を理解するという活動を通じて改善・克服のきっかけをつくる。また、キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力の中の「自己理解・自己管理能力」の視点を取り入れる。実施日が、夏季休業の前日であることから、夏季休業前の振り返りを通じて、学校生活や日常生活における自己理解を進める学習である。また初回であることを鑑みて、題材を通じて、指導教員との顔合わせや会話を通じた交流を図れるよう、活動はやや少なめに設定する。

自立活動の区分と項目

1 健康の保持	(4) 障害の特性の理解と生活環境に関すること (新学習指導要領にて新設)
---------	--

キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力

自己理解・ 自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ今後の成長のために学ぼうとする力
-----------------	--

(3) 手立てについて

- ・ ワークシート【図 28】を用いて、前期の振り返りや評価を行い、自己の状況の理解が進むようにする。
- ・ 夏季休業前の振り返りの後に、その振り返りとの意味付けを行いながら、認知機能の強化トレーニング（コグトレ）【図 29】を1～2つ程度体験的に実施する。トレーニングによって認知機能が高まると生活や社会の中で役立つことを説明し、トレーニングの意義についての理解を進める。
- ・ 授業ではコグトレという語句を用いずに、「認知機能の強化トレーニング」と説明する。
- ・ 振り返りシート【図 30】を用いた本時の授業の振り返りを行う。
- ・ 全体で行う指導の他に、生徒個々の取組の様子を見ながら、必要な声掛けや手立てを行う。

3 本時の構想

(1) 本時の目標

翌日から夏季休業に入ることを踏まえ、夏季休業前（4～7月）の生活の振り返りをする事により、自己理解を進める。

コグトレを体験し、トレーニングを通じて認知機能を強めることが、生活や社会で役立つことを知る。

## (2)展開

段階	学習活動	指導上の留意点	◆評価 ◇教材
導入 (10分)	1 あいさつ 2 オリエンテーション	・ 各自の近況を聞き、リラックスした雰囲気をつくる。	
展開 (25分)	3 学習活動の確認  ワークシートに記入する (5分)		◇ワークシート
	4 自立活動  夏季休業前の振り返りをする  夏季休業前の取組でがんばったことをABCで自己評価する。自分にかかる言葉等は自由に記述する。 (10分)	・ 記述する箇所で書きづらい様子が見られた場合には、記入のきっかけとなるような声掛け、アドバイスを行う。 ・ 自分の頑張りを踏まえて、これから就職に向けて伸ばしたい課題を尋ねる。 ・ その課題を伸ばす一つの方法として、コグトレがあることを紹介する。	◆1つ1つの項目を考えながら評価することができたか。 ◆自分の取組を振り返り、記述できたか。
	コグトレをする  (1) コグトレを選ぶ (6種類から) (2) コグトレをやってみる (15分)	・ コグトレを選ぶ際のヒントとなるように、指導教員の視点で簡単・難しい等の情報を参考として伝える。 ・ 体験終了後、トレーニングが生活や社会に役立つことを説明する。	◇コグトレのプリント(類似したものを6種類) ◆集中して取り組んだか。
まとめ (15分)	5 感想, 振り返り 6 あいさつ		◇振り返りシート ◆1 今日の授業の内容の振り返り, 2 授業へ向かう姿勢の振り返りができたか。

(イ) ワークシート等

年 月 日 ( )      年 級 氏 名

学習課題  
1

2

1 夏季休業前までのふりかえり

(1) 夏季休業前までの「自分のがんばり」に、○をつけてみよう。

1 欠席しない	A B C	6 提出物	A B C
2 遅刻しない	A B C	7 忘れ物しない	A B C
3 早退しない	A B C	8 掃除	A B C
4 ベル差	A B C	9 係・委員会活動	A B C
5 授業集中	A B C	10 家庭学習	A B C

Aの数の合計      Bの数の合計      Cの数の合計

(2) 夏季休業前まで、よくがんばったと思うことを具体的に書いてみよう。(学校、家庭、アルバイト等)

(3) 夏季休業前まで、がんばった自分に対する言葉を書いてみよう。(褒め言葉)

2 認知機能のトレーニング

トレーニングをやってみて、感想に○をつけよう。(複数回答可)

楽しかった      集中できた      簡単だった      覚えた      難しかった  
その他 ( )

認知機能とは・・・覚える、数える、写す、見つける、想像する

認知機能トレーニングを繰り返す行することで、この機能が高まる

高まると・・・生活や社会で役立つ

たとえば 指示を覚えて、仕事をすると、商品を数えながら作業する  
手帳を書き写す、不良品を見つけて、なぜ失敗したかを想像して改善する  
※職種に依るから認知機能トレーニングは、仕事をしながら・・・!

ねがらい言葉リスト

お疲れさま  
大変だったね  
よくやったね  
頑張ったね  
苦労がうかがえる  
あなたでないとできなかった  
ゆっくり休んでね  
頭がさがる  
いつの間に準備したの



ほめ言葉リスト

すばらしい  
立派  
さすが  
カッコいい  
いい感じ  
よくできた  
センスあるね  
今までで一番いい  
完璧だね  
丁寧だね  
お見事  
気が利くね  
やったね  
すごい



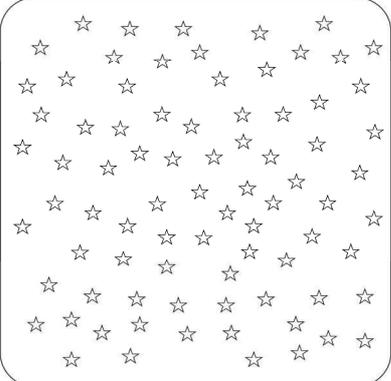
【図 28】初回 ワークシート

まとめ -1      年 月 日

これまでの最高      目標      今回

分 秒      分 秒      分 秒

☆を5個ずつ ○ でかこみながら、○と☆の数を数えましょう。



○ は ( ) 個      ☆ は ( ) 個

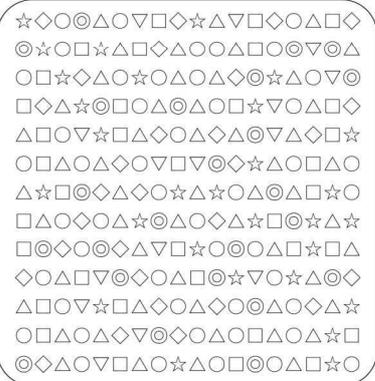
Neuro-Cognitive Enhancement Training

記号さがし ① -1      年 月 日

これまでの最高      目標      今回

分 秒      分 秒      分 秒

△の数を数えながら、できるだけ早く△に ✓ をつけましょう。



△ は ( ) 個

【図 29】初回 生徒が選んだコグトレ

(宮口幸治, 『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化のトレーニング』  
CD, 三輪書店)

### ふりかえりシート

年 月 日 ( )      年 組 氏名

1 今日の授業のふりかえり  
(1) 「前期前半のふりかえり」に関する学習について、○をつけよう。(複数回答可)

- ・がんばっている自分に気づいた
- ・がんばりがもう少しのものに気づいた
- ・前期後半にがんばろうと思う気持ちが湧いた
- ・その他 ( )

(2) 「認知機能のトレーニング」に関する学習について、○をつけよう。(複数回答可)

- ・認知機能について分かった
- ・認知機能がトレーニングで高まることが分かった
- ・トレーニングを通じて認知機能を高めると、生活や社会で役立つことが分かった
- ・その他 ( )

2 授業に向かう姿勢のふりかえり

Keep (続けたいこと)

➡

Try (挑戦したいこと)

Plan (改善したいこと)

➡

Try (挑戦したいこと)

---

記載例

K (続けたいこと)  
べんがゆな前に必要なものを準備して、着席する

➡

T (挑戦したいこと)  
授業で興味を持ったことについて、授業中に話して聞く

P (改善したいこと)  
発表の時に、顔を上げる(うつむいてしまったので)

➡

Try (挑戦したいこと)  
授業で興味を持ったことについて、授業中に話して聞く

### 授業への取組 K・P・T 記載例

自己理解	授業を休まないよう体調を管理する 授業に必要なファイルなどを持参する 授業で出された宿題はきちんとやる ベルが鳴る前に着席している 授業中に私語をつつしむ
課題対応	ワークシートを提出する前に見直す 授業に黒板に書かれていない内容もメモをとる 授業で分からなかったことは自分で調べる 授業で分からなかったことは先生に聞く 授業で分からなかったことについて友だちと話す 配付された資料やプリント等を整理する
社会関係形成	先生の話や友だちの発表等の際には、そちらに体(顔)を向ける 発表等の際に、誰の意見等をよく聞く 発表等の際に、自分の意見等をはっきりと話す 発表等の際に、自分の意見等を適切な音量で話す
プランニング	授業中に積極的に発言をする 授業の予習をする 授業の復習をする 授業で興味を持ったことについて自主的に勉強する 自分の意思で継続的に勉強する

【図 30】初回 振り返りシート

(ウ) 初回における生徒の様子

始めに、夏季休業前までの学習や活動について、【図 28】の項目毎に自己評価をさせた。選択して○を付けるという内容であったためか、評価について、3 人ともにすぐに記入を終えた。生徒 a や生徒 b は、評価 A の数の合計が 4 個あったが、生徒 c は、評価 A の数が 0 個であり、それを知った生徒 a や生徒 b からは、驚きの声が上がっていた。生徒 c の普段の様子や頑張りから考えて、自己評価が低いのではという驚きの声であった。

その後の、自分にかける褒め言葉や労いの言葉については、褒めや労い言葉のリストを参考にしながら、自分なり言葉や表現で記入していた。生徒 c は、自分にかける言葉の文を書くことに苦戦していたが、考えながら真剣に取り組んでいる様子が見て取れた。生徒 a は、自分への叱咤激励の文を長めに書いていた。

その後、夏休みの過ごし方等に触れ、夏休み後には就職活動が本格的に始まるとの話題を出し、社会に出るまでにどのような力をつけたいかを聞いたところ、生徒それぞれから、次のような課題が話された。

- 生徒 a : 「我慢ができるようになりたい」
- 生徒 b : 「書きミスをしないうになりたい」
- 生徒 c : 「知識や常識を身に付けたい」

特に生徒 a と b については、具体的に自己の状況を話し、それとともに自己の課題を話すことができおり、自立活動にふさわしい学びの姿勢をすでに備えていると感じた。

コグトレは、まとめる・数える等の認知に関する類似した種類のものから好きなプリントを選ばせ【図 29】、実施した。まとめる・数える等のものを選んだ理由は、簡単な計算等を含むことから、数学等の学習の延長として取り組むことができるのではないかと考えたためである。自ら選んだという点で、主体的なスタートとなったのか、約 1 分半程度の実施時間中、集中して真剣に取り組む様子が見られた。

(エ) 成果と課題

成果として、生徒たちが、自分の課題について話したことが挙げられる。時間中、生徒と教員の関係性を少しずつ作っていくことが、自己開示を必要とする自立活動には欠かせないと捉え、雑談や他愛もない話を含めてさまざまな話をしながら進めていった。そうした中

で、生徒たちが、自分の課題について、自分の言葉で表出したことは大きな成果であった。

課題として、夏季休業前の振り返りの際に、一人一人の自己理解が進むような適切な声掛けを、一人一人の記入した内容や発言した内容に対してできなかったという点である。自己理解を進める上で、個に応じた適切な指導という点では、十分ではなかった。同じ場で複数の生徒が学ぶ場合であっても、時間を有効に活用しながら、個に応じた指導・支援について、どのように行っていくのがよいのか、2回目への課題とした。

#### イ 2回目（9月実施）の概要

2回目は、自立活動の特性を生かした授業を行うことにした。はじめに、初回にも行った認知機能の説明を行い、その後、コグトレ中から、図形に関するものを体験として行った。次に、初回で生徒たちから出してもらった「自立に向けての課題」について、個別のプリント学習で詳しく把握したり、深めたりしていく取組を行った。次頁に、本時の自立活動指導案を示す。

キャリア発達を支援する自立活動指導案（2回目）

1 題材名 「自分の課題について考えよう」

2 題材について

(1) 生徒について

高等学校生活において、学習や生活の場面で困難さを抱えており、自己の困難さ（課題）について一定の認識を持っている。しかしながら、そうした困難さ（課題）について、具体的に把握し、「気付き」を得ているとは言いがたい（健康の保持）。

就職や進学等で社会に出る間近の生徒がいるが、社会と関わり、自己の困難さを克服しながら、生きていくことについて、考えが不足している。（自己理解・自己管理能力）

(2) 題材について

自立活動における、健康の保持の「障害の特性の理解と生活環境に関すること」について、自己の困難さ（課題）に「気付く」という活動を通じて改善・克服のきっかけをつくる。また、キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力の中の「自己理解・自己管理能力」の視点を取り入れる。

自立活動の区分と項目

1 健康の保持	（4）障害の特性の理解と生活環境に関すること (新学習指導要領にて新設)
---------	---

キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力

自己理解・ 自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ今後の成長のために学ぼうとする力
-----------------	--

(3) 手立てについて

- ・導入で、7月実施に引き続き、コグトレによって認知機能が高まると、仕事をする際や、生活の中で役立つことを説明し、やってみたいコグトレを選んで、体験する【図31】。
- ・7月に本人たちが話した自己の課題について、その内容を具体的に把握し、「気付き」や「把握」のきっかけを作る【図32, 33, 34】。
- ・授業ではコグトレという語句を用いずに、「認知機能強化のトレーニング」と説明する。
- ・振り返りシートを用いた本時の授業の振り返りを行う。
- ・個別の指導が主となるので、生徒個々の取組の様子を見ながら、必要な声掛けや手立てを行う。

### 3 本時の構想

#### (1) 本時の目標

生徒 a, b・・・自己の困難さ（課題）について，具体的に「気付き」「把握」する。

生徒 c・・・自分の出来ていることに「気付き」，特に，自己の肯定的理解を進めつつ，自己の困難さ（課題）の「把握」につながるきっかけを得る。

共通・・・・・・・・コグトレを通して，「認知」という働きについて体感する。

#### (2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点	◆評価 ◇教材
導入 (5分)	1 あいさつ		
展開 (20分)	2 自立活動 コグトレをする (1) コグトレを選ぶ (2) コグトレをやってみる (5分)	・ トレーニングが生活や社会に役立つことを説明する。	◇コグトレのプリント（図形に関するものを6種類） ◆コグトレに集中して取り組んだか。
	自分の「課題」について考える  自分の「課題」について，考えながらワークシートに書く (15分)	・ 一人一人のワークシートの内容が異なるので，机間巡視をしながら，必要に応じて説明等を加える。	◇個別のワークシート ◆ワークシートの内容について，しっかり考え，取り組んだ（記述した）か。
まとめ (5分)	3 感想，振り返り 4 次回予告 5 あいさつ		◇振り返りシート ◆今日の授業の振り返りができたか。

※2回目（9月実施）は，諸事情により30分間での実施となった。

(イ) ワークシート等

**重なり図形 -1** 年 月 日

左の図に使われていない形を、右からひとつ選び○で囲みましょう。

**穴の位置 ① -1** 年 月 日

折り紙を下のように折り、A、B、Cのように穴を開け、折り紙を開くとどうなるでしょうか？1～9から選び、( )に番号を書きましょう。

【図 31】 2 回目 コグトレ

(宮口幸治, 『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化のトレーニング』C D, 三輪書店)

○社会に出る前に伸ばしたい自分の課題について、書いてみよう。(複数可、1つでもOK)

○それを課題だと思う理由について、書いてみよう。

今日のテーマ 7月にA君が話していた「我慢できない」について、今日はちょっと考えてみよう。  
「我慢できない」時に気をつけることについて、考えてみる。

2 1の課題にかかわって、やめたい、なおしたい行動(B)と、直前のできごと(A)、結果(C)を考えよう。この間は、「空欄が我慢できなくて・〇〇」という話をしたいけど。

A 直前のできごと	B 行動	C 結果
<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	得る 逃避
例 難しい宿題が出された	提出日に欠席	得る 宿題やる大変さから 逃避

3 やめたい、なおしたい行動(B)をしないようにするためには、直前のできごと(A)をどう変えようか、考えてみよう。

A 直前のできごと	B 行動	C 結果
<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	得る 逃避
<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>
<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px;"></div>

Aを変えてみよう  
BとCも変わるよ！

例

宿題の難しいところは先生に前もって質問	宿題を終えて登校	先生から賞状を得る 逃避
---------------------	----------	-----------------

4 3のAの中で、特に実行できそうなものを2つ選んで、特の左側に、1、2と書いてみよう。

【図 32】 2 回目 生徒 a のプリント

○社会に出る前に伸ばしたい自分の課題について、書いてみよう。(複数可、1つでもOK)

○それを課題だと思ふ理由について、書いてみよう。

今日のテーマ 7月にB君が話していた「書きミス」について、改めて考えてみよう。  
「書く」ことについて、考えてみる。

1 例えば、B君が話していた「書きミス」について、詳しく自分で、「理解する」ことが大切。「書きミス」が嫌になりやすい時は??○をつけてみよう。

・疲れている時  
・ぼんやりしている時  
・別のことを考えている時  
・やる気が起きない時  
・寝不足の時  
・緊張している時  
・その他 ( )

・黒板に書かれた内容をノート等に書き写す時  
・教科書に書かれた内容をノート等に書き写す時  
・先生が話した内容をノートにメモする時  
・自分が考えたことをノートにメモする時  
・見慣れない文章などを書き写す時  
・自分の名前や住所を書く時  
・その他 ( )

・朝 ・昼 ・夜 ・寝起き ・寝る前 ・授業中 ・休み時間  
・その他 ( )

時間 ( )

他にもあれば、書こう！(自由記述)

2 1で「書きミス」しやすい状況は、整理できたかな? でも、もしできるなら「書きミス」を減らせることができたいよね? 改善方法として、自分に向いている～とてもよいものは○、まあよいには△、向いていないものには×をつけよう。

真に出して(の中で) 読んでから、書く		
文のまとまりを意識して書く		
少し書いて見直すを繰り返す		
大事なものについては、鉛筆で下書きをしてから書く		
教科書の写したい箇所を引く、定規を書くなどして、注目しやすくしてから書く		
その他 ( )		
その他 ( )		

3 2の○をつけた項目を整理しながら、\_\_\_\_\_を書いてみよう。



4 どう??この方法で解決しようかな?? (○をつけてみよう)  
解決しそう ちゃんと解決しそう たぶん解決しない 解決できない わからない

そう思った理由は、

【図 33】 2回目 生徒bのプリント

○社会に出る前に伸ばしたい自分の課題について、書いてみよう。(複数可、1つでもOK)

○それを課題だと思ふ理由について、書いてみよう。

今日のテーマ1 7月にC君が話していた「常識・知識」について、今日はちょっと考えてみよう。  
「常識・知識」について、考えてみる。

常識とは・・・一般の社会人が共通にもつ、またもつべき普通の知識・意見や判断力  
知識とは・・・知ること、認識・理解すること goo 辞書より  
常識の中に知識は入っている?!

今日のテーマ2  
「家事」の常識について、考えてみる。

常識は幅広い・・・まずは、身近な生活にかかわることから。  
家事の「常識」について、考えてみよう。  
「好きなこと」「苦手なこと」「得意なこと」「不得意なこと」などを考えてみよう!  
(○をつけてみよう! 同じ行で複数に○可)



内容	好き	苦手	得意	不得意	やってみたい
1 食材などの買い物をする					
2 米を研いで炊飯器で炊く					
3 料理 1人分 冷蔵庫にあるもので					
4 料理 4～5人分 冷蔵庫にあるもので					
5 料理 レシピを見ながら					
6 皿洗いなどの後片付け					
7 洗濯物を干す					
8 洗濯物をたたむ、片付ける					
9 アイロンがけ					
掃除 掃除機をかける					
11 掃除 拭き掃除					
12 掃除 台所					
13 掃除 お風呂					
14 掃除 トイレ					
15 掃除 玄関、廊下など					
16 ゴミを分別する (リサイクルゴミは分ける)					
17 燃えるゴミを、収集日に出す					
18 燃えないゴミを、収集日に出す					
19 粗大ゴミを、指定日等を確認して出す					
20 ペットの世話(えさやり等)					
21 観葉植物の世話(水やり等)					
22 蛍光灯の交換					
23					
24					
25					

2 1の「やってみたいこと」の中で、やってみたい度の高いものから、書いてみよう。

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

【図 34】 2回目 生徒cのプリント

(ウ) 2回目における生徒の様子

はじめに行ったコグトレは、数種類の中から好きなプリントを選んで行った【図 31】。初回とは違うコグトレのプリント(重なり図形、穴の位置等の図形のプリント)を用意することで、新たな気付きを得て欲しいと考えた。また、図形のコグトレを選んだもう一つの理由は、生徒cが描画や造形等が得意と聞いていたので、生徒cが「できる」という感覚を味わい、自己肯定感を高めるきっかけとしたいとの思いがあったためである。体験後には、自ら選んだものの、取り組んでみたら「難しかった」という感想を述べた生徒もいたが、3人全員がそれぞれの課題に集中して取り組んでいた。終了後、「こういうプリントを

やることで、自分の認知の得意や不得意が分かりそうだよね。」という話をしたところ、生徒 a と b は頷いていた。また、後で記入した振り返りシートでは 3 人ともが、「人には認知という働きがあることが分かった」に○をつけていた。

次に行った「自分の課題について知ろう」では、初回において生徒それぞれが話した課題について作成した個別のプリント学習を行った。

生徒 a は、「我慢ができるようになりたい」と話していたので、どのような時に我慢したいのか、直したい行動は何か、直前の行動をどう変えればよいか、直前の行動を変えると、結果はどうか等、認知行動療法の視点を取り入れた内容【図 32】で行った。直前の行動を変えてみると自分の得たい結果が得られるという流れを書くことができたので、それについて実際に試してくることを次回 11 月までの宿題とした。生徒 a は、感想に、「自分の今の気持ちを見直して、行動に移せば結果が出るということを知れてよかった」と書いていた。

生徒 b は、「書きミスをなくしたい」と話していたので、どのような時に書きミスをしないか、改善方法の中で取り組めそうなものは何か等を考える内容【図 33】とした。改善方法について、自分に向いていると思う方法を 1 位から 5 位までについても書くことができたので、その中のいくつかについて、取り組んでみることを次回 11 月までの宿題とした。感想には、「具体的に自分の課題を知ることができた。その課題を改善していけるようになりたい。」と書いていた。

生徒 c は、「知識・常識を身に付けたい」と話していたので、身近な常識の中で家事について考える内容【図 34】とした。生徒 c は、初回の夏季休業前の振り返りの様子から、自己肯定感の低さが見られると感じたので、c の得意である家事についての内容を選んだ。選択肢として用意した家事については、ほとんどが好き・やったことがあるというものであった。蛍光灯の交換とアイロンがけの 2 つについては、やってみたいことであり、未体験でもあるようであったので、それらを試してみることを、次回 11 月までの宿題とした。感想には、「もっといろいろなことにちょうせんしたい (本文のまま)」と書いていた。

#### (エ) 成果と課題

成果の一つ目として、コグトレについてがある。生徒らの口頭での感想では、「簡単そうに見えたけど取り組んでみたら難しかった」「自分の予想が外れた、当たった」等と話す生徒がいたことである。自分の「認知」の得意や不得意について過去の経験からくる予想が外れた、当たったということは、自分の「認知」に気付くきっかけとして重要な感覚である。こうした様子が見られたことは、自己理解を進めてほしいという授業の目標に沿うものであった。

成果の二つ目は、個別学習として「自分の課題について考えてみよう」をテーマにプリント学習を行ったことで、自己の課題について考える機会を作れたことである。初回において自分が表出した「課題」について、考え、記入したり、指導教員の問い掛けに応じる時間を作れたことで、それぞれが自分が表出した課題について、自己理解の一端を進めることができた。

2 回目の実践の課題として、本人たちが捉える「自立に向けての課題」と、指導教員が考える本人たちの「自立に向けての課題」が異なる場合、それぞれをどのように近付けていけばよいかということがあった。

例えば生徒 c は、7 月の実践の際に、卒業までに「常識・知識を身に付けたい」と話しており、指導教員は、2 回目の授業実践に向けて「常識・知識」とは何だろうと考えあぐね、結果、生徒 c の自己肯定感を上げたいという思いから、生徒 c の得意な分野である家事は、立派な常識や知識の一つであり、その得意な家事の中で、常識や知識を増やしてい

くことの大切さを分かって欲しいとの思いで、家事に関する個別のプリントを作成した。しかし、生徒cの考える常識・知識は、いわば学校で行う教科的な学びであり、生徒cの表情・態度・受け答え等からは、ニーズが異なることが分かった。指導教員がクラス担任と行った授業後の振り返りの際に、いぶかしがりながら、家事が知識・常識であることを捉えようとしていた生徒cの様子についての話題が出たが、双方の見解は共通していた。

主体性を要とする自立活動において、生徒の思いを大事にしたい、しかし、自立を目指しての課題については、しっかりと見つめさせたい、と考える指導教員の思いがぶつかることとなった。生徒の課題について、どのように理解を進めていくことがよいか、課題が残った。

#### ウ 3回目（11月実施）の概要

3回目は、認知機能強化のトレーニング中から、「聞く」「覚える（ワーキングメモリ）」に関するものを体験として行った。展開では、「自立に向けての課題」について、学びの地図STEPシートの記入を通じて、目指したい姿から、今の自分の課題や身に付けたいことを再考する学習を行った。次頁に、本時の自立活動指導案を示す。

(7) 自立活動指導案

キャリア発達を支援する自立活動指導案（3回目）

1 題材名 「自分の課題について考えよう～学びの地図 STEP シートの記入を通じて～」

2 題材について

(1) 生徒について

高等学校生活において、学習や生活の場面で困難さを抱えおり、自己の困難さ（課題）について一定の認識を持っている。しかしながら、そうした困難さ（課題）について、自立と社会参加を見据えて、具体的に把握し、改善・克服に向けての「気づき」を得ているとは言いがたい（健康の保持）。

就職や進学等で社会に出る間際の生徒がいるが、社会と関わり、自己の困難さを克服しながら、生きていくことについて、考えが不足している。（自己理解・自己管理能力）

(2) 題材について

自立活動における、健康の保持の「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」について、学びの地図 STEP シートの記入を通じて、自立と社会参加を見据えて、自己の困難さ（課題）に「気づく」という活動を通じて、困難さ（課題）の改善・克服のきっかけをつくる。また、キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力の中の「自己理解・自己管理能力」の視点を取り入れる。

自立活動の区分と項目

1 健康の保持	(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること (新学習指導要領にて新設)
---------	---

キャリア発達を促す基礎的・汎用的能力

自己理解・ 自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ今後の成長のために学ぼうとする力
-----------------	--

(3) 手立てについて

- ・ 導入で、7月・9月に実施に引き続き、コグニティブトレーニング（コグトレ）を行う。認知機能が高まると、仕事をする際や、生活の中で役立つことを改めて説明する。今回は「聞く」と「覚える（ワーキングメモリ）」に関するコグトレに、挑戦する【図 35】。
- ・ 7月に本人たちが話した自己の課題について、9月は、その内容を具体的に把握し、「気づき」を得る学習を行った。その際に出した宿題の状況を確認する【図 36, 37, 38】。
- ・ 今回の授業では、学びの地図 STEP シートの記入を通じて、自分の課題について、目指したい姿から、再考する【図 39】。
- ・ 授業ではコグトレという語句を用いずに、「認知機能強化のトレーニング」と説明する。
- ・ 振り返りシートを用いた本時の授業の振り返りを行う。
- ・ 個別の指導が主となるので、生徒個々の取組の様子を見ながら、必要な声掛けや手立てを行う。

### 3 本時の構想

#### (1) 本時の目標

生徒 a, b・・・自己の困難さ（課題）について，宿題の内容を踏まえて再考する。

学びの地図 STEP シートを記入し，目指す姿から，課題や身に付けたいことを再考する。

生徒 c・・・・・・自己の困難さ（課題）について，宿題の内容への取組を確認する。

学びの地図 STEP シートを記入し，目指す姿から，課題や身に付けたいことを再考するきっかけとする。

共通・・・・・・コグトレを通して，「認知」の働きについて体感し，自己の得意・不得意な認知について，気づきを得る。

#### (2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点	◆評価 ◇教材
導入 (5分)	1 あいさつ		
展開 (30分)	2 自立活動 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 5px 0;"> <b>コグトレをする</b> </div> (1) コグトレ1を体験する (2) コグトレ2を体験する。 (3) 感想を書く (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ トレーニングが生活や社会に役立つことを説明する。</li> </ul>	◇コグトレのプリント ◆コグトレに集中して取り組んだか。 ◆コグトレの内容について考え，書けたか。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 5px 0;"> <b>自分の「課題」について考える ～学びの地図 STEP シート～</b> </div> (1) 前回のプリント内容の確認 (2) 宿題の内容の確認，記入 (3) 学びの地図 STEP シートの記入 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">             学びの地図 STEP シートの記入により，自分の目指したい姿をとらえた上で，課題について再考することを伝える。           </div> (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 机間巡視しながら，一緒に考えたり，必要に応じて聞き取った内容を書き込む。</li> </ul>	◇個別のワークシート ◆ワークシートの内容について，しっかり考え，取り組んだ（記述した）か。 ◇学びの地図 STEP シート ◆学びの地図 STEP シートの内容についてしっかり考えたか。
まとめ (10分)	3 感想，振り返りシート，アンケート 4 次回予告 5 あいさつ		◇振り返りシート ◆今日の授業の振り返りができたか。 ◆3時間の授業の振り返りができたか。

(イ) ワークシート等

**最初とボン ① -1**      年 月 日

- 1 去年の冬に森の中でサルに出会いました。  
赤いサルは手に魔法の杖を持っていました。
- 2 サルの杖の先から光が出ました。  
ピカッと光ったのを友だちのイヌがみました
- 3 霧ではなく、あのサルの杖の光です。  
優しいあの金色の光です。
- 4 これから冬のはじめに金色の光を出すサルの話をします。  
昔、ある森の中で起きた話です。
- 5 木曜日の朝、ネコのミーちゃんが目を覚ました。  
大きなお日様が向こうから顔を出しています。
- 6 冬の間、寒かったのでサルはずっと寝ていました。  
暖かいお日様が出たので気持ちよかったです。  
「大変だ、大変だ」とサルが言いました。
- 7 2時間寝過ごしてしまいました。  
今日は、ずっと待っていたクリスマスの日でした。  
やっと今日からネコの仕事が始まります。
- 8 イヌの家に代々伝わる魔法の杖がありました。  
大急ぎでキツネは杖を取ろうとしました。  
杖を取ろうとウサギが手を伸ばします。
- 9 「あら杖がありません」とイヌが言いました。  
杖にかけておいたのにはないのです。  
たしかにイヌが昨日寝る前にはありました。
- 10 もしかしてイタズラなサルの仕業かもしれません。  
手をばしてネコは杖を探しました。  
いっぱい探しましたがありません。

Neuro-Cognitive Enhancement Training

**最後とボン ① -1**      年 月 日

- 1 家 イヌ リンゴ  
赤 太陽 サル
- 2 キツネ 月 車  
山 ミカン イルカ
- 3 肉 ブドウ カラス  
ウシ バナナ 黒
- 4 時計 タヌキ イチゴ  
トラック 学校 クジラ
- 5 赤 鉛筆 サル  
日本 バンダ 砂
- 6 イチジク ウマ 家  
サイ 川 カバ  
ミカン ネコ 火事
- 7 ネコ ヘンギン タヌキ  
川 キリン 海  
ゾウ バンダ 空
- 8 鉛筆 コアラ テレビ  
シマウマ ハサミ 時計  
机 赤 リス
- 9 マンゴー ライオン 緑  
トラ 白 黄色  
アメリカ スカク 地球
- 10 ブドウ ネズミ メロン  
ブタ サル 船  
月 コウモリ 小学校

Neuro-Cognitive Enhancement Training

【図 35】 3 回目 コグトレ

(宮口幸治, 『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化のトレーニング』  
C D, 三輪書店)

2018/11/2 A君

**1 認知機能強化のトレーニング**  
今日の認知機能強化のトレーニングを体験して、感じたことや、気付いたこと等を書いてみよう。  
(今日の認知機能強化のトレーニングは「聞く」や「覚える(ワーキングメモリ)」に関わるトレーニングでした！)

**2 宿題の確認**  
(1) 前回 9/12 のプリントの内容を思い出そう！

(2) 宿題 (A: 直前の行動) を見直すことで結果が変わる) をやってみての感想を書いてみよう。

下の内容は、A君が前回(9月)に書いていた内容です。

A 直前のできごと  
下の1・2・3

➡

B 行動  
授業に出る  
がまんする

➡

C 結果  
後悔しない  
満足感を得る  
逃避

A: 直前の出来事の見直し	やってみての感想
1 冷静になって後々のことを考える	
2 休み時間に朝食をとる	
3 ひとすらがまん	

(3) (2) について、逆ルートで考えてみよう。  
わかりやすくするためにB: 行動は「授業に出ない」にして、直したい行動を書いてみよう。

A

➡

授業に出ない

➡

得る  
逃避

直したい  
行動

今回は、C: 結果を変えてみると、B: 行動の「授業に出る」になることを確認してみよう。  
A: 直前のできごとが変わるかを、考えて書いてみよう。

A

➡

授業に出る

➡

得られない  
逃避できない

逆ルート  
C→B→A

私たちの日常生活では、原因があるから、結果があると考えることが多い(A→B→C)。でも、結果から、自分の行動を振り返る(C→B→A)ということでも、よりよい行動につなげることができるという方法もある。

【図 36】 3 回目 生徒 a のプリント

2018/11/2 B君のプリント

**1 認知機能強化のトレーニング**  
今日の認知機能強化のトレーニングを体験して、感じたことや気付いたこと等を書いてみよう。  
(今日の認知機能強化のトレーニングは「聞く」や「覚える(ワーキングメモリ)」に関わるトレーニングでした！)

**2 宿題の確認**  
(1) 前回9/12のプリントの内容を思い出そう！

<ul style="list-style-type: none"> <li>・来ている時</li> <li>・座みゆしている時</li> <li>・別のことを考えている時</li> <li>・やる気が起きない時</li> <li>・寝不足の時</li> <li>・緊張している時</li> <li>・その他( )</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒板に書かれた内容をノート等に書き写す時</li> <li>・教科書に書かれた内容をノート等に書き写す時</li> <li>・先生が話した内容をノートにメモする時</li> <li>・自分が考えたことをノートにメモする時</li> <li>・見慣れない文章などを書き写す時</li> <li>・自分の名前や住所を書く時</li> <li>・その他( )</li> </ul>
--	---

2 1で「書きミス」しやすい状況は、整理できたかな？  
でも、もしできるなら「書きミス」を減らせることができたらいいよね？  
改善方法として、自分に向いている・とてもよいものには○、まあよいには△、向いていないものには×をつけよう。

声に出して(心の中で)読んでは、書く	
文のまとまりを整理して書く	
少し書いたら見直すを繰り返す	
大事なものについては、鉛筆で下書きしてから書く	
教科書の写したい箇所を線を描く、定規を書くなどして、注目しやすくしてから書く	
その他( )	
その他( )	

(2) 宿題(「書きミス」の改善方法を試す)について、やってみての感想を書いてみよう。

改善方法	感想
1 大事なものは、鉛筆で下書きをしてから書く	
2 少し書いたら見直す	
3 声に出して(心の中で)読んでは、書く	
4 文のまとまり(文節)を意識して書く	
5 教科書の写したい箇所に線を描く	

(3) 「書きミス」の改善方法を、下の表の4つの場所に、(2)の数字で書いてみよう。

○「書きミス」の改善について、今、自分が考えていることを書いてみよう。

【図 37】 3 回目 生徒 b のプリント

2018/11/2 C君

**1 認知機能強化のトレーニング**  
今日の認知機能強化のトレーニングを体験して、感じたことや、気付いたこと等を書いてみよう。  
(今日の認知機能強化のトレーニングは「聞く」や「覚える(ワーキングメモリ)」に関わるトレーニングでした！)

**2 宿題の確認**  
(1) 前回9/12のプリントの内容を思い出そう！

1	...	...	...	...	...
2	...	...	...	...	...
3	...	...	...	...	...
4	...	...	...	...	...
5	...	...	...	...	...
6	...	...	...	...	...
7	...	...	...	...	...
8	...	...	...	...	...
9	...	...	...	...	...
10	...	...	...	...	...
11	...	...	...	...	...
12	...	...	...	...	...
13	...	...	...	...	...
14	...	...	...	...	...
15	...	...	...	...	...
16	...	...	...	...	...
17	...	...	...	...	...
18	...	...	...	...	...
19	...	...	...	...	...
20	...	...	...	...	...
21	...	...	...	...	...
22	...	...	...	...	...
23	...	...	...	...	...
24	...	...	...	...	...
25	...	...	...	...	...
26	...	...	...	...	...
27	...	...	...	...	...
28	...	...	...	...	...
29	...	...	...	...	...
30	...	...	...	...	...

(2) 宿題(やってみての感想の高いものについて、挑戦してみる)をやってみての感想を書いてみよう。

挑戦内容	感想
1 蛍光灯の交換	
2 アイロン掛け	

○例えば、時代が進めば、電気ではなく、木で火起こし・・・とか、ガスではなく、薪を燃やして火をつける・・・とかだから、環境によって、必要な知識や技術は違ってくる。  
○また、その時代であっても、料理担当ではなく、狩猟の担当であれば、火起こしとかよりも、矢や弓の使い方や獣がいる場所を見つける知識等が必要になるかもしれない。  
○すべての知識や技術を身に付けるのは難しいから、自分がどんな生活をするのか、したいのか、求めるかによって、必要な知識や常識は変わって来ると思われる。

(3) 「自分がどんな生活をするのか、したいのか、求めるかによって、必要な知識や常識は変わって来ると思われる。」について、どう思う？  
そのとおりだと思う そうは思わない よくわからない どちらともいえない

理由

今の時代は、生き方が変わる。  
自分が求める生き方を考えて、それに向けて必要な知識等を求めていくことが必要かもしれない。

↓

そこで、「学びの地図STEPシート」を書いてみよう。

【図 38】 3 回目 生徒 c のプリント

**3 目指したい姿から、自分の課題を、もう1回考えてみよう！**  
 誰だって直したいところや改善したい課題はあるはずで、それを全部一気に改善するのは無理。だから、将来どうなりたいか・・・から、今の自分を見つめて、取り組むべき課題を考えていくのが良さそう。  
 「学びの地図STEPシート」を書いてみよう。右の数字の順番に、書くといいよ。  
 一人で考えたり書いたりするのが難しい時には、先生と一緒に考えたり、書いたりしてみよう。

**学びの地図 STEPシート**

自立と社会参加に向けて ( ) 年後に目指したい姿 1

~~~~~

高校卒業までに目指したい姿 2

~~~~~

自立に向けて何を学び、身に付けたいか 4

~~~~~

どのような手助けが欲しいか 5

~~~~~

自立に向けての課題(困難さ) 3

【図 39】 3回目 生徒 a・b・c 共通のプリント

(ウ) 3回目における生徒の様子

展開の導入で行ったコグトレは、初回・2回目とは違うコグトレ（「聞く」「覚える（ワーキングメモリ）」の体験【図 35】）を行った。「聞く」コグトレを行うための、取組方の説明をそもそも聞き取ることができない様子が見られ、取り組めるかと心配になったが、何度かの説明を加えた後、模擬的な実施をする等の過程を経て、理解につながった。「最初とポン」「最後とポン」を例題とそれぞれ1問ずつ行うことができた。体験終了後に、初回・2回目でも説明した「認知」の働きについて再度説明し、さらに、次のような説明を付け加えた。

- ・自分の不得意な「認知」を知ることで、日々の生活の中で気をつけることが分かる。
- ・トレーニングによって、例えば「聞く」という「認知」を高めると、生活や仕事の場面で説明等を聞き取る際に役立つ。
- ・就く仕事に必要とされる「認知」を考えると、自分に向く仕事、向かない仕事等を考える際に役立つ。

生徒 a は、頷きながら説明を聞いており、生徒 b・c も、理解をしたという様子で聞いていた。後に書いたコグトレに関する感想として、生徒 a は、「意外とぼんやり聞いてしまっている。作業しながらだと大変」、生徒 b は、「なにか1つのことに集中するくせがある」と書いていた。

展開の2つ目として、「自分の課題を考えよう」の学習では始めに、2回目の授業の際に出した宿題の確認を行った。2ヶ月の間が空き、3人とも宿題のことはすっかり忘れていたが、それは想定内のことであったので、前回やった内容と宿題の内容を、用意してきた個別のプリントで確認した。また、「課題について考えよう」の学習について、新たな気づきが得られるような視点を紹介した【表 24】。

【表 24】生徒たちへの新たな視点の紹介

生徒	本人たちから出された「課題」	新たな視点の紹介
生徒 a	「我慢ができるようにしたい」	A→B→Cのルートではなく、C→B→Aの逆ルートで考える視点（行動から自分は何を得ているか、というところから、行動を見直していくという視点）
生徒 b	「書きミスをなくしたい」	軸表のようなもので分類して考える視点（書きミスしにくいだけでなく、自分に合った方法について、取組やすさから見ていく視点）
生徒 c	「知識・常識を身に付けたい」	時代が違えば、役割が違えば、欲しい知識等は違うという話をするこゝで、知識・常識は、環境や役割等で変わってくるという視点

生徒 a は、【図 36】で、前回に行った A（直前のできごと）→B（行動）→C（結果）の流れについて、復習することから始めたが、記入が進まなかった。何とか記入した後にも、「とりあえず授業に向かってしまえば、授業に出ることができる」と話し、「何も考えずとも、授業に向かうことをしさえすれば自分の課題は解決」と話していた。生徒 a については、授業時の表情が優れず、授業以外の何らかの要因もあっての、こうした発言と見ることもできると感じた。生徒 b は、【図 37】で、軸表の捉えについて勘違いをして記入していたが、説明後は、軸表を理解した上で分類し、「取り組みやすく、書きミスしにくいと自分が考える順番」が分かったようであった。生徒 c は、【図 38】の宿題の感想記入で、「蛍光灯の交換はやっていないけど、電気が感電しないようにすることはやった」と書いており、家事について、最近挑戦した内容について記していた。また、指導教員が、「もし時代が違って、もし役割が違ったら、持っていたい知識や常識は違うよね」という話にも「そうですね」と答えていた。

宿題の確認後、「目指したい姿から今の自分の課題や身に付けたいことを考えて欲しい」ということを伝え、学びの地図 STEP シートに記入をさせることとした【図 39】。

生徒 a は、全く記入できずに、プリントを見つめたり、ぼんやりしたりしていた。

生徒 b は、全ての欄に自分の思いを書くことができた。10年後に目指したい姿に「結婚して子どもがいてめちゃハッピー（本文のまま）」と書いており、「仕事は？」と尋ねると、「人間関係が良くて、自分が楽しめる仕事につきたい」と話したので、それを記入するように促したところ、記入した。

生徒 c は、10年後の目指したい姿に「仕事をしながら店の手伝いをする」を書き、高等学校卒業までに目指したい姿は「コミュニケーションをあげたい（本文のまま）」と書いており、現状の課題は「人見知り」と書いていた。生徒 c は、自分の課題について、しっかりと捉えられているように感じた。

学びの地図 STEP シート記入中に、授業終了時間となってしまったため、3人には授業後に、本時の振り返りシートと3回の授業を終えてのアンケートへの記入をさせた。本時の振り返りシートは、初回・2回の反省を踏まえ、授業内容と感想のみのシンプルな内容とした。それぞれが感想について、スムーズに記入していた。

また、生徒 a は、学びの地図 STEP シートへの記入が授業時間内にできなかったため、本人の了解を得て、授業後の時間で面談を行いながら、本人の話した内容を指導教員が記入する形で作成した。生徒 a は、実際に話した時間が良かったと話し、本時の振り返りシートはこの聞き取り後に記入したが、感想には、「話していくうちに自分の事を見つめ直すことができた」と記入していた。生徒 a は、授業時の様子とは異なり、自分のことを積極的に話す様子が見られ、表情は良かった。

#### (エ) 成果と課題

3回目の成果は、「自分の課題」について、2回目とは異なる方法で再考するという取組により、2回目とは違った生徒たちのそれぞれの思いを引き出すことができたことである。2回目の実践では生徒たちが表出した「課題」そのものを具体的に考えていくという活動を行ったが、その課題は自立に向けての課題であるのか、生徒の理解は不十分なのではないかと感じるものであった。その反省をもとに、3回目の実践では、自分の目指したい姿から課題を考える学習を行うこととした。サンプルパッケージの一つとして「聞き取りシート」として既に作成していた学びの地図 STEP シートを、課題について考える学習として使えないかと考え、そのシートに書く順を示す等して多少の改変を加えたものを使用することとした。

生徒 a は、心理的なことがあるのか、授業中、あまり表情がよくなく、シートの記入も一切出来なかった。授業後に、今、考えていること等をゆっくり聞き取る中で、指導教員による記入でシートを作成した。指導教員の投げかけによって生徒 a が表出した内容であったが、生徒 a の思いを聞き取ることは、一定程度はできた。

生徒 b は一人で記入し、内容的には幼さや単純さが見られたものの、生徒 b の思いが率直に感じられるシートを書き上げた。

生徒 c も、一人で書き上げ、内容としては、目指す姿「仕事をしながら店を手伝う」に向けて、自分の課題は「人見知り」であり、身に付けたいことは「コミュニケーションの力を上げること」としており、自分の状況を現実的に捉え、また、論理的な思考についてもある程度できていると気付かされた。生徒 c は、初回の授業の際に、自分の課題は「知識・常識を身に付けること」と話していたが、今回の学びの地図 STEP シートでは、「コミュニケーションをあげる（本文のまま）」についての課題を記入しており、課題について表出される内容に変化が見られた。生徒 c にとって、「目指す姿」からの思考により、自分の中にある思いに気付くきっかけとなったのではないかと考える。

課題として、授業の流れがある。2回目の実践では、「課題」について考える機会を持ったが、3回目の実践で行った「目指したい姿から自分の課題を考える」を2回目の実践で行い、3回目の実践で、それについての共有や意味付けを図ることができれば良かったと感じている。生徒たちが表出した「課題」を受け止め、それは目指したい姿から見て、本当に課題であるのかということについて、考えさせる時間を設定するべきであった。

一方で、初回・2回目の授業における学習が、結果として、教員が生徒の実態を把握する機会になったという側面がある。初回・2回目の指導とその指導における生徒の様子を踏まえたことで、3回目の指導では、目指す姿からの自己理解を深める学習の必要性を考えるに至った。生徒の実態を把握し、それを具体的な指導につなげていくことの重要性を感じた。

#### 4 実践の分析と考察

キャリア発達を支援する自立活動の授業実践を行い、目標並びに内容、手立て等が対象生徒の様子や変容等から見て、適切なものであるかを検討するために、実践校において、授業実践を3回行ってきた。3回の実践を参観した対象生徒のクラス担任の教員から、面接法にて、意見を聞いた。クラス担任からの話は、自立活動の内容は、今回の実践に関しては、生徒の実態から見て概ね良好であったものの、自立活動は、自分の課題という難しいテーマを扱うため、さまざまな留意する点があるという回答を得た。具体的には、コグトレは、作業的で取り組みやすいので、取り組む目的を理解させた上での取組は有用であること、さらには、生徒と教員の信頼関係の重要性等についての話を聞くことができた。

クラス担任の話
3回目の授業について
<ul style="list-style-type: none"> <li>課題を考える学習について、生徒はしっかりと取り組むことができた。関係ができており、相手を思いやる気持ちがあったことによる所も少なくないと考えられる。通級指導を必要とする社会性に課題を抱えた生徒にも有効かどうかは、検討を加える必要がある。</li> <li>今回の学習は、2回目と同様、3人が同じ場所で同じ時間に違う内容について取り組むというものであった。個別のワークシートを使うことで、各自が学習を進めることができた。課題を有する生徒の多くは一对一で対応してくれることを望んでいる。そうした生徒への対策にも、留意する必要があるのではないか。</li> </ul>
認知機能強化のトレーニング（コグトレ）について
<ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ、何のためにやっているのかを分かって行う認知機能強化のトレーニングは、有用ではないか。</li> </ul>
「課題について考えよう」について
<ul style="list-style-type: none"> <li>学びの地図 STEP シートを使った学習は、課題について無理に考えるという側面もあったと思われる。</li> <li>学びの地図 STEP シートの使用は、生徒cにとっては、新たな思いが引き出される形となりよかった。</li> <li>記入した課題が、本当に自分の課題なのか、という視点を、生徒自身が持つことは大事なのではないか。課題を自覚することは簡単なことではないし、課題に気付けば、半分解決したようなものなので、気付きについての学習をしっかりと行えればよい。</li> <li>課題について、気付かせたり考えさせたりする学習に、絶対的なものはないと考える。気付かせたり、考えさせたりするきっかけづくりとして、何が有効なのかを考えることが重要かもしれない。楽しくやれる学びかどうかも、重要な視点なのではないか。</li> </ul>
生徒は主体的に自分の課題に向き合っていたか。
<ul style="list-style-type: none"> <li>難しかったと思う。しかしながら、欠席や遅刻もなく、この授業へしっかりと臨めたことの意味は小さくないと思われる。自立活動になっていたと思われる。</li> </ul>
その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>今回は、初回の交流等で関わりができたのでよかったが、教員と生徒の関係性がないところで、自立活動を行うことは、ハードルが高いと思われる。自立活動を行う上では、信頼関係が重要である。その構築についても、考えておく必要があるであろう。</li> </ul>

また、3回の授業を終えての実践の対象生徒のアンケートからは、次のような内容が示された。

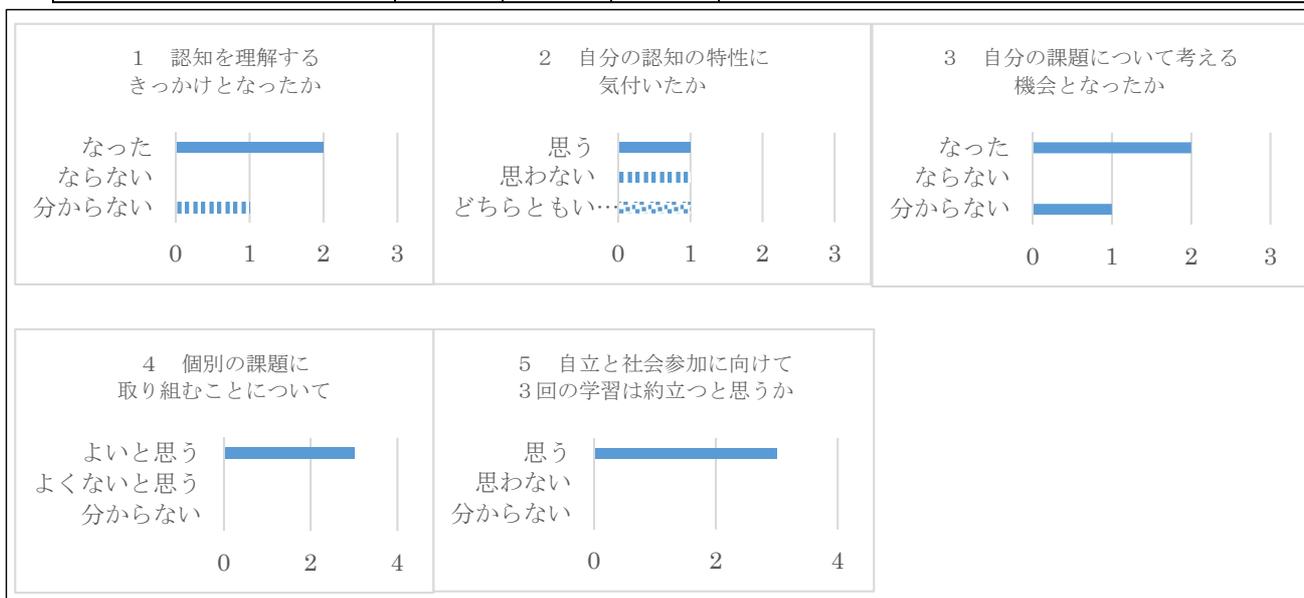
生徒aは、授業について、自分の課題を考える機会になったと感じ、自立と社会参加に向けて役立つと回答した。

生徒bは、認知機能強化のトレーニングは、自分の認知の特性について気付く学びとなり、自分の課題について考える学習はよい機会となったと考え、自立と社会参加に向けて役立つと回答した。

生徒cは、課題について個別の内容で学ぶことについてよいと感じ、自立と社会参加に向けて役立つと回答した【表25】、【図40】。

【表 25】 実践の対象生徒のアンケート

	生徒 a	生徒 b	生徒 c	記述
1 認知機能強化のトレーニングは、認知を理解するきっかけとなったか	分から ない	なった	なった	生徒 b…トレーニングで自分のことを知れた 生徒 c…いろいろ知れた
2 認知機能強化のトレーニングを行ったことで、自分の認知の特性に気付いたか	思わな い	思う	どちら ともい えない	生徒 a…意外とぼんやり聞いていることに気付いた 生徒 b…書きミスに気付けたから 生徒 c…どの程度か分からないから
3 自分の課題を考える学習や学びの地図 STEP シートの学習では、今の自分の課題について考える機会となったか	なった	なった	分から ない	生徒 b…自分の課題について考えれたから
4 自分の課題について考える学習では、プリントの内容が一人一人で異なっていた。個別の課題に取り組むことについてどう思うか	よいと 思う	よいと 思う	よいと 思う	生徒 b…いろいろな人の考え方が知れたから 生徒 c…人それぞれだから
5 自立と社会参加に向けて、3回の学習は役立つと思うか	思う	思う	思う	生徒 a…話してて気付くことが多かった 生徒 b…自分の課題を見つけれたから 生徒 c…いろいろ分かった



【図 40】 対象生徒アンケートの結果（回答数 3 人）

生徒3人が肯定的な表現をしたのは、「個別の課題に取り組むことについて」と「自立と社会参加に向けて3回の学習は役立つ」という回答内容であった。この回答からは、自立と社会参加に向けての気づきを得る機会になったと推測できる。また、全員一致ではなかったものの、2人が肯定的な表現をした、認知機能強化のトレーニングや自分の課題や自立に向けての現状を考えたことは、機会の提供としてはよかったと感じている。

以上のクラス担任からの聞き取りや実践の対象生徒のアンケート内容から、実践について、下記のように考察した。

(1) 内容

ア 認知機能強化のトレーニング

- (ア) 異なった種類の認知機能強化のトレーニングを体験することは、「認知」の働きや自己の「認知」の特性を知る機会としては有用である。
- (イ) 「認知機能強化のトレーニング」を行う際には、それをなぜ行うのか、何のために行うのかを仕事の場面等の具体例を踏まえて説明することにより、「認知」の特性等への理解や気づきを得られる。

イ 「自分の課題について考えよう」

- (ア) 学びの地図 STEP シートの取組には個人差があるので、指導教員が丁寧に関わり、問い掛けにより内容を深めて記入を促したり、記入の難しい生徒とは面談をしたりする等して、聞き取ったり、書き取ったりしていくことが必要である。
- (イ) 学びの地図 STEP シートは、生徒の思考や表出について、指導教員が理解する有用な資料となる。
- (ウ) 課題について考える学習は、何かをやりながら話をする等、生徒個々の実態によってさまざまな学び方が考えられる。

(2) 手立て

- ア 同じ時間に同じ場で複数の生徒が学ぶ時には、個別に取り組めるワークシートを用意することは有用。しかしながら、内容や生徒の実態から見て、個に十分な時間がとれるか等の検討を行うことが必要である。一対一の対応の時間が確保ができるとよい。

(3) その他

- ア 自立活動は、自分の「課題」という非常に難しいテーマを扱うので、指導教員と生徒の関係性ができていることが必要になる。
- イ (3)アの生徒の情報収集を行う上で、クラス担任から生徒の様子を聞いたり、指導教員が通級による指導の様子を担当に伝える等の情報交換は必要となる。特に、クラス担任による通級による指導の授業参観後に、授業の学びの様子を共有することは、有用である。



(4) (1)～(3)を踏まえてサンプルパッケージへ反映できる内容

- ア (1)アを踏まえた、認知機能強化のトレーニングを行うに当たっての留意点の掲載  
→「ワークシート編」
- イ (1)イを踏まえた、学びの地図 STEP シートの記入に当たっての留意点の掲載  
→「準備編」
- ウ (2)(3)を踏まえた、通級による指導を行うに当たっての留意点の記載  
→「ワークシート編」

実践を踏まえて見えてきたものは、3回のみの実践であっても、多様な意見が得られたという点である。今回の実践は、クラス担任1人と生徒3人の計4人からお話を伺ったり、記入してもらっ

たものである。そこでの、授業における内容や手立てに関する捉えは多様かつ個別であり、よい内容や手立てを絞ることは難しく、汎用性を求めることはできないということを実感するものであった。

今回は、仮想の場における実践であり、通級による指導の進め方等に関する事前面談等は行っていないが、より具体的な内容や手立てについて、面談等で共通理解をしていくことが、個別に対応したよりよい自立活動の在り方を支えると考えた。

## 5 サンプルパッケージの分析と考察

昨年度、高等学校における通級による指導の研究に関わった紫波総合高等学校の通級担当の教員2人に、サンプルパッケージ2編を見てもらい、回答を得た。「準備編」については、特に、「学びの地図 STEP シート」と「自立に向けてのチェックシート」の様式について、日頃の生徒の支援に関わるさまざまな実態や通級による指導に関わる課題と合わせながら聞くことができた。

<b>「準備編」について</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学びの地図 STEP シートについて…</li> </ul>
<p><b>【書き方について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 記入する際に、本人の努力でできること、一次的支援でできること、個別の指導を要することの区別を明確にするとよいのではないか。</li> <li>• 記入する際に、自立についてのイメージについて尋ね、自立とは何かを明確にしていけるとよいのではないか。</li> </ul> <p><b>【様式について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 目指す姿から自分の課題を考えるのであれば、図中の順序性を表す矢印は逆でもよいのではないか。</li> <li>• 記入する際に、学校生活・学習・人との関わり・就労のどの点からでも尋ねていける様式になっているのではないか。</li> </ul> <p><b>【掲載に関わって】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「準備編」に、学びの地図 STEP シートと、「ワークシート編」の各ワークシートのミニ版を並列して載せると分かりやすいのではないか。</li> </ul> <p><b>【生徒の実態に関わって】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 何を学びたいかということが生徒から出てこない場合、教員が言葉を補って聞き取っていく必要があるのではないか。</li> </ul> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 学びの地図 STEP シートは、課題を克服していくために、何が必要かを生徒に考えさせる材料になるのではないか。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自立に向けてのチェックシートについて…</li> </ul>
<p><b>【回答方法について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒は、未経験でも「できる」と回答してしまいがちなので、「やっている」「やったことがない」という項目を起こした方がよいのではないか。</li> </ul> <p>• その他、「準備編」全体へのご意見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒指導要録の様式と記載の方法についても、今後明示されると分かりやすいのではないか。</li> <li>• 就職用の調査書の記載箇所と記載方法についても、明示されると分かりやすいのではないか。</li> </ul>
<b>「ワークシート編」について…</b>
<p><b>【活用方法について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1時間のワークシートだが、生徒の実態に合わせて2時間にする等の工夫ができるのではないか。</li> <li>• キャリアについて順序立てて書かれているので、どういう方向性で指導してよいか分からない</li> </ul>

時の資料になるのではないか。

【その他】

- ・ 想定される人物の登場によって、特性に合わせた指導が見やすくなっているのではないか。

その他

- ・ 生徒には、就職先での暗黙の了解と思われる事柄について、あらかじめ伝えておく必要があるのではないか。(例として、守秘義務、報連相、休暇・やむを得ない遅刻・早退・欠勤の連絡方法、等。)

以上の紫波総合高等学校の通級担当の2人の教員からの聞き取りから、下記のように考察した。

(1) 「準備編」について

ア 学びの地図 STEP シート

(ア) 生徒の気付きがない場合、学びの地図 STEP シートを用いていくことによって、気付きを持たせたり深めたりできる。

(イ) 学びの地図 STEP シートを用いることによって、本人の考える自立のイメージを明らかにし、個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成につなげられる。

イ 自立に向けてのチェックシート

「やっている」という経験を問う内容にすることで、生徒が記入しても客観的な把握ができるので、実態把握、個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成に役立つ資料となる。

(2) 「ワークシート編」

ア 1時間の指導案を基本として、生徒の実態に合わせてアレンジして使える。

イ さまざまな生徒の困難さ(主に職場における暗黙のルールの理解)を把握し、それに対応していく内容を「発展編」として作成できるとよい。

(3) その他

生徒指導要録と就職用の調査書について、表記の仕方にまだ確認すべきところがある。



(4) (1)～(3)を踏まえてサンプルパッケージへ反映できる内容

ア (1)アを踏まえた、学びの地図 STEP シートの様式の文言の見直し

→「準備編」

イ (1)イを踏まえた、自立に向けたチェックシートの文言の見直し

→「準備編」

ウ (3)を踏まえた、指導要録記載に向けての留意する点についての情報提供

→「ワークシート編」

紫波総合高等学校の2人の教員からは、実際の生徒に使用することを想像しながら、「準備編」の学びの地図 STEP シートや自立に向けてのチェックシートの語句や内容等について意見を聞いた。各シートについては、誰が用いてもスムーズに理解でき、理解に齟齬のない語句を用いる必要性や、生徒の実態に合わせて選択肢を用意する重要性を認識した。生徒の自己理解が深まっていない中、各シートを有効に活用することで気付きにつなげ、通級による指導を行う難しさを軽減させたいという現場の思いを、改めて考えさせられた。また、「ワークシート編」の内容については、生徒の実態に応じてアレンジして使えるという話の一方で、より多様な実態への対応の参考になるようなワークシートが必要とされることが分かった。さらに、職場における「暗黙の了解」について、可視化して伝えていくためのサンプルとなるような、ワークシートの作成が必要と感じた。

生徒指導要録や調査書の記載については、高等学校における通級による指導が初めてであることから戸惑いがあることが分かった。記載箇所の確認や記載内容の必須事項、個別の指導計画の目標

とどのように行うのか、単位の認定はどのような評価のもとで成り立つのか等、確認や調整すべき点は多い。また、企業等への情報提供の在り方や内定先企業への「移行」支援に関わる問題でもあり、今後検討されていく必要がある。

## VIII 研究のまとめ

### 1 全体考察

本研究は、キャリア発達を支援する自立活動について、理論と実践の二つの側面から探り、その提案を通して、高等学校における通級による指導の充実につなげていこうとするものであった。

研究の基本構想に基づき、理論ベースでは、サンプルパッケージとして「準備編」並びに「ワークシート編」の作成を行い、実践ベースでは、仮想的な場における自立活動の授業実践を3回行った。また、授業実践の際には、サンプルパッケージの内容を参考にし、授業実践の内容をサンプルパッケージに生かすという双方向の流れで行うこととし、同時進行で進めてきた。

その結果、高等学校での通級による指導や自立活動に関わっての理論や実践について、その具体を明らかにしていくことができた。以下、研究の構想の手立ての項立てに沿って、考察する。

#### (1) サンプルパッケージ「ワークシート編」

個に応じた支援である自立活動において、サンプルとしての教材をパッケージで示し、想定される2名の人物に合わせた個別支援の具体例を併せて示した。サンプルだけではなく具体例も示したことにより、昨年度の研究に関わった高等学校の教員から、生徒の特性に合わせた指導の参考になるとの感想が得られた。このことから、パッケージと想定される人物に合わせた個別支援の具体例を示したことにより、キャリア発達を支援する自立活動のイメージを持つことが可能になったと考えられる。

#### (2) サンプルパッケージ「準備編」

高等学校の教員にとっては、「見立て」の参考になる資料が必要と考えた。自立活動が始まるまでの流れに着目し、三者面談等で活用できる「目指す姿の共有」のための学びの地図 STEP シートを作成し、個別の指導計画の作成に向けての「見る」の一例を示した。また授業実践において、学びの地図 STEP シートを教材として活用したところ、本人の「目指したい姿」や自立に向けた課題を引き出すことができた。

また、個別の指導計画の項目選定、実態把握、目標立てについての参考資料となるものを提示したいと考え、個別の指導計画作成に関わる参考資料とを作成して、目標設定に向けての5ステップを作成した。昨年度の研究に関わった高等学校の教員から、個別の指導計画を作成する際の参考になるとの感想が得られた。このことから、「見立て」に関する様式や参考資料の提示により、キャリア発達を支援する自立活動のイメージを持つことが可能になったと考えられる。

#### (3) 実践

3回の実践では、自己理解を進めるという目標に向けて、さまざまな学習活動を行った。3回目の学習活動で、学びの地図 STEP シートを使用したところ、生徒によっては、自分が日頃考えていた課題と、学びの STEP シートを記入する中で考えた課題が異なるという様子が見られ、課題について新たな気づきを得たと思われる。このことから、生徒が自己理解を進める一つの方法として、学びの地図 STEP シートを活用できると考えられる。

一方で、本人から出てきた課題と指導教員が見立てた生徒の課題が異なるということが見られた。その差異について、なぜ起きているのか、それをどのように近付けていくことができるのか等の検討を行うことはできなかった。通級による指導実施予定の高等学校の教員が、生徒の気づきの重要性を話していたが、「目指す姿の共有」を図っていく過程については、課題が残った。

#### (4) 全体を通して

サンプルパッケージは、高等学校の教員がキャリア発達を支援する自立活動をイメージしやすくするために作成した。国立特別支援教育研究所の若林上総主任研究員のご助言から、通級による指導の学びを生徒がどのように他の場で生かしていくかについて明らかにする必要性が話され、サンプルパッケージ「ワークシート編」の想定される人物が思いを語るところで、生徒たち自身が学びを生かそうとする姿勢を描いた。また、その姿勢を応援する通級による指導教員の指導の方向性についても、指導上のポイントとして示した。しかし、通級による指導の学びを生かしていくには、通級による指導を受ける生徒や指導教員のみならず、クラス担任や教科担任がどのように関わっていくか、またそうしたことをどのように学校の教育活動の中にどのように位置付けていくことかということを確認し整理することが重要になる。そうした通級による指導外の場面における関わりが、通級による指導の充実に結びついていく様子については、「学びの連続性」を含めて、示すことができなかった。

## 2 研究の成果

### (1) 高等学校におけるキャリア発達を支援する自立活動の基本構想

高等学校におけるキャリア発達を支援する自立活動について、通常教育課程で行われるキャリア教育の内容を踏まえた上で、特別教育課程としての通級による指導の在り方について、基本構想としてまとめたことは、自立活動の学びの在り方を考察する上で、有効であった。

### (2) 高等学校におけるキャリア発達を支援する自立活動の授業実践の分析と考察

通級による指導におけるキャリア発達を支援する自立活動について、個別の指導計画に基づいて、自立活動の内容を検討し、授業実践を行ったことは、前例の少ない高等学校における自立活動の実践に関わる指導例や指導に関わる留意点を知る上で、有効であった。

### (3) 高等学校におけるキャリア発達を支援する自立活動のサンプルパッケージの作成

「準備編」として、「見立て」に関する資料をまとめ、「ワークシート編」として、35 時間分のワークシートを作成したことは、指導教員等がキャリア発達を支援する自立活動の指導についてイメージしやすいものを作成できたことと捉えられる点で、高等学校における通級による指導の充実にについての一提案として、有効であった。

## 3 今後の課題

### (1) サンプルパッケージの活用について

サンプルパッケージを、個別の指導計画や個別の教育支援計画に基づいて、どのように改変して活用していけるか等、その有用性についての検証が必要である。

### (2) 本研究では扱えなかった課題について

本研究では扱えなかったが、今後、高等学校における通級による指導において、検討されていく必要性のある課題が、本研究の検証等を行う過程で明らかになった。これらの課題を検討することは、高等学校における通級による指導の充実につながっていくものと考え、以下に掲載する。

- ・対象生徒となるまでの、生徒自身の困難さの「気づき」と教員による「気づき」の涵養について
- ・自立活動を行う上での前提としたい、生徒と指導教員の関係性の構築の在り方について
- ・生徒指導要録への記載等について
- ・調査書への記載等について

↳ 企業等への情報提供の在り方と個別の教育支援計画等を用いた企業等への「移行」について

<おわりに>

長期研修の機会を頂きましたことに感謝申し上げます。研究に対するご助言を頂きました，国立特別支援教育総合研究所の主任研究員の若林上総先生，紫波総合高等学校の先生方，また，実践にご協力をいただきました，実践校の先生方と生徒の皆さんに，心からお礼を申し上げます。関係機関各位，所属校の先生方にお礼を申し上げます。

## Ⅸ 引用文献および参考文献

### 【引用文献】

- 岩手県教育委員会 (2018), 『高等学校における「通級による指導」のための手引』 p. 7, pp. 15-16
- 岩手県教育委員会 (2010), 『いわてキャリア教育の手引きーキャリア教育の推進に向けてー高等学校編』 p. 1, pp. 5-6, pp. 38-39
- 岩手県教育委員会 (2010), 『いわてが目指すキャリア教育』 リーフレット p. 2
- いわてで働こう推進協議会 (2017), 『平成29年度 岩手県の若年者雇用動向調査結果』 p. 2, p. 4
- 岩手県立総合教育センター(2018), 『高等学校における「通級による指導」の導入に関する研究ー校内教育支援の体制面と運用面の整備を通してー』 p. 25
- 川崎市教育委員会 (2015), 『研究紀要』 「自己を見つめる力を伸ばすキャリア教育と自立活動」 p. 91
- 高知県教育委員会 (2013), 『「高等学校生採用に関する企業アンケート調査」報告書』 pp. 8-9
- 国立教育政策研究所(2012), 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書』 p. 322, p. 328
- 国立教育政策研究所 (2014), 『高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究』 p. 372
- 国立教育政策研究所 (2016), 『再分析から見えるキャリア教育の可能性』 p. 10, pp. 66-67
- 国立特別支援教育総合研究所 (2018), 『特別支援教育における教育課程の総合的研究ー通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当てて』 pp. 81-82
- 中央教育審議会 (2011), 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 p. 1, pp. 16-17, pp. 25-26, p. 30
- 中央教育審議会 (2016), 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』 p. 21
- 内閣府 (2018), 『子ども若者白書』 p. 17, pp. 19-20, p. 21, p. 48
- 文部科学省 (2018), 『高等学校学習指導要領』 p. 14, p. 19, pp. 20-21
- 文部科学省 (2009), 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部)』 p. 12
- 文部科学省 (2018), 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部)』 p. 23, p. 25, p. 28, p. 75, pp. 50-102
- 文部科学省 (2018), 『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』 p. 3
- 文部科学省 (2018), 『学校基本調査ー平成30年度結果の概要ー調査結果の概要 (初等中央教育機関, 専修学校・各種学校)』 p. 19
- 文部科学省編著 (2018), 『障害に応じた通級による指導の手引』 p. 27
- 文部科学省 (2018), 『第42回 全国特別支援教育センター協議会総会 研究協議会 (京都府大会) 特別支援教育行政の現状と課題』 p. 17
- 渡邊昭宏 (2015), 『自立活動の授業 de ライフキャリア教育』, 明治図書 p. 22
- 若林上総 (2018), 『高等学校の通級指導教室における「自立活動」の位置づけ』, 特別支援教育の実践情報 pp. 34-35
- 渡辺三枝子編著 (2007), 『新版 キャリアの心理学 キャリア支援への発達のアプローチ』 ナカニシヤ出版 p. 8

### 【参考文献】

- 岩手県教育委員会 (2018), 『岩手の教育』
- 岩手県教育委員会 (2017), 『岩手の特別支援教育』
- 岩手県教育委員会 (2018), 『学校教育指導指針』
- 岩手県教育委員会 (2018), 『学校教育指導指針 (特別支援学校)』

- 岩手県教育委員会 (2018), 『高等学校における「通級による指導」実施のための手引』
- 岩手県教育委員会 (2018), 『特別支援教育指導資料 No.45 通級指導教室経営の手引』
- 岩手県教育委員会 (2010), 『いわてキャリア教育の手引きーキャリア教育の推進に向けてー高等学校編』
- 岩手県教育委員会 (2010), 『いわてが目指すキャリア教育』, リーフレット
- W i n g P R O 教材チーム (2017), 『キャリア講座教材集』, ジアース教育新社
- 梅田真理 (2016), 『特別支援教育をサポートする読み・書き・計算 指導事例集』, ナツメ社
- 香川邦生, 藤田和弘 (2000), 『自立活動の指導 新しい障害児教育への取組』, 教育出版
- 香川邦生 (2015), 『分かりやすい「自立活動」領域の捉え方と実践 個々の実態に応じた行動要素の活用』, 教育出版
- 鹿島真弓・吉本恭子 (2015), 『中学校 学級経営ハンドブック 学級環境づくり・仲間づくり・キャリアづくり』, 図書文化
- 株式会社就職塾, NPO かながわ就職支援研修センター 加藤敏明監修 (2017), 『高等学校生の就職活動オールガイド』, 成美堂出版
- 菊地一文 (2013), 『実践キャリア教育の教科書』, 学研教育出版
- 黒沢幸子 (2012), 『ワークシートでブリーフセラピー』, ほんの森出版
- 「月刊高等学校教育」編集部 (2018), 『高等学校新学習指導要領 全文と解説』, 学事出版
- 北出勝也 (2009), 『学ぶことが大好きになる ビジョントレーニング』, 図書文化
- 厚生労働省 (2012), 『中学校・高等学校におけるキャリア教育実践テキスト』, 実業之出版社
- 厚生労働省 (2017), 『S U P P O R T B O O K 2017 高等学校生のための就職活動サポートブック』
- 国立教育政策研究所 (2011), 『高等学校における学習の評価の 実態把握と改善に関する研究 研究成果報告書』
- 国立教育政策研究所 (2002), 『児童・生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』
- 国立教育政策研究所 (2012), 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書』
- 国立教育政策研究所 (2014), 『高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に 関する総合的研究報告書』
- 国立教育政策研究所 (2016), 『再分析から見えるキャリア教育の可能性ー将来のリスク対応や学習意欲, インターンシップ等を例としてー』
- 国立特別支援教育総合研究所 (2018), 『高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブック おさえておきたい8つの課題と課題解決のための10のポイント』
- 国立特別支援教育総合研究所 (2018), 『基幹研究(発達・情緒班)発達障害等のある生徒の実態に応じた高等学校における通級による指導の在り方に関する研究ー導入段階における課題の検討ー(平成28年度~29年度)研究成果報告書』
- 坂野公信監修 (2016), 『改訂 学校グループワーク・トレーニング』, 図書文化
- 坂本篠樹 (2017), 『基礎能力アップパズル 発達障害のある子の認知機能を高めよう!』, 学研プラス
- 笹森洋樹, 廣瀬由美子・三苫由起雄 (2009), 『新教育課程における・・・発達障害のある子どもの自立活動の指導』, 明治図書
- 嶋田洋徳・坂井秀敏・菅野純・山崎茂雄 (2010), 『人間関係スキルアップワークシート』, 学事出版
- ジョブカフェいわて (2017), 『SHAKAI J I N S T A R T G U I D E B O O K』
- 全国高等学校進路指導協議会 (2018), 『高等学校生の進路ノート スタンダード 未来の創り手としてのわたし』, 実務教育出版
- 滝充編 (2001), 『ピアサポートではじめる学校づくり 小学校編 「総合的な学習の時間」に行う「心の教育」』, 金子書房
- 恒成尚江 (2014), 『キャリア教育を生かした中学校の特別支援教育アイデア 50』, かもがわ出版

- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編 (2011), 『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック』, ジアース教育新社
- 中野敬子 (2005), 『ストレス・マネジメント入門 自己診断と対処法を学ぶ 第2版』, 金剛出版
- 名古屋恒彦 (2013), 『知的障害教育発キャリア教育』, 東洋館出版社
- 長田徹・清川卓二・翁長有希 (2017), 『学校と企業と地域をつなぐ 新時代のキャリア教育』, 東京書籍
- 新里健・島袋有子 (2008), 『やってみようソーシャル・スキルトレーニング 33 学級経営に生かすSST』, グリーンキャット
- 古川勝也, 一木薫 (2016), 『自立活動の理念と実践 実態把握から指導目標・内容設定にいたるプロセス』, ジアース教育新社
- 本田恵子 (2007), 『キレやすい子へのソーシャルスキル教育 教室でできるワーク集と実践例』, ほんの森出版
- 三村隆男 (2004), 『図解 はじめる小学校キャリア教育』, 実業之日本社
- 宮口幸治 (2016), 『1日5分! 教室で使えるコグトレ 困っている子どもを支援する認知トレーニング122』, 東洋館出版社
- 宮口幸治 (2015), 『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化のトレーニング』, 三輪書店
- 文部科学省 (2012), 『共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告)』
- 文部科学省 (2016), 『高等学校における通級による指導の制度化及び充実方策について 高等学校における特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議 報告』
- 文部科学省 (2017), 『高等学校における「通級による指導」実践事例集～高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育事業』
- 文部科学省 (2011), 『高等学校キャリア教育の手引き』
- 文部科学省 (2011), 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)』
- 文部科学省 (2016), 『高大接続システム改革会議 最終報告』
- 文部科学省 (2018), 『高等学校生のための学びの基礎診断』リーフレット
- 文部科学省, 国立教育政策研究所 (2011), 『キャリア教育をつくる』
- 文部科学省, 国立教育政策研究所, 『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書—もう一歩先へ, キャリア教育を極める—』, 実業之日本社
- 渡邊昭宏 (2013), 『みんなのライフキャリア教育 「仕事力」 + 「暮らす力」「楽しむ力」で「生きる力」に』, 明治図書
- 学事出版, 『月刊高等学校教育』, ちょっと拝見 学校訪問 2018年4月号
- 東洋館出版社, 『特別支援教育』, 平成24年季刊No.46
- 東洋館出版社, 『特別支援教育』, 平成27年冬No.60
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会 (2013), 『キャリア教育の手引き 実践編』 ジアース教育新

#### 【引用 Web ページ】

- 岩手県政策地域部 調査統計課 (2017), 『学校基本調査 第12表 公・私立別, 市町村別進路状況, 進学率及び卒業者に占める就職者の割合』
- <http://www3.pref.iwate.jp/webdb/view/outside/s14Tokei/top.html> (平成30年8月30日閲覧)
- Geoge.Sugai (2009), 『School-Wide Positive Behavior Support and Response to Intervention1』
- [https://www.pbis.org/common/cms/files/pbisresources/Sugai\\_2009rSWPBS\\_RtI%20final\\_May25\\_2009.pdf](https://www.pbis.org/common/cms/files/pbisresources/Sugai_2009rSWPBS_RtI%20final_May25_2009.pdf) (平成30年5月2日閲覧)
- 厚生労働省, 『ジョブカフェにおける支援』
- [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/koyou/jakunen/jobcafe.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jakunen/jobcafe.html) (平成30年10月18日閲覧)

三省堂, 『大辞林 デザイン』

<https://www.webl.io.jp/content/デザイン?dictCode=SSDJJ> (平成 30 年 10 月 19 日閲覧)

文部科学省 (2008), 『体験活動事例集－体験のススメ [平成 17, 18 年度 豊かな体験活動推進事業より] 体験活動の教育的意義』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm) (平成 30 年 6 月 1 日閲覧)

【参考 Web ページ】

岩手労働局 (2018), 『平成 30 年 3 月新規高等学校卒業予定者の職業紹介状況』

<https://jsite.mhlw.go.jp/iwate-roudoukyoku/content/contents/iwate-koukou201802.pdf> (平成 30 年 4 月 11 日閲覧)

厚生労働省 (2018), 『平成 31 年 3 月新規高等学校卒業者の就職に係る推薦及び選考開始期日等について』

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000193580.html> (平成 30 年 7 月 27 日閲覧)

コグトレ研究会

<http://www.cogot.net/index.html> (平成 30 年 7 月 6 日閲覧)

ベネッセ教育総合研究所『大学生の学習・生活実態調査報告書』

[https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku\\_jittai/hon/daigaku\\_jittai\\_3\\_1\\_1.html](https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/daigaku_jittai_3_1_1.html)  
(平成 30 年 7 月 27 日閲覧)

文部科学省 (2002), 『シラバスの作成状況』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/028/siryu/attach/1401161.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/028/siryu/attach/1401161.htm) (平成 30 年 5 月 29 日閲覧)

文部科学省 (2008), 『体験活動事例集－体験のススメ』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055.htm) (平成 30 年 6 月 4 日閲覧)

文部科学省 (2004), 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために～』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/detail/1340401.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1340401.htm) (平成 30 年 6 月 4 日閲覧)

文部科学省 (2012), 『課題の整理と検討の視点』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/attach/1320011.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/attach/1320011.htm) (平成 30 年 6 月 6 日閲覧)

文部科学省 (2018), 『平成 30 年 3 月新規高等学校卒業予定者の就職内定状況 (平成 29 年 10 月末現在) に関する調査について』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kousotsu/kekka/k\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/15/1399265\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kousotsu/kekka/k_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/12/15/1399265_001.pdf) (平成 30 年 4 月 11 日閲覧)

文部科学省 (2018), 『平成 31 年 3 月新規高等学校卒業者の就職に係る推薦及び選考開始期日等について』

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000193580.html> (平成 30 年 7 月 2 日閲覧)